海上自衛隊生徒文集
「銀桜」第４号

第 10 期、第 11 期、第 12 期、第 13 期生徒　自啓会

「銀桜４号」
　どうも「銀桜３号」も発刊されている様子ですが、あまり出来が良くなかったのかな?と推察されます。
　第 11 期生徒梶原英樹氏が中心となって、第４号が発刊されたようです。
　投稿者は 10. 11. 12. 13 期生徒が中心で教官等も含まれいましたので、この際全部転記しました。文中空白の部分が散見され、「多分こうだろう」と推察される部分は判読訂正記載しましたが、判読不可能と思われる部分は「？」としました。
ご覧になった聡明な方は文字を当てはめて、ご判読下さい。
　また、当然ながら打鍵ミス等の間違いはご容赦下さい。

※　送り仮名、漢字等で明らかに違うものは訂正しましたが、漢字等（あて字）はそのまま記載しました。

編集者

目　次

生徒諸君へ贈る・・・・・・・・・・・・・・・・・・中村　重太　4
手軽にできる体の鍛え方・・・・・・・・・・・・・・大川　雅章　5
明治百年に思う・・・・・・・・・・・・・・・・・・今道　昌信　7
由美子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・香川　正博　10
生きがいという事について・・・・・・・・・・・・・・M　11
無題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・定道　広河　12
やってみなきゃ何事も・・・・・・・・・・・・・・・磯部　良夫　13
鶴一神社衰史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・K　15
我国において社会道徳は守られているか・梶原　英樹　17
幸福について・・・・・・・・・・・・・・・・・・岩崎　文雄　18

詩・短歌・俳句

学問・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・山岸　義宏　19
短歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・松田　真治　19
短歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・立川　正秀　19
短歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・梅澤　徹　19
短歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・川尻　和正　19
短歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・柳瀬　泰雄　20
江田島エレジー・・・・・・・・・・・・・・・・・後藤　清三　20
短歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・前田　一可　20
短歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・横山　孝幸　20
短歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・後藤　隆行　20
短歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・岡本　隆志　20
短歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・秋永　洋臣　20
冬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・渡辺　正一　20
祈り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・平塚　保男　20
涙『涙』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・上田　忠雄　20
シアワセの中デ・・・・・・・・・・・・・・・・・十期生徒某　21
後輩(おとうと)に贈る・・・・・・・・・・・・・・・〃　21
鏡を見て感じたこと・・・・・・・・・・・・・・・五十嵐　誠　21
ちっちゃな犯罪・・・・・・・・・・・・・・・・・目黒　誠　21
春そして春・・・・・・・・・・・・・・・・・・・武田　繁典　22
燃える心；・・・・・・・・・・・・・・・・・・・森尾　邦雄　22
にくくてかわいい奴・・・・・・・・・・・・・・・法土　猶典　22
たより・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・〃　23
そんな時・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・津金　鋭一　23
無題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・櫛部　裕行　23

永遠の足跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・平野　清文　24
無題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・中田　正治　24
ふるさとの心・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・飲村　勲　24
ちっちゃなぼうや・・・・・・・・・・・・・・・・・・佐藤二三夫　24
無題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・増田　吉助　25
青芽・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・川浦　栄一　25
親友・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・玉川　修　25
夢の世界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・増田　吉助　26
木塊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・武田　幸三　26
己・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・上村　龍生　26
自然と私・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・阪口　正次　27
君たちに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・上野　繁寿　27
何かいい事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・加村　良　28
顔・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小林富士夫　28
星・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・村崎　卓見　28
春・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・菅野　公夫　29
無題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・佐藤　清志　29
私と兄・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・実　稲義　29
叫び・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・松本　行正　29
夢・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・品川　三郎　30
君だったら・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・上田　公治　30
春の日に・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・大谷　和久　30
詩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・竹口　健二　31
若さゆえ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三国　育男　31
北国の春・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・石井　良一　31
人々・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一野　睦彦　31
夜汽車・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・〃　32
人生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・伊藤　修　32
雪の故郷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・馬場　耕一　32
スキー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・水野　勝幸　33
詩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・泉　利夫　33
雲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・隅田　保博　33
幸福者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・松村　薫　34
淡雪の悲しみ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・柳沢　章好　34
木蓮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・滝川　和夫　34
冬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・坂崎　学　34
山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・阪口　正次　36
オリオン座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・津吉　宣生　36

燃えるヤツ……高橋 紀禎 36
必死轟沈……竹永 峰男 38
うそのうそ……比留間新吉 48
放送劇「夜明け」……残井 清志 49
ユーモア……清水 利之 52
私の提案……宮本 光雄 53
腐臭弁護論……武蔵 教官 54
探検記と学生時代……太田 教官 56
山登り……後藤 孝行 57
旅路……松田 真治 58
雪……竹山 認 62
未来に思う……水野 善弘 65
人類最後の発明……松本 行正 66
みなさん手紙を書きましょう……重松 均 66
一眼回顧……岡村 良三 67
兄……村中 良 68
すばらしき体験飛行……中條 慶晴 69
誠に遺憾に存じます……小島 春雄 70
浦島太郎……梅澤 徹 72
平和主義……福本 耕作 73
駒ヶ岳を通る時……今村 孔久 74
朝……〃 75
この世は金……樋口 満生 75
精鋭なる自衛隊へ……長倉 俊一 76
青春をどう生きるか……平山 哲哉 77
休暇の休暇……上野 繁寿 79
初恋……吉田 哲夫 80
想い出……福留 和久 81
無題……穐廉 龍夫 82
伊勢・志摩国立公園……別所 和夫 82
小笠原バンザイ……山田 純一 83
感想……中島 正行 84
主観的・客観的の存在についての考え……堤 香志郎 84
夜空で一人考えた事……大丸 和英 85
親子関係……西山 三曹 85
編集記…… 87

「生徒諸君へ贈る」

生徒普通学　教官　中村　重太

生まれて初めての奉職に胸をはずませ、春雨のふる肌寒い朝梅の咲く術校の行程に立って早や二年が過ぎた。

昨夜も床につきながら二年前の日記に目を通しながらこの江田島で過ごしたあの日この日を思いうかべてみた。

数々の体験をさせてもらった。術校ならでの体験も数多くその面で貴重な日々を送ったと思う。

「退職するにあたり云々・・・・」という事であったが、将来文学的素養皆無の為何を書いて書面を潰したらよかろうか頓とあてがない。物理界科学界の近状を書く事なら多少は書けようが、教訓めいた内容のものはどうも筆が動かない。どうしても訓示が欲しければ日頃教務で興奮して駄弁っていた語を思い返してもらいたい。

しかし一言いいたい事がない事はない。それは「勉強せよ」という事だ。

（誰だ、チェーといった奴は？）

しかたないチェーと思う人が大部分だろう、それでよいのだ。誰だって人から指し図をされて心よく動けるものではない。

「勉強せよ」と言われればたとえ意気込んでいた人でもやりたくなくなるものだ。それが正常な感覚反応だと思う。でも今ここで言った「勉強せよ」と言う事は多少意味が違う。広い意味での勉強と思ってほしい。禁止されている事をやりたくなる事も見てはならない事を見たくなる事も、青年の性質として仕方のない感情だろう。その性質を立派に生かす事、即ちやりたい事をやり、見たいものを見る事、そしてそれを自分の生活の中に活用していく事が勉強だと思うのだ。

「好きな事をせよ」と言っても。セツナ的な感情におぼれて行動してはならない。学校がおもしろくない…「燃やしてしまいたい」と思ってもその人に人間性があれば燃やす事が本人にとって喜びであろうはずがない。必ず自責の念にかられるはずだ。一時的な感情におぼれて処理するのではなく、長い経験による知識から判断しなくてはならないだろう。体験のない諸君にこの事は言えないだろうが可能な限りの体験はすすんでやるべきだが、未成人としての謙虚な判断態度も必要になってくる。何をやっても良いと言うのではない。そこには自ら範囲がある。

規律正しい生活の中に苦痛を感じている人も居るようだが、まだ未成人である事を自覚しその許せる範囲内で大いに青春を楽しんで欲しい。山や海の自然に恵まれその中で体力をつくり、又外部の人と比べるとより規律正しい生活を送り、自制心のある決断力のある人格を完成している若者がいずれは国民をリードし国民の尊敬を集める自衛官になってくれるものと期待している。

諸君の年頃には、大いに科学に興味をもったものだった。丁度人工衛星第一号を打ち上げた時が十七才であった。その時分、人工衛星はどんな知己学的な知識を利用したものか友達とろんそうしたものだが、まさか十年もたたない今、宇宙中継に利用され気象観測、天

体測定にまた船舶の安全航海にまた戦術に使用されるとは凡人には考えもつかない夢だった。十年一昔と言う、まったく科学部門の発達は素晴らしいものがある、今は人がゆうような夢が明日には実現可能な世の中になったのである。昔の人の遺産である本等にふれ、偉人の心情や考え方に触れる事も立派だがさらに人の考えた事のない事をも追って欲しい。

青春の諸君はこれが大切だと思う。

青年の特質としての矛盾も多々感じる事と思うが、やりたい事をやりたいように体験し、これを判断し整理して生活の中の身の処し方に生かしてゆくようにする事が勉強だと思う。机についてガリガリやるのはがり勉という。これをやってはイカン。伸び伸びと若い日々をエンジョイしてくれ事を願っている。

美しい桜の咲き乱れるのも見ずに江田島を去るのは残念だ。

今からゴミゴミした街の中で生活するかと思うと、色とりどりの花や樹々に、又青い海に緑の山に囲まれて毎日を送っているのがうらやましい。

チキショウ！

「手軽にできる体の鍛え方」

大川　雅章

瀬戸の小島、江田島にも漸く春が訪れようとしている。花はうつくしく咲こうとし、島は、精一杯美声を張り上げようとしている。術校の鳩たちも嬉々として餌をついばんでいる。

自然の万物がいきいきと己れの生命を力一杯生き抜こうとしているとき、さて人間どもはどうだろうか。

これから先、われわれ人間の生命は、短くはなっていくぞと言ったら怪訝に思うかも知れない。一時代前に比べると男女ともだいぶ平均寿命が伸びている。しかしそれは、医学の進歩食生活の改善生活環境の向上等のためであり、喜ばしいことではあるが、それはすべて外的条件が改善されたからであり、われわれ人間の肉体の中からの発展ではない。肉体の鍛錬だけみれば、現代人より昔の人の方が飯のため、生きんがため、好むと好まざるにかかわらず体を動かしている。今後益々文化生活とかで、生活が改善され人間が体を動かすことなくて用が足せるようになれば、われわれの体は今よりもなまくらになっていくことは明らかである。いくら医学や生活環境や食生活がよくなっても肝心の肉体がなまくらならこれ以上生命は伸ことなく、むしろ、早死の傾向に進むことも明らかである。

心あるものはスポーツの普及を叫んでいるが大部分の大衆は笛吹けど踊らず病気になったり怪我をしたときのみ、自分の肉体を意識しなおす、そういった現状である。

さて、君たち生徒諸君は大衆と比してどうかな。五十歩百歩だろうと思う。たしかに週二時間の体育の授業を受け放課後は各クラブ活動を実施はしている。だがクラブ活動というものは、肉体的には部分的な運動であり総合的な運動ではない。

たとえば陸上部員はただ走るだけだと言えば単純すぎる見方だが大体において他の部もそのスポーツに必要な得意な筋肉しか鍛われていないのが普通である。それは肉体的には片輪になっていくとい

うことになる。
　海上自衛隊には、年一回実施される「体力測定」なるものがあるが、五種目の運動のうちひとつでも低得点があれば、その点にあわせた級にしかならず、総合的にもよい体力の持ち主とは云えなくなる。
　先日、教官の体力測定が行われたが、終わったあとは日頃の威勢はどこへやら、ぐったりと疲れ果てていたけれど、その割には内容は必ずしも立派とは、言えないものであった。
　生徒教育部の教官は一術校教官の中でも体力に優れている教官が多いのであるが、やはりクラブ活動を指導しているため時間がなく総合体力を鍛えていないためその点になると一級の体力を誇れる教官は少ないようである。生徒諸君も私の見た目には或いは教官よりも劣るのではないかと思う。体力検定で一級をとれる生徒は全生徒のうち極数人いるかいないかであろう。いい若者がそんなことでは情けない。体育の授業やクラブ活動だけに頼っているから体力の維持は辛うじて保っていけても体力の向上はないということだ。そこで日常短時間で簡単にできる運動を述べておくので、やる気をもって実行に移されたい。
　意欲のないものは二十才代にしてすでに老人である。諸君はまして十代である。よいことはドシドシ取り入れて立派な肉体を造ってもらいたい。健全な体でなければ健全な精神が宿るものではない。
　先ず始めに「つま先立ち」である。歩行中でもよし、立ちどまっているときでもよし、一日に数回、最初のうちは二～三分でもよいので簡単にできるはずである。売店への行き帰り、外出してバスに乗ったときつま先で立ったままでいたり歩いたりする。まったく簡単にできるものだ。ただ慣れるまでは二～三分でも結構疲れるが、そこは我慢してやってみることだ。
　これを一ヶ月続ければ下肢は、カモシカのようにスマートになるばかりでなく走幅跳びなどでは、五十～七十糎は、今までよりも跳べるようになることは請合おう。これなどは、女性共が実行すれば外人女性に負けないくらいの脚線美となるのだが・・・・・。
　私は女性に指導したことはないが諸君が成人の暁に、恋人を得、お嫁さんをもらったときは、ぜひやらせてみたまえ。街を連れて歩くのにも恋人を誇れる程の脚線美などをみる世の中の風非なので一石二鳥でもあると思う。
　次に入浴中の「手首折り返し運動」である。浴槽につかったら片方の手で反対の手首をつかむ。（力一杯つかまぬ方がよい）そして手首をつかまれた方の手を指先まで軽く力を入れて、水を左右にのけるように一度に二十回位手首からさきだけ極限まで振るのである。交互に数回繰り返す。これは足のつま先立ちと同じく手首のスナップをより強固にする運動である。これだけの運動で体力測定のハンドボール投げは、やはり今までよりも五～七米は遠く投げられるようになる。またバレーのときにクイック・アタックに必要なスナップ力は、充分つくはずである。また電信員なら何時間打鍵を続けてもスムーズな反動運動が可能になる。だまされたと思ってやってみてくれ。

締め切り時間の関係で梶原生徒にせかされたため今回は一応二つの運動を紹介しておくのみだが、一般社会の青少年は体力的には六十、七十の老人なみである。諸君たちだけでも若人らしく強健な肉体を造り強健な精神を養ってもらいたいと念願している。

次の文集発行の際、また二つ三つの手軽な運動を紹介する。

諸君に知っておいてもらいたいことはたくさんあるが時間の関係上次回にまわさざるを得ないことを許してくれ。

明治百年に想う

生徒隊付2尉　今道　昌信

昭和生まれの私が、人生半ばにしてこの混乱した日本にあって、遠い昔をしのび祖国日本を見直すことも意義深いことである。海上自衛隊生徒諸君にとってこの一文が何かの心のよりどころとなれば幸である。

以下それぞれの項目をとりあげ、明治百年をしのび、一九七〇年を迎えるに必要な心がまえの一端を提示したい。

祖国の建設ということについて

いまだにくすぶりつづけるアラブ諸国とイスラエル紛争を例にとってみよう。

パレスチナの地は、今から三千年前、イスラエル人が国を建て、エルサレムに都を定めたダビデ王、その子ソロモン王によって、栄華を極み現出した。しかしその後、この国は北のイスラエル大国と南のユダヤ王国に分裂し、やがていずれも滅亡した。そしてこれより、祖国を失ったユダヤ人の受難、流浪の歴史が始まったのである。世界で最も優秀な科学者を輩出したユダヤ。莫大な財力をもって国際的金融界を支配するユダヤ。しかし彼らには祖国がなく、寄生する諸外国では迫害に苦しめられることが多かった。

この民族的悲劇を救うために、ユダヤ人を中心とするイスラエル共和国が成立したのは一九四八年のことである。しかしこの時、国土を割譲し、百数万の難民を生んだアラブ諸国は、その恨みを忘れ得ない。パレスチナにくり返し戦火の燃え上がるのは実に二千余年の歴史の宿命というべきであろう。国家の興亡はかくのごとく苦難にみちたものである。

更に第一次世界大戦後のイスラエル・アラブ問題をふり返ってみよう。

第一次大戦中、イギリスはトルコ支配下のアラブ人を分離する意図でパレスチナに住むアラブ人にパレスチナを与えることを約束した。一方一九一七年イギリスはパレスチナにユダヤ人国家政権を約した。このためユダヤ人のこの地における建国のシオニズム運動が盛んになり、ユダヤ人の数が増加したのである。とくに最近の戦争でイスラエルが短時間の大勝利を収めた原因は次のように考えられている。先ず強烈な愛国心。これが最大の勝因である。ヨーロッパにおける民族的圧迫から、シオニズム（聖書にあるシオンの丘にちなんだ祖国愛の実現運動）運動のもり上がりにより強烈な愛国心がつちかわれた。中でも流浪の苦しみを知らない若い世代の増加に対して、W会世代に対する愛国心教育に徹したことである。片目のダヤン国防

相をはじめとして、いわゆる政治的腐敗のない純粋な国家の指導者が出現した意義は大きい。
第3は第2次世界大戦の教訓を戦術面に最大限に活用したことである。その例は旧日本軍のハワイ奇襲や、ドイツの電撃作戦等である。その他、キリスト教を中心とする宗教的結束の強固さも勝因の一つであろう。
さて、我が国の現状についてふり返ってみよう。
およそ国家が敗れると、その国の人々は、歴史伝統を忘れることをもって進歩的だと考える例が非常に多い。自国の歴史を知らない風を装うようにつとめるか、あるいは我々を歴史から引き離す理由をさがし求めんがためにのみ歴史を学んでいるのである。いいかえれば日本の歴史を学べば学ぶほど日本の国がいやになる。こうゆう歴史を戦後日本の青年たちは学ばされてきているのである。明治百年といっても日本だけがこれを誇りとしているのではない。ユネスコにおいても、日本の明治維新以降百年のすばらしい発展に驚嘆し、一九六八年のユネスコ記念行事として日本の百年をもりあげている。少なくとも制服を着ている以上は、この「祖国」という言葉を何の抵抗もなく受け入れる心の勇気が必要である。
　遠い戦国武将や、近年の戦争における軍神とか、つねづねただ歴史上のタイトル位にしか考えていない人が多いのではなかろうか。祖国日本の歴史のどの部分を切断しても、傷口からたえず紅の血潮が流れている。歴史とは決して単なる記録の請負いではない。また事件の連続でもない栄枯盛衰の交互に起き伏しする偶然の変化でもない。それ以上にまた特に一つの伝統であろう。
この歴史否定のための歴史を学ぶ不自然さはかってフランスがプロシアに敗れた後の状態にもみられる。そしてそれから約二五年後、日本でいえば、ちょうど今ごろ、特に青年たちに反省を求めて立ち上がったプルユティェールという歴史家が「祖国の概念」という題で請負した一部をあげてこの項の結びとする。
「……祖国の概念ごときはときどき明暗があり、あるいは誇張して伝えられ、あるいは、過度に非難されることもあるであろう。しかし、遅かれ早かれ、一種の必然によって、この概念の前に引き戻される。
“人の楽しむところそこに祖国あり”と個人主義者は主張する。しかし歴史は、祖国のあるところ、そこに楽しみあり、と答えている。祖国のあるところ、そこのみ人は生存の価値を見い出す」
ダルマの姿について
　十数年前、ＮＨＫラジオで六〇才の中村久子というおばあさんが小さい頃病気で両手両足を失ったが、親が死ぬ前に、針仕事、拭き掃じ、洗たくといった女として最低の生活はできるようにしつけられたという放送があった。例えば口に針をくわえて着物を縫えるということである。
　その中村さんが、子供のときダルマ娘といって笑われ、いじめられたということばがあった。よく考えてみるとダルマの姿は決して中村さんのみではない。この日本が実はダルマの姿ではないかと思えるのである。

領土が半減されたことは極めて残念ではあるけれども、考えてみれば、両手両足を失った中村さんがそうであるように、その精神がしっかりしておるならば、日本の領土は半減された、両手両足をもぎとられたといえども、世界の国々に肩を並べ、貢献できるようになるであろと信ずるものである。例えば、ソ連のガガーリン少佐が、宇宙飛行に成功したとき、彼が「地球は青かった」と言ったことよりも、プラウダの記者に語った「私は地球に降りてきながら　祖国は聞いている「祖国は知っている」という歌を歌った。私は祖国のためならどんな仕事でもする用意がある。」と云うことが大切であろう。この歌は戦前の「愛国行進曲」のようなもので、ドルマトフスキーが作ったといわれる。その一節は、

祖国は聞いている、私たちの若い心を
惣しい母のように、豊かな愛のひとみで
何時の日も、どこへいくときも、やさしく見守る

ソ連の歌の好きな三派系全学連でもこの歌は日本では歌わない、いや歌えないのである。ダルマの一部分でしかないため、祖国がどこにあるのか分からないからであろう。

ところで、現在の日本の制体（国家の形体）は何であろうか。大きく分けて、分類上は共和国、君主国、その他（植民地等）の三つがあるが、比較的新しい国は共和政体、かなり歴史の古い国は君主国が多い。今の日本は多分に三分の一づつに分かれるのが普通であると思われる。

ある人々は、日本は主権在民であるから共和国という。またある人は天皇陛下がおられるから君主国という。ある人々はいや何か別のものではないかという。ここに日本の現状の分裂が見られるのである。例えば憲法解釈一つをとっても、結局は、この政体が明らかでないために意見が分立してしまっている。もう少し、物心のついた子供にでも分かるいいかたをすれば、今の日本人の大学は「日の丸」という船に乗っていると考えられる。その船が木で作られておるか、鉄で作られておるのか、それとも泥船であるかもわからない。そうゆう船に乗っているのである。しかも、どっちに向かって進んでいくのかもわからない。ただ乗っている。こうゆう状態で太平洋の荒波を渡り得るかどうか、ということに外ならない。

ちょうど東京オリンピックがすんでしばらくたったころ、ある日アメリカ人の家に招待された日本のブラックベルトの一人が冗談に「実はオリンピックでヘーシンクに負けたのはわざと負けてやったんだ。全部日本が勝ってしまうと、この次のオリンピックで柔道が競技種目からはずされるかもわからないから」と言ってしまったということである。ところがアメリカの婦人は急におこり出したという。実はその婦人がオランダ出身のアメリカ人であったし、事実オランダの柔道は非常に強くなって来ているといわれる。いつか朝日新聞に「ヤマト魂を説く柔道教育」という記事で、オランダのある道場に「ＳＨＩＳＥＩ」というローマ字の大カンバンがかかっていたというのがあった。果たして現今の若い年代に、このコトバの真意が分かるものがどれ位いるかは疑わしい。柔道は姿勢を正してやらなければいけないから、姿、形といういみの「姿勢」ではないかとい

う人もいるだろう。あるいは武道でから死ぬと生きる、死生の境地を乗り越えていくといういみの「死生」ということだといえるのが、少なくとも自衛官としての最低資格であると思う。確かに“死“と”誠“という字は習って知っていても、高等学校までの国語教科書には「至誠」という字は出てこない。至と誠を合わせてシセイと読むことはおろか、いみも分からないのが当然というのが、日本の現状である。大和魂や武士道精神は日本人だったらだれでももっているもので、そんなことをいちいち言われなくてもいいじゃないかと思う人が必ずあるものである。これは大変なまちがいであり、オランダへ行かなければ、アメリカ人に教えられなければ本来の日本の伝統精神がわからなくなる時代にならないと誰が予見できるであろうか。

国家というものは決して永遠に続くものではない。むしろ続かないのがあたり前である。続いておる国、特に日本のごとく二千年という歴史を持っておる国は極めてめずらしく、希有の事実といえる。あまりにもめずらしすぎるがゆえに、かえってその恩恵に慣れてしまって、いつまでも続くんだというふうに盲信をしすぎているのである。むしろいつつぶれるか、つぶれるかということを心配して、その護持につとめてこそ、この祖国は続いてきたにちがいない。

むすび

さしあたり、明治百年を想うにあたり、私は、一、二項に関して、「建国記念の日」と「旧海軍記念日」（五月二七日）の二つを、海上自衛官として、更に深く認識し、是非はともかくとして、戦争も知らない、功績もない現状の青年として、確信のもてる祖国への愛着と、国土防衛への決意を強固にしていきたいと思う。

二月十一日の建国記念の日は、日本書紀の神武天皇御即位日(旧暦一月一日)を明治政府が新暦に換算して定められたといわれている。世論を尊重するのが現代の美徳なら、歴史の中における祖先の声を謙虚に聞くことが、大切な一面でなければならないだろう。

世にいう、

「男子は死中に活をもとむべし、

座して窮すべけんや」の気持ちで

由　美　子

十一期三班　香川　正博

俺はいったい今何をやっているのだ。いったい何の為に生きているのだ。

今日俺が展覧会に出品した絵だって何の意味をもっているというんだ。ただすぎさった時間の重みだけが残っているだけじゃないか。仲間も俺に言う。何の為にお前は絵を描くのかと。何の為に描く、それじゃ俺はいったい何をすればいいのだ。絵を描くことしか知らない俺が一体毎日何をすりゃいいというのだ。じゃ、俺にとっていったい奴らは何なのだ。俺にとって仲間とはなんだ。

青山はこの前大阪の美術展でR賞をもらったという。芸大をでてパリへ留学してきた奴ら。

ただ絵が好きだというだけで、いっぱしの芸術家ぶって絵を描いている俺。貧乏の中で身よりのない一人の俺を育てて高校までだし

てくれたオジさん。そのオジさんも去年死んでしまった。
うす汚れた安アパートに帰っても俺をまっているものは何だ。ちらかった安物の絵具と一番安いパレット。何度もぬりなおした破れたキャンバス…。金なんか無い。
そんなものより俺は一番俺の顔が気にいらない。まだ若いくせに嫌にかしこぶった分別くさい顔。軽薄そうなうすい、いやらしくにごった瞳、高校受験のとき覚えた覚醒剤の飲みすぎで白髪のまじった頭。俺の顔をみて四十才と言った奴もいた。
いったい才能のない俺が絵を描いてどうなるというのだ。
それでも俺は昨日までは傲慢に生きてこれた。仲間にも画才よりも自分の精神のすぐれていることも主張して俺をなぐさめてきた。
由美子は昨日おれのもとを去った。冷たい雨が寒い歩道を濡らしていた。やっぱりこの世の中に俺より他に信用できるものはないと思った。
由美子を知ってからのたった三ヶ月。その三ヶ月は今でも俺の人生で一番意味のあったときだと言いきれる。こんな俺を由美子は理解してくれていると思った。由美子は美しかった。由美子に逢って愛情を感じない人間はいないだろう。彼女はバカではない。けどやさしい女だった。
由美子と逢って三ヶ月。　俺は毎日毎日何万回となく心で叫んだ。
「君は俺の天使だ。」と。　今はもう口にだして叫んでもいいのだ。だが俺の涙がにじむだけだ由美子に逢って始めて知った。この世に誰一つ、愛だけは永遠だと…。それでも由美子は去った。
今の俺は前にもまして孤独な男になった。前にもまして冷たく、かたくなに生き続けている泥粘土のビィーナスになってしまった。
やっぱりこの世には永遠はなかった。俺がバカだったのだろうか。由美子は俺を愛してくれたはずだった。だが、今ははっきり言える。
「俺は人に愛されない男だ。」
おかしな話だが今になって気がついたのだ。
これから何日になるか、いや何ヶ月も何年も何十年もやっぱり俺は歩き続けるだろう。心に深く刻まれたクレパスの深さを確かめながら…。それでも、待ちきれなくなった桜のつぼみが開く朝。そんな春の日はやっぱり来るのだ。いかにも不思議な記憶のなかで、俺はやっぱり由美子を忘れていくことだろう。
それまでにきっと俺は描くと思う。
もっと美しい由美子のいる絵を。
それは俺の最後の絵になるかもしれない…。

生きがいということについて

十一期　　M

すぐれた仕事をした科学者、人を感動させる芸術家、人々の繁栄や平和のために努力している人達を私は心から尊敬するが、市井に逢って悪戦苦闘しながら庶民としての正しさをまもって暮らしている人達もほんとうに偉いと思う。どうせ私達は周囲の人達から何か世話をうけないではやってゆけない。どんなに気をつけても、お互いに迷惑をかけ合いながら生きている。だができるだけ自分から人

に迷惑をかけないようにし、自分のできる範囲内で人のことまで考えようとしている人達は立派だと思う。自分の生きがいが世の中のためになっていると思えたり毎日の仕事が楽しかったりしたら申しぶんない、しかし現在の我々に自分の仕事に身をいれることのできない人は、ずいぶん多いことであろう。また毎朝早くから起きだして、訓練や教務を受けて、外出してはゴロンとして学校生活だけの一面的な生活をしていると、スキーをかついで歩く人の姿が大きく見えて、自分の生きがいを疑う生徒もあろう、せっかく生徒に在学しながら学科等に興味がもてず、将来が灰色に見えて、学校と家庭との二面的な生活をうらやましがりやりきれなくなってくる生徒も少なくないと思う。

考えなおしてみると、外から見ても楽しく、生きがいのあるような暮しをしている人達はまことにやさしい生き方をしている。生きるということを何一つ考えないでも、ただ懸命にやっていればすむものである。しかし、自分の生活を何かしら疑いながら、平凡な毎日をできるだけ暖かく、力強く生きぬこうとするには努力と勇気がいる。どちらを向いても、元気一杯に自分こそと思っている人ばかりの世の中を考えるだけで、窮屈な気がして、息がつまる。逆に平凡な人達が、平和を望み、苦しみを背おいながらも自分の小さな面を、ボゥッと明るくして生きている世の中を想像すると、それだけで私達の心はなごんでくる。ほんとうに世の中の役に立っている人というのには、周囲に迷惑をかけず、周りの人を尊敬して生きている人達をまず数えるべきであろう。

それに生きているうちには、やがて心の「ほぞ」をきわめて立ち向かわねばならぬような大事が一度や二度はやってくる。人生というものが、ぼんやり何もなしに過ぎてしまうことがあれば、むしろありがたいくらいのものである。

平凡な毎日あいそをつかせて、「事ある日」を自分から好んで早くむかえようとすることはない。毎日が平凡なことのくり返しにすぎない生活でも、ただぼんやりみつめて、自分自身を確かにし、その点で生きぬこうとする努力と勇気をもつならば、むずかしいことにはちがいないが、それこそ人間として我々として、ほんとうに生きがいのある生活なのだと思う。

（これはある教授の言っていた言葉ですが私なりに理解して、諸君の胸に秘めて貰えばと思い……。）

無　題

十一期ニ班　定直　広河

生徒の諸君の中でスケートを好む者少なからず、と思いますが、その人達に聞きたい。君等が普段、といっても外出した時だけだろうが・・・利用しているスケートリンクはどこですか？呉の今は昔となった電車の終点、川原石に薄汚れた小さなのが一つある。又ちょっと足をのばして広島まで行けば「アリーナー」などがある。が、いずれも室内である。軽い財布から板垣退助氏、伊藤博文氏が去っていくのは実に淋しいものだ。私はこんなとき、つまり金を使う時、無情を感じる。ジャンバル・ジャンの心境だ。

ところで、より身近に天然の、かつ無料のスケートリンクがあるのだが、それを皆に紹介したいと思う。それは諸君の頭の上にある。つまりここ江田島海上自衛隊第一術科学校の中、この学生館屋上に存在するものである。

二月十五日から十六日にかけて、わが母国日本は全国的な大雪に見舞われ四国では特に列車が止まるなど、「雪害」というものが、新聞紙上をにぎわせた。ここ江田島もその例にもれず、ここ数年来の大雪となり一面の銀世界である。目を外にむけると、青空に、白く雪でおおわれた古鷹山が、霊峰というにふさわしい荘厳さを漂わせていた。そして学生館の屋上は昨夜の雪が氷結して天然のスケートリンクができあがっていた。私は口にこそ出しはしなかったが、「しめたっ」と思った。出身が南国九州育ちゆえ天然のスケートリンクで滑ったことがなかったからである。さっそくロッカーの隅より愛用のスケート（ハーフスピード）をとりだし、寒気に頬を赤くそめて滑りだした。少々凸凹はあるが、おが屑などを使っている人口のものとは違い氷が固いので軽く、快適にすべれた。前には江田内、後には古鷹山をのぞみスタートをできるなんて、実にすばらしいことだ。ここ江田島は、古は兵学校から現在の一術校まで世界に誇る長い歴史を持っているが、この学校の中でアイススケートをやったのは前代未聞であろう。

ここに秘のこの事項をあえて諸君に紹介したのは、より楽しく生徒生活を過ごしてもらいたいからである。

やってみなきゃ、何事も

十一期ニ班　磯部　良夫

「もう一息だ！」それにしても汽車はもうこりごりだ。きつくてたまらん」

十二、三時間汽車にゆられ、八月十日の午後青森に着いた。これから北海道の玄関、函館に向かうわけでねる。残念ながら空は曇っていたが、出港する頃になると晴れ間が見えはじめていた。

ジャジャジャジャーン！出港のドラがなり、汽笛を鳴らしながら岸壁を離れる青函連絡船「松前丸」は見送りの人達の群れから延びているテープを切って一路函館に向かった。濃紺の海に白い航跡を残していく船のすぐ後ろをかもめがついてくる。

「北海道か！とうとう来たなぁ。これから一週間どんなことが起こるかなぁ」。

ふとっ、練習艦司令官のいわれた言葉を思い浮かべた。

「どんなことに直面しても、決して困るな」

後でこの言葉がずいぶん難を救ってくれたのだった。

そうこうしているうちに、雨がシトシト降り出した。函館に入港する時、右手の函館山は上半分を雲でかくし、どす黒い体を海に横たえている様はハワイのダイヤモンド・ヘッドを連想させた。港函館も雨のせいか心なしか静かであった。

「この雨は俺を歓迎しているんだろうか？」

「なぁに、雨の函館も情緒があっていいもんだぜ」

なぁんて雨の神様がいるとすればそう思っているに違いなかった。

桟橋には同期が待っていてくれた。彼と小雨にけむる函館の街を散歩するのはいいんだけど、俺の手を引いて歩きやがる。ちょっと恥ずかしいんだけれど、うれしいんだろうから、まあっ、いいだろう。てな訳で二時間も雨に濡れただろうか、その夜は彼の家に泊まり、あくる朝、八時に家を出た。

「お前を歩いて見送るんじゃ安心できんからバスで行けよ」、と言われたのでバスに乗り百円で行けるところまで行った。早く降りて歩きたくて仕方なかったので、十分位してバスを降り、立小便をして、ザックを背にショボショボと歩き出した。道路わきにはサイロのある農場が見え、乳牛がのんびりと牧草を食べているといった光景は、北海道ならではという気分にさせた。三十分も歩いたろうか、背中のザックが重く感じ始めたので一休み。何気無しにザックの中を見てみると、道路地図、トランジスタ・ラジオ、歌本、水泳パンツ、それに着替え位しか入ってない。同期の家でいただいた寿しを除けば、えないものばかりだった。

「これからどうするかなぁー!、歩くのはきついし、と言ってもこのままじゃ今日中に洞爺湖まで行けんしな、よしっ！　ものは試し、今度通る車に乗せてってもらおう」

車を、待った。果たして止まってくれるだろうか？　それにタダで車に乗るなんてありにも図々しいのと違うのだろうか。何事も経験って言うけれど初めてというのは誰もがこういう気持になるんだろうか。とにかくやってみよう。

サッと手を挙げた。トヨエースに似た車はスムースに止まってくれた。

「すみません１○○の方へ行かれますか、」

「おうっ行くぞ」

「一緒に乗せて下さい。」

「いいぞっ」すぐ飛び乗って助手席にすわり車は又走り出した運ちゃんは二十才位のいい元気いっぱいの人だった。いろんな話をしているうちに仲良くなってしまい寿しを食べたり、コーラを飲んだりした。家具の配達を一緒に手伝いながらだから全然あきなかったようだ。

「大将っ、計画してるコースを見せてみな。ふぅーン、よし、それじゃコース通り行ってやるよ。俺達は札幌まで行くんだが、よかったら札幌まで行かないか？」

ということでとうとう札幌まで来てしまった。

札幌‥‥北海道で一番大きな都市。道路が広くて街中には緑が多くて感じいい街、広島といい勝負ってところだ。〟　少年よ、大志をいだけ　“で有名なクラーク先生の銅像のある北大。僕はそこへ行ってみた。ザックを背にテクテクと。

さすがは北大。緑の芝生に赤レンガなどの古風な建物が何となくマッチしていた。芝生に寝ころんでいる学生達もいれば先生と楽しそうに話しこんでいる者もいる。恋をささやき合っている男女もいたようだった。とにかくのんびりと学生生活を楽しんでいる風だった。絵葉書には決して写っている北大独特のポプラ並木。写真ほどではなかったが、夕方の快い風が吹いてとても涼しくかんぜられた。

大学へ行くなら北大だなぁ、ただし夏だけ。などと勝手な事ばかり考えた。校内をブラブラしているうちに暗くなって来たので校外に出ようと思ったが、なかなか裏の出口が見つからない。だだっ広い農場に校舎が一部分占めている感じなのだ。周りを小さな川が囲んでいて柵があったりして出られない。

「困ったなぁ、どうしよう」

ふとっ、“困るんじゃない！困るな！”という司令の言葉が頭に浮かんだ。それを自分に言い聞かせるとふしぎに落ち着き、なんなく脱柵に成功した。後ろを振り返ると女の先生がこちらを見ていた。軽くおじぎをしてずらかった。歩いて札幌の中心街に出ると、うまそうなラーメンのにおいがして来た。思わず腹の虫がグゥーっと鳴った。そういえば、今一日これといったものを食べてなかった。というより食べる暇がなかったといった方があてはまるだろう。

さっそく、店にとび込んで腹いっぱい食べた。そのあと、駅にザックを預け、街を散歩した。噴水があり、札幌特有の細長く続いている公園には夜店も出て、家族連れや男女の楽しげな話し声でとてもにぎやかだった。時のたつのも忘れていると、時計台の針が十一時を指していたので駅に帰った。

「しまったぁー！」

荷物の預かり所はもう閉まっていたのだ。明朝にならなければ開かないという。金も荷物の中にありポケットには小銭しかない。又しても困ったことになってしまったわけだが、例のごとくあの言葉を思い浮かべて、待合室というよりセメントの通路に寝ることにした。

幸いにも同類が十二、三人いたので気が楽だった。夏とはいえ、夜更けの北海道は半袖一枚の僕には寒く、その上、蚊がさしてたまらなかった。“バチッ！、かゆいなぁ”体もブルブル震えて来て、何とも仕方ないので深夜だというのに駅の廻りを走ったりして体をあたためるといった情けないことになってしまった。走りながらいろんなことを思った。

今日はみじめな目にもあい、腹が減ってたまらんこともあったけど、自分で好きで来たんだ。寒いけど元気出そう。果たして明日はどんな一日だろうか。それだけは明日がきてみんとわからない。とにかく安心して明日を待とう。

これが北海道一周第一日目である。あとは語らなくても想像できることと思うので省略しますが、十二、十三期も若い時に、こういうことが一度位ならあってもかまわないだろう。

僕は

「一回きりでたくさんだ」

というのが本当の気持ち。

今度行くときは彼女と一緒にドライブと洒落こもう。

鶴一神社哀史

十一期　　K

鶴一神社といえば生徒の中にも数名は知っている者がいるかと思います。大分県の日田を流れる山国川の下流に位置する中津市にお

いて実際にあった悲しい物語であります。
今から約二〇〇年ほど前にこの山国川は急流で水量が多く毎年堤防が切れて農民を困らせていたので領主から何回となく土木工事の令が下されていたのである。にもかかわらず毎年この悲劇が訪れるので農民達にとってこの惨事が最大の悩みでもあった。
そこで村人達は毎夜集まって相談した結果、堤を今までよりずっと厚く強固に造築する事に意見が決まった。そこで村の庄屋を中心に日夜農業に励むかたわら村人総出でこの土木工事にあたり三年の歳月を経て立派な堤が完成した。しかしこの立派な堤もその年の台風で破られたのである。そこで村人は再び土木工事を始めたが造っては壊され、造っては壊されて人間対大自然の戦いが始まった。何度造築しても破られるので村人はとても困っていた。これをみかねた村の長老が、
「これは川の主がいてなさるのじゃ、可哀そうな事じゃが人柱をたてねばなるまいのう」と村人に一言もらした事から賛否両論が展開され結局人柱をたてる事に一致したものの誰も我身を捨ててまで村の犠牲になる者は居なかった。そこである方法を思いついたのである。さてその基準であるが、
「次の寄り合いで羽織のヒモのほどけている者が村の犠牲者となって人柱に立ってもらおう」と。
遂にその日が来た。ああ運悪く天命か一人の中年の男に白羽の矢がたったのだ。この男は四十過ぎていたが涙をポロポロ流して後ろも見ずに一人我家へ帰っていった。
人柱になるまで一ヶ月あったが、ほとんど家から出ようとせず半狂乱状態で残り少ない人生を淋しく過していた。無理もない、この男には妻子と、“多大の財産がある家柄”の良い家庭があったからだ。
奉公に来ていた貧しい姉弟のお鶴と一太郎は御主人様の悲痛な事情を知らされると深く哀れみを感じ、夜ごと考え意気投合した末二人は御主人様に変わり人柱の身代わりになる重大な決意をしたのです。死とは誰でも怖いもの、死の直前を思うと避けたくなるのが人間の心理なのに彼等は自ら進んで身を投げ出したのです。その上庄屋様に申すには、
「私達二人は身寄りのない人間です。それなのに御主人様は私達をとても可愛がって下さり我子の如く愛していただきました。私達二人はこのご恩を返そうと思っていた矢先こんなに簡単な方法で報恩出来るかと思うと嬉しゅうございます」と、何んと純粋な気持なのだろう、庄屋はあらためて感激しました。
刻々と運命の日は近づき、一週間前になった。二人は何も食べずに断食の為か身体はやせこけ目だけがギラギラと輝いていた。座ったままである。
二人は土手に運ばれ石でつくられた箱に入っていった。
「一太郎」「お鶴お姉ちゃーん」
二人は固くだき合った。
「ウウ、許してくれ俺の気が弱いばっかりに」
と主人は云った。涙でぬれている。

しばらく沈黙が続いたが静にフタがしめられた。もう石の箱は開かない。

「ゴボゴボ」石の箱は深い淵に消えてしまった。村人は誰一人として口を開く者は居なかった。又開く気持にもなれなかったのである。二人の悲しそうな顔を思い出すと・・・・・

ものの十分とたたぬうちに突然村は大風雨に見舞われたが突風の様に過ぎ去りそれ以降、山国川の堤は切れなくなった。

長老が語るには、

「あの大風雨こそお鶴と一太郎の最後を知らせた神風に違いない。おお可哀そうにナミアミダブツ、ナムアミダブツ」

そして中津藩の殿様も、深く感謝の意を現しこの淵を見下す高台に神社を建てた。この神社が鶴一神社といって今日尚有名で、毎年八月三十、三十一日の両日には全市をあげて祭りが挙行される。

これはあくまでも伝説なので全部を信ずる訳にはいかないが、お鶴と一太郎の二人が身代わりの人柱となり石の箱で沈んでいったのは、真実です。

我国において社会道徳は守られているか

十一期一班　梶原　英樹

つい先日の事である。船内に居てこういう光景を見た。

三つか四つの男の子であるが、乗った時にはおとなしく袋菓子を食べていたが何を思ったか長椅子のカバーをビリビリと破りだしたのだ。それを見ていた周囲の人達はこれを見ながら、「元気のいいお子様ですネ」と云っている。母親はこれに答えて「ワンパク坊ヤ」で困りますと見えすいたウソを言いながら子供の行為を止めさせようとしない。すぐその後ろに父親らしい体格の良い男が居て「男は元気がなけりゃいかん」と口をはさむ・・・・・これが又なんと行儀悪い・・・・・長椅子に一人横に寝そべり、新聞を読んでいる。これを見ていて「親が親だから子も子だ」と思った。

これはほんの一例にすぎない。公園へ行けばゴミは散らかって芝生の中では子供達が遊んでいる。車中では若い兄さんが三十分位もの席を確保して得意顔でいる。川においてはゴミが全部流れなく積もり積もって悪臭を放っている。公衆便所においてもしかりである。これらはいずれを見ても、“禁止行為”としての立て札かハリガミがしてある。

では何がそうさせたのだろうか。社会なのか家庭のせいなのか・・・・・この中で一番強く言える事は、子供にとって親兄弟の影響が大である事は今さら申すまでもない。右も左もわからぬ時から、子供は親の目を一部始終見ている。それで判断し行動する。

これが大きく成長すると友人や異性に特別認めてもらいたいという強い欲望のもとに、好奇心から平気で道徳を無視した行動に移る。なぜこの時、周囲に居る人がお互いに注意しあわないのか、直接その現場を見た人でさえ関係者になりたくないが為に「誰が知るか」と素知らぬ顔をしている。又間接的に聞いても聞き流す。過去にこのような体験を持つ人でさえもめったに口を出したがらない。こういう人達が居るからこそ悪い方へ走る人間が増えるのではないだろ

うか。
　ではこういう非道徳者追放にはどうしたら良いのだろうか、世間でよく言われる「学校において道徳や躾のあり方について教える」のや、「周囲の人が注意し合ってこういう人を出さない」のも良いだろうし、又親が子供の小さい時から道徳を教養として身につけさせるものも効果があるかも知れない。
　以上述べた事項だけで躾、道徳が守られるかというと思想、考え方が十二十色各人により異なるから不可能である。この他にも多分にあるかもしれない。
　しかしこれによって国民の道徳意識を高揚させるだけでも非道徳主義者が少なくなるのは確実で、ひいては公衆衛生に貢献するというものである。
　今まで述べてきた事は、我国において、「産業の発展した割合に対してあまり高揚されていない道徳意識」であるが、この事からも分かるように我々は今からでも社会道徳つまり道徳意識を高揚につとめ真の意味での社会道徳を各自で自覚し守りたいものである。
　こうする事により世界でも先進国に所属する我国も欧米なみに道徳意識の誇りを国民一人一人が持っても恥ずかしくないものと思う。それが為にも日々の行動において私達は、誰であろうと強く正しく、後生になって、
　「自己の良心に恥じない行為」
をなすべきだ。

「幸福について」

十一期一班　岩崎　文雄

　僕は入院中幸福について考えた。自分が自分の生活態度に満足する時幸福を感じる事は確かだ。しかし、それ以前の問題として人間はそれぞれ違った環境で生活している事を考えねばならない。そして、その違いにより幸福の対象となるものが違うのだ。これは四つの段階に別れると思う。
　第一は、働きたくとも体の自由がきかず、ただ食うことに幸福を感じる人達、僕は入院してこうゆう人を直接見てきた。そのおじさんの言葉で忘れられないのが、「俺は食うために生きているんや、だから何時間かけても一人前は食うてやる」そう言って一食を二時間かけて食べていた事だ。
　第二は、健康であるが、その日ぐらしで粗末な飯でもうまく食えることに幸福を感じる人達。
　第三は、僕達のような者で健康でお金もある程度あり人並みの欲望が達成できるがそれ以上は望めなく、安定した生活に幸福を感じる人達。しかし、元気でいる時はこんな事考えないだろう。僕も今まで考えたことがなかった。そして、とかく人間は、辛い事があるとまわりの人とくらべ自分は不幸だと言う。僕の考えた事は、
「こんな時こそ、もっと自分より不幸な人達が大勢いると思え」ということ。幸福を一本の綱にたとえるならば、自分の後から必死になってよじ登ってくる人達を見て勇気をふるい起し頑張れということ。自分をふり落とそうとする荒波にいじけていたら、それこそ不

幸のドン底に落ちてしまうにちがいない。幸福は自分の考え方一つで何時でもやってくるものだ。

学問　（散文詩）

十三期ニ班　山岸　義宏

「天は人上に人をつくらず、人の下に人をつくらずといへり」
これは有名な福沢諭吉の学問のすすめの一節である。
さて学問とはなんであろうか
学問・・・・勉学・・・・ＳＴＵＤＹ・・・・
それは己を高め、己を磨き、己を偉くするための必要欠くべからざるものである。勿論自分が自分の為にするものである。
ところが今の自分は、どうであろうか。
何の意欲もなく、ただ首をつなぐ為に、仕方なく最低の線で、行っているに過ぎない。
こんなことで、進歩があろう筈がない。
ようし明日からは、心をいれかえて、

短　歌　集

十二期一班　松田　真治

さすらいの　九十九里にてながむれば　怒涛のごとく　あれる黒潮
旅空の　更けゆく秋にただひとり　谷の流れに　紅葉散りゆく
松風の　くだけき古城我ひとり　悲しみ知るや　石がきのみぞ
はるかなる　天より落つる滝の音に　ひとすじ流るる　長き？？
江田内に　入りし黒艦立ちて見ゆ　形変われど　海を譲らん

十二期一班　立川　正　秀

「江田島に積もった雪を初めて見て読んだ歌」
古鷹の　岩に残れる白雪の　白さに似たり　船の行く跡
尾根をぬう　小道に流るる雪解けの　清らな水に　笹もうかべて
忘れ雪　ちらつく中に渾身の　力をこめて　飛び交う鳥よ
山の青　海の青きも白に染む　天より下る　雪の精かな
遠ほ山　に残雪白く光りたり　踏む人もなし　遠き山の上

十二期ニ班　梅澤　徹

小包に　両親の愛いただきて　ひさかたぶりに　胸がときめく
今日一日　無事に済んだと書く日記　明日への希望　たくすその時
日の本の　栄祈りて若者は　空に海にと　たって帰らず

十二期三班　川尻　和正

ふと思う　幼き日々の通い道　母のつくった　辯当の音
故郷を　はなれし今日のくもり空　母声やさしく　我ふりむかず

消えていく　冬の景色をながむれば　心に思うのどかな春

十二期ニ班　柳瀬　泰雄

たれこめし　雲の間よりさす夕陽　能美の残雪　負けじと輝く

十三期一班　後藤　清三

手紙来て　親の心が身に染みる　閉じる瞼に　故郷の山河

十三期ニ班　前田　一可

ふるさとの　便り届けばなつかしく　思い出すは　わが母の顔

十二期一班　横山　孝幸

夕やみに　思わず浮かぶ母の顔　我は元気と　一人つぶやく

十二期一班　後藤　隆行

深きあと　我がふるさとの道のべに　思い出しつる　幼き姿

十二期ニ班　岡本　隆志

山のぼり　小道のほとりこしおろし
ふとみわたせば　春もおぼろに

十二期一班　秋永　洋臣

俳句

巣のスズメ　さざめき誰も　聞き流し
春の日に　心もおどる　わらべかな

十三期ニ班　渡辺　正一

祈り

白ゆりをつむのはよせ　私は知っているのさ
白ゆりの清らかな言葉を私は聞いた
空の青く澄んだ日に　初恋とは清く
嵐の中にかたむくポプラのように
葉を散らしてゆくものだ　それはいつまでも心に残る
何時でも心に残る　いつでもさわやかに
君もいつかは知るだろう　その時まで白ゆりをつまないでくれ

十一期ニ班　平塚　保男

涙　『涙』

悲しい時に湧き出る涙
うれしい時に湧き出る涙
……
涙は不思議なものだ　それを止めることは出来ない
止まるような涙はうそだ　刺激や感動のあまり出るのだ
それは本能に近い行為だ　だから美しくて貴重なのだ

十一期一班　上田　忠雄

涙は人間にとってなくてはならにものだ
しかし、むやみに流してはいけない。心で泣くんだ
だが一人でほんとうの涙をバケツ一ぱい流してみたい……

シアワセの中デ

十期生徒　某　士　長

ヒロ、覚えているか、去年の一月十二日、悲しみに打ちひしがれた、
あの俺の姿を君はさながら馬の如く俺を振り落とし、
全身に傷を追わせて、去っていった。
ヒロ、今の俺を見てごらん、
この俺を誰が去年のあの俺を想像するだろう？
俺の心の、あの深い傷あとを拭い、
消毒しホウタイまで巻いてくれたあの人を
君は知っているだろうか？
ヒロ、今なら俺は喜んで言える、「サヨナラ」
そして、「君の幸福を祈るヨ」とも

後輩（おとうと）に贈る

十期生徒　某　士　長

おとうとよ、いよいよ俺は巣立つ。
ここに一言、言わねばなるまい。
俺は俺の青春を後悔と怠情と浪費の
向こうに置いて来てしまった。
俺は何かを為さんとして、何事も為し得なかった。
おとうとよ、俺の？を踏むな

「鏡を見て感じた事」

十二期一班　五十嵐　誠

ナマケ者という男　空を見あげ高すぎるといった。
海をみて広すぎるといった　大地をみて大きすぎるといった。
何ももたない彼
目をつむることと考えようとすることに一日をつぶす男
彼はなにももたずに死んでいった。あとにはただ一かたまりの土が
残った。

ちっちゃな犯罪

十二期一班　目黒　誠

最初から、きたない話で恐縮であるが、ある人が自分のつばをみんな使用する冷却水のところにはいていったとする。実際、ほんの小さな出来事にすぎない。
しかしあとから、水を飲みにいった人はどれほどいやな感じをうけるだろうか、その次に来た人も、また次の人も……
　こうして、よくみると、非常に大きな犯罪になっています。このようなことは、毎日、生活していて、よくあることだと思います。
ちっちゃな犯罪が、大きな犯罪に、つながるということを考えて、われわれ一人、一人、自分の行動に責任をもって生活したいものです。

春そして春

十二期一班　武田　繁典

川面にはみ出した雪棚の裾から、氷のしづくがせせらぎに飛び移るころ、ポッチャン、ポッチャン、水音までがうららかな春を歌っているような昼下がり。遠くの土手は？？の中に溶け込む。コバルト色の空。精一杯声を張り上げて駆け登っていく雲雀。土手に寝ころんだ俺の身体までが、フワフワ浮上がるような季節。

春

青く冷え切った石垣の窓から、ヘビがまぶしそうに空を見上げた。真黒で頭でっかちのオタマジャクシも、小川のせせらぎに身をまかして、なまぬるい水の感触を身体中で吸い取った。ねこやなぎの飴のような枝に純白のボーシをつけると、まだらに残った雪の白さも、もう、それに勝てはしない。茶色く朽ちた草の下から、薄緑色のふきのとうが、力強く頭を持ちあげると、もうそこに冬の姿をみつけだすのはむずかしい。忠えた大地の底から生へのいぶきが俺の臓腑をふるわせている。魂の芯からゆさぶる力強い叫び、それは春の賛歌。せせらぎも唱っている。オタマジャクシも待っている。

すべて、春の訪れ

詩　「燃える心」

十二期一班　森尾　邦雄

夕焼けの紅に　この世のすべてのものが染まった
虹色の海面から　燃える？が
山は赤銅の熱い固まりになった
私の心は燃え　若い情熱が舞い上がる
戦いを挑むかのように飛び込んだ　空しい戦いであった
ああ！熱い
私の心は　溶鉱炉で　ありとあらゆる事物を溶かしこんで行く
そして　私の目の前から完全に現実がきえた
今、私は？の世界に、紅の世界に生きている。
肉体が心に溶け入り　超人になった
空も自由に、海も地も、すべての自然が私の虜になった
不可能は存在しない　束縛も、悩みもない自分一人の世界
私は人間から脱した　ただあるのは燃えた心
……
日は沈んだ　現実は、暗黒の世界へ
山も海も、真の形を見せている
今の私は空しさにひしがれている
燃えた心は、今は真の人間にもどり崩壊した岩石に似ている
人間世界に存在する私は若い精気を失ってしまった
燃える心を私はどうして　取り返そう

無　題

十二期一班　法土　猶典

にくくてかわいい奴　もう春の日の光だ
空を見ては二つ三つ　大きなあくびをした

猫も大きな口をあけて　あくびをしている
この野郎　人間なみに　あくびなんかしやがって
そのうち　ぶるぶる　やりやがる
頭をこんとどつくと　手ではらいのける
この野郎俺をばかにしやがって　俺は縁側より下の石台はおとす
きにしないって顔をして　今度は背のびをしている
このスタイルで　一揆やればたいていガスは　俺の所にくるはずだ
こいつめやってみろ　ただじゃおかないぞ
背伸びしてから二、三回鳴いて　俺を見ている
ちょっとにくいが　かわいい奴だ

たより

十二期一班　法土　猶典

誰かが手紙を持って来た　皆が集まる
誰かが名をよぶ　皆んなの歓声が立つ
俺に来てるかな　でも、もしかすると
俺にだって　俺にだって
やっぱり来てないだろうな
しかし今日あたり　だが誰も名をよばない
エーイやっぱり来てないのか
アッ、待てよ　まだある　まだ机の上に残っている
行こうかどうしょうか　アッ、あいつからだぁ
あいつからのたよりだ　俺の心は踊る　俺の心は踊る

そんな時

十二期一班　津金　鋭一

木枯がやんで山の入日が近い　空は紅に暮れ行く
小道に散らばっている枯葉を　誰かが自転車で
チリチリとふみならしゆく
向こうの方で子供のわらべ歌に似た声　たわむれさわぐ犬の声
ときおり単調なトウフ屋のラッパの音
一日の仕事をおえて家路に向かい聞く　仕事の充実感あふれる
そんなとき　そんなとき　俺は一番幸福だと思う

無題

十二期三班　櫛部　裕行

うれしさよ　までば、はがゆし　明日は休暇
心はすでに　故郷の山河　教官の　見送る声を　背に聞きて
銀の桜は　乱れ飛ぶなり
いそげよとたたく車窓にふるさとの　紅い　ともしび　近くなりにけり
ふるさとのホームにたちて　感無量　まなこつむれば我ここにありつかのまに　我身をひたし　たわむれる
友のおもかげ　眼にやきつける
ありがとう　楽しく遊びしふるさとよ　こよい限りで我は去りゆく
正門を一緒に通らん同期達　我らが苦しみ　又分け会わん

詩　「永遠の足跡」

十二期二班　平野　清文

すがすがしい朝は空気が冷たい　すがすがしい朝は永遠の幸
朝は松のこずえにやってくる　そして、一日が始まり
太陽はゆっくりと歩き出す　不変の道を
松のこずえは太陽にむかって背のびをし
何かをつかみ取るかのごとく
太陽はその尊さを見守るがごとくやさしく光を放つ
松のこずえに夕陽がさすと　松はおとなしく？る
逞しい　足跡を残して　永遠の　足跡を残して

無　題

十三期一班　中田　正治

もしおれがかもめなら　七つの海に巣をつくる
海があれても　平気なように
もしおれが大木なら　シベリアの奥で小高く立とう
大地にしっかり　根をおろすため
もしおれが太陽なら　惑星つれて銀河を歩く
銀河に自分をきざみこむため
もしおれが真珠なら　海の苫屋の片すみで
ひっそりくらす　美しく
だけどおれには人間さ　地球の上をはいまわり
夜空をあおぎ　月に祈りをかける　ちっぽけな　人間さ！

ふるさとの心

十三期一班　飯村　勲

一日が終わって　ベッドに頭までもうずめた時
君よ！　いったい何を思うかい
遠きふるさとの　父、母兄弟の顔が　見えはしないか
君よ！　そうだろう　やっぱり　君もふるさとが　恋しんだろう
でも、それは　ふっとばしてしまうんだぜ
そしたら思いはしないだろうか
「ああ、男だなぁ」
と、ふるさとは
君よ！　そうは思わないか

ちっちゃなぼうや

十三期一班　佐藤二三夫

いいかい　ぼうや　おいらはね　お菓子の国から来たんだよ
ぼうやを、つれてってあげるから　笑顔を見せておくれ
フフフ・・・・・思い出してるな　幼い頃の夢を
誰もお話ししてくれなかったけどおまえは覚えている
自分でつくった夢を
いいかい　ぼうや　おいらはね　海の底のくじらなんだよ
ぼうやを、つれてってあげるから　笑顔を見せておくれ
ハハァーン　思い出してるな　幼い頃のあこがれを
絵本を見て小っちゃな胸をふくらまし、いつも一人で話してた

じぶんでつくったあこがれを
いいかい　ぼうや　おいらはね　まほう使いのおじさんだよ
ぼうやをすきな所へつれてってあげるから　笑顔を見せておくれ
ワワワ・・・・思い出してるな　幼い頃のしあわせを
よくまわらぬ舌でじゅ文をとなえてたアルルレロ覚えているね
自分でつくった　しあわせを

無　題

十三期一班　増田　吉助

どんより曇った空　鉛色のあの空から
小さな、小さな雪が　どんどん降ってくる
風にのって　くるくる回って降ってくる
白い、白い雪が　私の肩に　鼻に手のひらに
「わっさ、わっさ」と降ってくる
風が　ビューッと吹いた時　ふわっと宙に舞い上がる
「わっさ、わっさ」と降ってくる
私が空を見上げたら　私をめがけて降ってきた
あったかい首めがけて体にとび込んだ
「ひゃーっ」
私は　思わず首をひっこめた

青　芽

十三期一班　川浦　栄一

青芽がふく
スパイクにふまれ　汗涙血にもまれたグランドにも
青芽がふく
又　ふまれ　切られ　いじめられても　強く生え一面を青くする
若者達に再びグランドで汗を流させるために
土に力強く根をはり友と手を結び成長する
人にはわからぬ美しい花を咲かし　種子を作り
自分の役目が終わるまで　雑草達は、力強く生きる
自分の未来を考えず　ただ今を一生懸命に生き
未来を見つけるために
彼らの望む所は大きい
どんな美しい庭花よりも　どんなにみごとな盆栽よりも
自分の誇りをうしなわず　ただ一生懸命に生きる
一本の柱を背おい　彼らはたくましく生きる

親　友

十三期一班　玉川　修

冷たく叫ぶ海　さびしく吹きすさぶ風
孤独に沈む夕陽　銀色に輝く砂浜
みんな俺の親友さ
海は俺に勇気をあたえてくれる　冷たい風は俺を裸にしてくれる

夕陽は俺のさびしい心を暖めてくれる
砂浜は俺を自由にしてくれる
だからみんな俺の親友さ　だれもなんにも言いやしない
笑っても泣いてもくれない　怒りもない
だが俺はみんな好きさ
海は孤独で友達もいない　風はきまぐれで自分の行く道も知らない
夕陽はいつも遠い所にいて　だれにも話しかけようとしない
砂浜は白い波をだまってすいこんでしまう
だから俺はみんなが好きなのさ
だからみんな俺の親友なのさ

夢の世界

十三期一班　増田　吉助

風が　そっとささやきました
「幸せって何？」
太陽を受けた朝露が一滴ポトリと落ちました
キラリと光ったその中に夢の世界を見たのです
赤色、橙色、黄色に緑色、青色にあい色、色
この世に見られぬうつくしさ
そうです　自然が生んだ世界です　広くすんだ世界です
私は一人　夢の世界のとりこになりました
あの一瞬が私の心に残っています
神さま　もしできたら　私は夢の世界に生まれたい

詩　「木塊（ぼっかい）」

十三期一班　武田　幸三

だれもいない湖のほとりを一人さまよう
さざ波が夕日に映え　ダイヤモンドをちりばめたように
光り輝いていた
ふと目をおろすと、大きな木の塊りが波にあらわれていた
この人間の心を一つに　まとめ上げたような　不思議な形
それが赤く染まり　黒い影をひいていた
動く、動いている　まるで血のかよっている　生き物みたいに
ああ！やさしい水芭蕉のような　そして強く
たくましいアキレスのように変わっていく
あゝ醜いだれかの心のように変わった
やがてそれも夜の闇に消えていこうとする
湖はなにもなかったように　静かに眠っていった

己

十三期二班　上村　龍生

一人の私が言った　そんなことでいいのか
他の私が言った　はやくしろ　そんなことでもない　やめろ　はやくしろ　やめろ　やめろ　やめろ　両親がそんなことして　喜ぶか
だれのためだ　きさまは　だれのために　何のために生きている
勉強しろ　もっとすなおになれ
だれのためでもない　おまえのためなのだから

自然と私

十三期ニ班　坂口　正次

何かが私に呼びかける　いったいそれは何だろう
何かが私に呼びかける　ごらんあの美しい山を、島を大自然を
君の中にある真実とくらべてごらん
あの山と、鳥と、雄大な自然と
何万年何億年も伝わってきた　神秘な自然と
何かが私に呼びかける
十年先、二十年先あなたは何をしているの
なぜあなたは自分の力をためしてみないの
何かが私に呼びかける

君たちに

十三期ニ班　上野　繁寿

みんなどこへ行ったのかな
珍しいおもちゃがある高価な遊び道具があるよ
…放しっぱなしで　君らは贅沢だよ
みんなどこへ行ったの
それらより美しいものが君らのまわりにあるのに……
それより面白いものがそこにあるのだよ　君らは知らないの？
形だけの美しさも、高価なもの、インスタント式もいいけれど
もうすこし、考えてごらんよ
もうすこし、作ってみな　君たちは遊び方を知らないね
君たちは、本当の遊びを知らないな
……現代の子供よ
そりゃ、我々だって、ずっと以前の人達と比べたら
贅沢だったかもしれない　形だけだったかもしれない
が、遊びくらい知ってるよ　が、笑いくらい知ってるんだ
朝から田んぼであそんだよ　泥まみれになってけんかしたよ
血が出ても、出ても遊んだな　ズボンが汚れるまで遊んだな
膝の所がすり切れるまで動き回ったよ
可愛い、赤らんだ、そのやわらかいほほに、ごつい泥つけて
それが夕日に照らされるまであそんだな
誰と？
向かいの亨ちゃんと兄ちゃんと横町の誠二ちゃんと
どこで？
そりゃ、もちろん、田んぼだよ　山だよ　川だよ
よく竹馬を作ったなあ……　よその大竹をぬすんだなあ……
よく竹とんぼの飛ばし合いをやったなあ……
竹で笛や刀を作ったなあ……
……そう、我々は自由だった
蟻は探すよ、探すよ
何を？　餌だよ、食べ物だよ
どんな所だって行くじゃないか、彼らは
どんな事だってやるじゃないか、彼らは
君達、何してる　君達、何してる

ない、テレビを見ている　なんだと　薬をぬりに来た？
バカヤロー
君達、何してる　君、何を考えてる
何、手袋をはめに来た？
なんてな、きつかてな？　なんば言うこう
試験だ？
勉強だ？
汚れる？
きつい？
君らは本当の遊びを知らないな　本気でやってごらん
一生懸命遊んでごらん　……何もかも忘れて
冒険をやってごらん　少しは、けんかもやってみなさい
君たちは全く、不自由だよ
……現代の子供よ

「何かいいこと」

十三期ニ班　加村　良

茶ばしらが　しずかに立った
私は友の顔をみて　今日は何かいいことがありそうだ
友はあざけ笑った
たとえそうであろうとも　今日の私は怒れない
茶ばしらが立った。それだけで嬉しい
今日は　何かいいことありそうだ

顔

十三期ニ班　小林富士夫

私の顔　自分の顔　いつ見ても変わらない
あえて言うなら、時々、ニキビが出てくるくらいなものだ
目も、鼻も、口も、皆ある。又、予分な物も、ついていないのに
私は、自分の顔が、良いとは思わない
しかし、好まないからと言って、捨てる訳にもいかない
好き、きらいに、かかわらず、この顔で
ずっと、通してきたのだし　この顔が、行った事は、この顔が
責任をとって行かなければならないのである
横顔が　「原始人」に似ていようと　「ゴリラ」に似ていようと
やっぱり、自分の顔である
誰がけなそうと、笑おうと、私の顔は、私の顔である
誰が、何と言おうと、この顔が、自分の顔である

「星」

十三期三班　村崎　卓見

おじさんのそのまた、おじさんの時代
あの星から出た光が今輝いて見えるのだ
長い長い距離を駆けて来た。
光が目の前で、またたく、またたく
昔々そのまた昔、あの星から出た光が今、
目の前で、またたく、またたく

今、あの星から出た光は私の孫のそのまた孫の時代
地球に到達するのだ

春

菅野　公夫

春の日ざしが眩しく輝き
松の若葉がそよ風にさわぐ
小鳥は空を楽しげに飛びまわる
グランドには若者の楽しげな叫びが聞こえ
桜並木の舗道には数えきれないほどの
花びらが雪の降った後のようにふきちり
だれ一人そこを通るものさえいない
林の中の池のほとりには
物思いにふけっているらしい人影が
すみきった青空とともに水面に映って見える
暖かい春の日ざしの中に……

無　題

十三期三班　佐藤　清志

一日の終わりのラッパのひびき
静かな　暗い夜空に　しみ込むような　ラッパのひびき
故郷を　母を　思い出させるように
淋しく　美しく　どこまでも　ひびき渡る
一日の終わりのために　明日への　スタートのために
ラッパは鳴り渡る

私と兄

十三期三班　実　稲義

私と対称的だ　がっしりしている　頭は鋭い絶壁
しかも　顔面と並行ではない　左手の親指はほっそりしている
……中学の時のきずだ……
父は母に云う「兄は牛のようだ」と
母は父に云う「私はうさぎのようだ」と
私の左足には七センチほどの傷がある
ああ、これは兄をふたりで畑で……
いちばん強く残っている少年の日のできごと
あっと思った時　兄の顔色は真青で　しまったという顔つき
すぐタオルでしぼりおぶってくれた
あの時の兄の背のあたたかさ
今でもはっきり思い出せる
私は兄が好きだ

「叫び」

十三期三班　松本　行正

人間よ。なぜ、それまでに欲しがるのか、腹をみたした今、それほど欲しいか。きたない、うす汚れた人間共め！

血のしたたる肉を食らい、酒を飲み、わめきちらし、
挙句の果てには、一枚の金貨を、一切れのパンをめぐり、殺し合う
平和と戦と称し、何百万人の命を奪う、
これが、このかがやかしい文明を築いた、人間か
女よ、なぜそのように不浄な人間達を、
うえた人間達を生みたがる
男よ、なぜ、それほどに女をもとめる
なぜ子をほしがる
死んでしまえ、偽善者の世界、平和よ
ほろびてしまえ、永久に戻るな
天にめします、我らの神よ、私達を導きたまえ

夢

十三期三班　品川　三郎

冷たい、冷たい、とっても冷たい国からおりてきて
海の底へと消えてゆく、氷の海に浮いていて、氷の海に沈んでゆく
寒い寒いといっても寒い冬の海からふいてきて
ほほをさすって消えてゆく
向こうの山をとおりぬけ、向こうの山に消えてゆく
雪のように悲しくて、風のように淋しい、夢
古里の小川の流れにのってきて、流れにのって去ってゆく
雪のように悲しくて、風のように淋しい
夢

君だったら

十三期三班　上田　公治

心の糸がブスッと切れた時　君だったら何を求めるだろう
小さな体に重い荷物を背負い苦しみもだえた時
君だったら何を求めるだろう
同期や家族の愛を求めるだろうか、苦しみから逃げだそうとして
思いっきりはしゃぐだろうか、それとも泣きわめくだろうか
いやちがう
君は知っている
そうすればするほど、君の心が傷つくことを
私は知っている　そんな時、君だったら何ももとめないことを
ただ、君は、君自身の心の奥底まで入り込んで
じっと静かにうずくまっていることを
そして又、大きくはばたく為の準備をしているにちがいない

春の日に

十三期三班　大谷　和久

夢を見よう！　夢をもとう
明るく元気な、若さあふれる
果てしない広がりをもち希望に輝く大きな夢を
楽しい清らかな心で純粋ですみきった夢を
人生はこれからだ
無限の道が目の前に広がっている

これから歩く長い道
でも道は長いようで短い
青春はほんの一コマだ
元気な夢を若さあふれた夢を
美しい夢をもち若い人生を歩もう
二度と帰らぬ子の人生を、一歩一歩と歩んでゆこう

詩

十三期三班　竹口　健二

雨もやの中に　ぼおっと　ぼおっと　水銀灯の青い光
ただ一人　寝室の窓から　見ている私
延灯から帰ってきた今　静けさの中の音
一人でいる私
窓に口を近づけ熱い息を吹きつける　透明なガラス曇る
水銀灯のスペクトル　少し時がたつ
曇った所に群れができるスペクトルの群れ
水銀灯の幻想の世界が目の前に広がる

若さゆえ

十三期三班　三国　育男

俺は今、何かをやろうとしている、それが何ものかは分からない
何かだ、ＭＩのハンドルを力いっぱい放ってみたいスピード感
体の中をかけ巡る何か
淋しい時、一人の時だ　何だろう？
若さ？　若いから・・・・
俺ももう十七だ、この小さな体にも

「北国の春」

十三期ＥＴ　石井　良一

風が冬をつづるように太陽は春をつげる
雪は氷となって、小川の流れを速くする。
鳥も春をつげる。しかし大地はまだ銀世界だ。
しかし、その下で太陽の光の強さを感じ外へ出ようとする。
出た。その時は雪も、とけていた。
草の春の喜びを人々に花としてつげてくれる。
でも、北国の春はおそい。水は冷たくめだかもまだ顔を出さない。
どこに身をかくしているのか、でも卵しかみあたらない。
人々は春の叫びを体でつげる。
今までの寒かった日々の分まで、発させようとして

『人々』

十三期三班　一野　睦彦

夜の空を見る時に思うのです。流れ星を見る時思うのです。
生きようとする人間の浅はかさを
自己的で自分のみ生きようとする人間を
なぜ・・・・流れ星のように流れて消えないのです。
荒れた海を見る時に思うのです。三角波を見る時に思うのです。

怒る人間の穢(けが)らしさを
自己主義で自分のみ善くしようとする人間をなぜ
・・・・三角波のように岩に砕けないのです。
日本の空を見る時に思うのです。
燃える太陽を見る時思うのです。
自分かってな人間の汚さを
自己的で自分だけの人間を
なぜ・・・・燃える太陽のように尽くさないのです。
いつも思うのです。
流れ星のよう、太陽のように死のうと・・・・・。

十三期三班　一野　睦彦

『夜汽車』

夜汽車の窓から外を見る
黒やみに灯りをポツンポツン　田舎だな、私は思う
私は顔をふせたとたん
チンチンチン・・・・青い光が私の顔をすっていった
私はびっくりして外を見る。「なんだ、ふみきりか・・・・・・」
それからまた、外を見る。
田舎と思ったらネオンが見える。
そうだ私の汽車は特急だ、速いはずだ。
車内の者はほとんど寝ている。
二、三の者が本をよんでいる。

「おもしろいかな・・・・・」
いや、それよりも私も寝よう。明日は早いんだ。

十二期一班　伊藤　修

（人　生）

人生はマラソンと人は言う。
しかしマラソンは孤独であるが人生は孤独ではない。
そして精神の葛藤に敗れた者は敗北者となり
再び参加者となりえない
ところが
人生は孤独でないと同時に、やり直しが効く
マラソンと人生は同じでない
人生のうちに組み込まれているに過ぎない
悠遠なモットーに近づく姿が
最も美しい、勇ましい姿である。

十三期三班　馬場　耕一

雪の故郷

雪・・・・冷たくって
色気なく
上から下へ降る雪
広島の雪も高田の雪も同じだ
僕は、すなおで、かざり気のない

故郷の雪の風景が見たい雪・・・悪いものを消し
醜いものを消し
僕の心のなやみを消す
絶対に自然にさかわらない
こんなオーバーを着た故郷を思い出すと
僕の心は熱くなり、思い出す雪の故郷を消してしまう

スキー

十三期　水野　勝幸

この広い白銀の大地　果たしなく続く、白銀の大地
北風が。寒く吹き抜ける　まばゆい雪の光
憎いくらいにきれいに光る
僕はこの白銀で続く大地をかける。　回転、ジャンプ、粉雪が舞う
白銀をけって、シュプールを描く　二本の線を
この広い白銀の大地に描く
あの木、あの林、あの谷間をぬい、つめたい風をきって駆けおりた

やがて寒い寒い夕暮れが来て
空をも雪をリンゴのように赤くそめる
あの木の上の雪も赤くそまり、暖かそうに立っている。
夕日も沈み、ぽっかり満月が浮かび、一番星も西の空に輝く
森の湖に月がゆらぎ、山も再び静かに寒く
さびしくなった

詩

十三期二班　泉　利夫

遠く離れた　そのまた向こう
だれにでも好かれる
やさしい　美しい娘がいる
お日様のような　明るい笑顔
お月様のような　そんなつぶらな瞳
お金も私服も要らぬ
俺は毎日　毎日その笑顔を　見つめていたい
少し恥ずかしい
でも
みつめていたい

雲

十三期一班　隈田　安博

空、青い空
空、夕焼けの空
空、タコを上げた空
空、思い出すような故郷の空
俺の幼い時の夢が空にある
とどきそうでなかなかとどかない
俺は泣かない　空があるから
私に呼びかける空　さあ泣くな！

上を向いてごらん　太陽の光を
サア空が私を呼んでいる

幸福者

十三期一班　松村　薫

長い眠りからさめて　大地に立つ
青く澄みわたった大空　緑の大平原
自然はすべて　僕のためにある
大股で大地を　歩く歩く
鳥は鳴きそい　獣はほほえむ
ああ百万の幸せよ
山に登る　見おろす下界に悪者はいない
信じる自然に虚偽はない
大きく育つ
僕は幸福者である

「淡雪の悲しみ」

十三期二班　柳沢　章好

終った。何もかも終わってしまった。
楽しかった。あの頃
今は、もうはかない夢となってしまった。
ほのかな淡い恋も、銀色に輝く雪原のように白くなった。
俺の夢は空しく消えて、今日も、一人さびしく港にきた。
俺は、思わず叫んでみた。
しかし返ってくるのは波とカモメの声だけだった。

木　蓮

十三期一班　滝川　和夫

咲いた。今年も庭の木蓮が
夕闇の中に白くかすんでいる。
ああ、あいつが山に消えてから
ちょうど一年だ。
写真の中には、二人の楽しそうな顔がうつっている。
そしてあいつの帽子には
大きな木蓮の花がついている。
私は咲いている木蓮の一枝を折ると
コップに一輪ざしを作った。
そしてそっと位牌の前にかざった。
線香のにおいと木蓮の花のにおいが
入りまじってかすかにおう。
私は静かに手をあわせると、そっと障子をあけた。

冬

十三期生徒　坂崎　学

道のわきの年老いたかのように
ツバメが一匹横たわっている。

きっと疲れ果ててしまったのだろう。
南の国を求めて、安らぎの住まいを求めて
ツバメは飛んでいくんだ。
死んだツバメはどうしたんだろう？
道に迷ったかな？
仲間はずれにされたんかな？
この果てなく広がる大自然も
限りない力で動いている。
その一端、冬将軍は、ツバメを殺した。
憎い冬、ツバメがかわいそうだ。
寂しく暗く忍びきざんでくる冬。
私は冬を憎む。
心もはずむ南の国、ツバメが死んだ北の国。
どうして自然は殺したのか。
神は自分で創造したのをなぜこわしたのか。
ツバメは、今までずっと冬を乗り越えてきたのだ。
どうして今殺したのか。
暗く淋しい。
木枝も淋しい。
野も山も畑も海も……。
そして僕の心も……。

山

十三期ニ班　阪口　正次

家から山をながめてみる。
近くの山、遠くの山、
かすみでボーっとしている山
自分の手のひらにのりそうな山
ある人は言った
「ふるさとの山はありがたきかな」と
山は何でも知っている。
遠い神世からのことみな。
大地にしっかりのっかったときから、
いや、それ以前のこともおじさんの山に聞いていて、
知ってるかもしれない。
山に登り耳をあてて聞いてみる。
山が私にそっと教えてくれる。
「私のおじいさんは……。」
「私の赤ん坊の時は……。」
私も山に教えてやる。
「私はあなたの良き友です。」
「あなたは私の恋人です。」
今日も山は下界の人間をながめ、
ないしょ話をしている。

オリオン座

十三期ニ班　津吉　宣生

どの星よりも　勇ましく
どの星よりも　美しく
冬空の王者
空をみあげて　あっ、あれだ
腹の日はもちろん
曇りの日も雨の日も、見えるようだ
幼い頃からの友

「喰えるヤツ」

第四分隊ニ班（二期生）　高橋　紀禎

真赤な夕日が将に水平線の彼方に沈もうとしていた。油を流したような海面、紺碧の水、誰も表現することのできない自然の雄大な一コマである。
大洋とは何とすばらしいものだろう!!
今から十年前、私がはじめて太平洋に乗り出したときの忘れ難い思い出の夕やけである。思えば、当時第一線級の護衛船として大活躍していた5Ｅｄ「はたかぜ」に乗り組み、楽しみにしていた実習が出来ることは、大きな喜びであり、又、不安であった。
しかし、第一回の航海に乗り出したときの夕やけをみて、私の胸は大きくふくらんでいたのである。「楽あれば苦あり」とはよくぞ言った。この幸福が、数時間後には死につながると思われる程の苦しみに直結していたとは……。
「電信長、右舷四十八度、左舷四十六度です。」そのとき既に私はバケツを抱えて、電信室の奥に長々とのびてしまっていた。そして、誰かが言った艦のゆれを、おぼろに耳にしたが、響く暇があればこそ、たちまちバケツの中に顔をつっこんでグェーグェーの連続を始めたのである。ほんの数時間前、あれ程美しいと思って眺めた海が、今は怒涛と化してしまったのである。
苦しい……。金など一銭もいらん。何もいらん、とにかく、すぐ陸にあげてくれ、すぐおろしてくれ!!私はさけびたかった。イヤ、実際にさけんだつもりだった。しかし、それはグェーグェーと腹わたをしぼりだすような悲しい音に変わってしまっていたのだ。
苦しかった。つらかった。……その苦しみの中で、私は、三日三晩、米一粒、水一滴口にしないで、ただ電信室の奥と、居住区を往復する夢遊病者のような生活を送った。
そして、明日は横須賀入港という午後、電信室の奥でバケツを抱えた当直が終わり、漸く厠までたどりついたものの、相変わらず、吐気に、思わず厠に顔を突っ込んだ途端、胃がカァーと熱くなったと思うと、急に喉がぬるぬるしてきたではないか……。
口から出て来たものは、何んと茶褐色の液体…血なのである。
私は、一瞬これが最後だ。もわずか十七才でこの世から消えてしまうのか…。故郷に鍬を持つ母の顔、兄弟の顔がフッと浮かんだ。
私は目をとじた。と、どうだろう、いままで胃液まで吐きつくし、ついには血まで吐いてしまったあの苦しさが、まるで拭い取られたよ

うに感じなくなったではないか。
　自分でも信じられなかった。俺はついに頭がくるってしまったのだ。‥何度か自分の手で頭を叩いてみた。洗面所の鏡にうつった自分の顔をまじまじと見詰めてみた。確かに目がある。鼻もある。口もある。それから、指を一本づつ折って数えてみた。十本ある‥‥‥あっ俺は生きていた。頭も大丈夫らしい。
すると船酔いは？
船はまだ相当ゆれているのに苦にならぬとは？
そこまで考えた途端、今度は身体中から喜びが溢れ出た。
私は船酔いから解放された！もう何ともないのだ。嬉しかった。すばらしいことだった。この感激‥これこそ自分がまともな証拠ではないか‥‥‥。
たったいま当直が終わったばかりの電信室にとびこみ、これまでのいきさつを電信長にとくとくと話したら、囲りにいた者みんなにワーワー笑われてしまった。少々くやしかったが、それ以上に嬉しかった。
出港して三日三晩、苦しみに苦しんだ船酔いから、とうとう解放されたのだ。
もう大丈夫と思ったら、急に空腹を感じて来た。ゲンキンなものだが、三日間何も腹に入れず、ただ出してばかりいたのだから無理もない。
早速烹炊所に駆けこんで飯を食わせろと頼んだら、コンパの一士が、急に食ったら胃痙攣を起こすからこれで我慢しろと出してくれたのが、ちっちゃな握飯三つと梅干し一個、「ケチ」と思いながら一口つまんだ‥‥‥。うまい、本当にうまい‼
おかずもないのに、この飯のうまさ、残る二つを食器に入れて、旗甲板に駆け上り、隅に小さくなって荒波を眺めながらパクついた。
十年前の実習に於ける、最初の航海で体験した苦しい思い出である。この苦しみを思うとき、陸上での苦しさなどものの数ではないとつくづく思う。
そして、この体験の中から、私は、どんなどきでも、食える人間にならなければならないということを知ったのである。
この文章に目を通される諸君は「食」という字を分析して考えたことがあるだろうか。
漢字は支那から伝わったといわれるが、支那人は実に美味いことを考えたものだ。

「食」という字は、人の下に良くと書く。つまり、食うということは、人を良くするということなのだ。人間は食わなければ死んでしまう。人間の活動、思考というものは、総じて食うことから始まっている。
諸君、大いに食おうではないか‼
但し、ここで一つだけ注意しなければならないことがある。それは粕を食うなということだ。「粕」とは何か、米編に白だ。これを右から読んだら何になる‥‥‥白米だ‼
白米から何ができる‥‥白米を腐らせ（発酵）で出来るのが酒である。

酒を飲むということは、粕のまた粕を飲んでいることなのだ。
私は「諸君、粕を食うな!!」と大声で叫びたい。
最後に、テレビドラマの主題歌を紹介してペンを置く。
「くいしんぼう」
馬鹿の大喰いと　笑わば笑え
？も人並み　色気もあるが
喰い気あっての人生だ
腹をへらして
できることアッカ!!

「必死轟沈」

十期水測　竹永　峰男

1

公園の楕円型をした小さな池には氷が張っている。十二月の始めというのになんと寒い日だろう。そう思いながら新谷正一は柳の下にあるベンチに腰を下した。受験勉強の為に図書館に行く途中である。彼は国防省海軍士官学校を受ける心算であった。一人息子であったが士官学校を受けることを父は快く承知してくれた。自衛隊が国防省になって十年目であり、軍人は全て志願制である。図書館に着くとすでに開館時刻を待って長い行列が出来ていた。日曜日というのにすごい人出だなと思いながら列の一員に加わった。図書館に来るのはこれで二度目である。
　古代ギリシャ風のデザインに近代的な感覚をおり込んだ立派な建物であり、蔵書量、机量、設備、共に県下随一といわれている。広場には花園、樹木が所狭しと植えられ、特に松林の中は山奥のそれを思わせた。林の中で一人静かに勉強出来るようにもなっている。
　正一の後ろに長い行列が出来た。
「あのう、すみません、ずっとここにおりますか。」
　後ろを振向くと美人がにっこり笑った。十八位であろう。白いセーターに黒のタイトをはいている。髪は腰までもあった。
「ええ、います」
「すみませんが、この場所お願いします」
「いいですよ」
「よかった。じゃお願いします」
　そう言うと女は正一に数冊のノートを持たせて走って何処かへ行った。正一はそっとノートに書いてある名前を見た。津田高校内藤啓子と書いてある。津田高校と言えば彼の家の近くにある公立の学校なのだ。五分位すると彼女はハアハア息を弾ませながら帰って来た。
「どうも、あ・り・が・と」
「何処へ行った」
「パン・昼食のパン買って来たのよ・ああ疲れた」
「一日中図書館にいるつもり？」
「明日から試験なの、大変だわ」
「津田高校、内藤啓子さん」
「えっどうして」

「ノートに書いてあった」
やがて門が開かれ、列がどんどん短くなっていく。中に入るとまだ席が大部分残っていた。彼女はと思ってあたりを見廻したが見つからない。
さて化学から始めようと思って本棚から厚い参考書を持って来たが一向身に入らなくて、彼女の顔がチラチラするのである。
士官学校の制服を着て彼女と腕を組んで歩いている姿を想像している。実際、彼は空想家である。入試が三ヶ月後にせまっているのに当人はいたってのん気で、合格してから先の事ばかり考えている。そして一向に勉強が進まない。入試がどんなものであるかよく理解してないらしい。この事があって正一の図書館通いが始まった。・・・・万事この調子だからその年の、海士の入試には失敗した。合格しないだろうと思っていたがいざ不合格となると落胆は大きかった。父親から来年があると励まされ、やっと気をとり直したが図書館通いはやめなかった。勉強する為ではない。彼女と会えることが楽しかったのである。
三月になると彼女は図書館に来なくなった。今日もそうである。閉館まで後四時間しかないのにまだ姿を見せない。じゃ俺も帰ろう。そう思って何気なく本棚を見ると「日本と外交」という本が目に入った。ページをめくって見ると堅苦しい文ではなかったので読む事にした。
遠くは卑彌呼の魏に入貢の事から、倭壬武、南朝宋に上表文の事、遣唐使、蒙古襲来、黒船による各条約締結、近くは日清、日露、太平洋戦争、朝鮮戦争、そして安全保障条約による原潜入港と反対デモの事を昭和の黒船来たると書いてある。外交のむずかしさ、国力の発揚性、条約等の信頼度について細々と説明し、その為に日本人がいかに辛酸をなめて来たか、今後の日本人はどのようにしていかなければならないか。という事を結論としていた。
正一は文中にあった（世界が平和であるように祈るだけでなくその為に努力し、それに平行し一朝有事の為又日本国民全員の為に大海軍が必要である。何故なら四面の海は海国日本の生命線なのである）という部分が最も気にいった。
自分の一生を海軍に捧げよう、そう思って本を閉じ窓の外を見るともう薄暗くなっている。強風が吹いているのだろう、窓の外の木枝が大きくゆれている。街に出るともう八時になっていた。
街は相変わらずネオンで化粧をし、昼の顔とはまったく異なっている。肩を組んで歩く恋人達、三・四人でウィンドウと見ながら歩いているB・G、大きな声で歌を歌っている酔払い、激しく行き交う車、皆んな日本人であった。皆んなが幸せを得ようとしている。しかし自分の夢を叶える人が何人いるだろうか？唯、待っていては夢を実現することはできない。努力した者のみがそれを得る資格が出来るのだ。そうだ、俺には努力がたりなかったんだ。夢ばかり追いすぎた。つまり夢に溺れてしまった訳だ。
彼女のことを思うのはいいが溺れてはいけない。ここにいる人は皆日本人なのだ。日本は俺を必要としている。今にして我立たずんば護国の任誰が負う。正一は海軍兵学校という本を読んだ時のその

校歌を思い出した。彼は生きるという事はすばらしい、単純ながらそう感じた。もう彼女の事は念頭にない、それからの彼の生活は海軍以外の何者をも受け付けなかった。

戦争映画が来ると何度も見に行った。海軍は彼の恋人であり、目的でもある。しかし、からの勉強は進まない。月日はどんどん過ぎて行ってします。試験も後三ヶ月にせまったがあわてて数Ｉの参考書の上に厚く積もったホコリを払っている始末であるが、入試が近いという緊迫感が彼を勉強に追いやった。

一度やり始めると面白いほど身に入った。やってみないと分からんもんだ。そう思いながら入試の前日にも夜おそくまでやった。試験は三日に渡ってある。最初に二日は筆記試験で合格点を取った者が最後に身体検査を受ける様なシステムになっていた。

今日は数学・化学・物理・国語があった。初日が終わって家に帰っても彼は机に向う事を忘れなかった。今日の試験の事は考えないようにつとめ、明日の為に参考書をめくっている。

二日目は英語・日本史政経が午前中にあり、午後六時に筆記試験合格者を発表した。

正一は恐る恐る掲示板を見上げた。順々に番号を追っていく。三百二十、三百二十四、三百二十六、三百三十一、あった。三百さん十一番、彼は何度も何度も読み返した。やはり自分の番号である。流石に嬉しく誰彼となく話しかけたかった。明日の体格検査には自信がある。もう合格したようなものだ。その日はグッスリ眠り明日の体格検査に備えた。

最後の試験場へ向かう途中、

「おい、新谷じゃないか」

「えっ、おう山田お前も試験か」

「ああ、親父がどうしてもって聞かないんだ」

「・・・・・」

「俺は別に軍人になんかになりたくないんだ」

「じゃあどうして」

「合格したら親父が車を買ってくれるんだ」

「山田、お前、遊び半分でじゅけんしたのか」

「遊び半分じゃないよ、車買ってもらうのに真剣さ、じゃ先に行くぜ」

そう言うと試験場の方へ駆けて行った。正一は自分の恋人を汚されたようで不快な気分になった。体格検査も調子良く進み視力を残すのみとなった。視力は一・五を下った事はない。面接もうまくいったんだ、俺は海士に合格できる。よし頑張って早く艦長になるぞ。視力検査が終わった。「〇・九」冷たい重みのある声であった。そんなバカな事があってたまるか、目ぐらいで、あんなに一生懸命勉強したのに、途中友に会ってその事を話すと〇・八でも合格した例があると教えてくれたので多少安心した。

合格通知は十八日までに送ると検査官が言っていたが、今日がその十八日である。正一はどうも落ち着けなくて朝から映画を見に行った。映画館を出るとあたりは薄暗くなっている。午後六時だった。昼食も食ってないのだが空腹感等感じない。

タクシーで帰ろうと思って歩道に立っていると、赤いスポーツカーが彼の前に止まった。
「やっぱり新谷か、どうだ、通知来たか？」
「家に帰ってみなけりゃ・・・・分らんよ」
「そうか、俺の所へは昨日来たぜ。ホラ、車買ってもらったんだ」
そう言って新車のボディをたたいて見せた。
「お前の所は俺の所より郵便局が遠いからな、明日にでも来るだろうよ、じゃ海軍さん頑張ってくれよ」
軽快な音を残して車は闇の中へ消えて行った。
不合格という言葉が頭に浮かんだ。やっぱり目がいけなかったんだ。無性に口惜しかった。涙が一人で出てきて街がボゥッと霞んで見える。
正一は黙々と歩き続けた。歩くと言うより足を交互に動かしてるに過ぎない。いつの間にか図書館前の広場に来ていた。目の前にベンチがあったので足が勝手に座った。
突然、「キャー」という声と一緒に二、三人の男の声が聞こえて来る。痴漢だ、とっさにそう感じた。生まれてこの方喧嘩した事がない。足がすくんでしまったが兎に角近くに行って見ようと、やっとの事で歩き出した。木陰から見ると三人の男が女を押さえつけていた。遠くの街燈の光で女の顔が見える。何処かで会った様な気がする。あっ内藤さんではないか。三人の狼共に汚されようとしている。海軍にしろ、彼女にしろ俺が愛を感じるものが皆んな俺より離れて行く。いや俺に真の勇気がないからそうなるんだ。俺は大バカだ。俺みたいな男は生きる資格がない、そう思うと心の底から敢闘精神が湧いて来た。剣道二段を持っているが実践には役に立ちそうにない。でもいかなければならないんだ俺の為に。側にあった棒切れを持って、戦国武将の様に声と出しながら狼の群れへ、突っ込んで行った。男はビックリして振向いた。一番近くにいた男の頭に棒切れを振り下ろした。「グェ」、と声を発して前に倒れる。二人の男は「この野郎」「てめえ」と言いながら大きな登山ナイフを取り出した。街燈の光の中に不気味に輝いている。正一は正眼に構えた。正面の男がいきなり突いて来た。それを棒切れでハネ上げ斜め右に出ながら男の右胴へ正確に打ち下ろした。残った男はナイフを横に振りながら近づいてくる。小手で相手のナイフを落とし、喉元へ強烈な突きを食わせた。「ウギュ」という変な声をあげながら四、五メートル先へ転がった。勝った。安じるよりは生むがやさしそうだそう思った瞬間、左脇腹が何かにかまれたような衝撃を感じた。さっき胴を打ってやった男が立ち上がりざま正一の脇腹を刺したのである。体中の精力が体外へ流れ出して行くようだ。気が遠くなって行く意識の中にも、三人の男が逃げ出して行くのが分かる。女が何かしきりに叫んでいるようだった。拡散していく精神を集中させてその声を聞こうとすると、
「正一さん、しっかりして」
と言っている。そうか彼女は俺の名前を知っていたのか。俺の力で愛すべきものを得る事が出来た。この俺が、フフフ、海軍め、ざまあみろ、彼の手に水滴が落ちてくる。それが自分の目から出てる事に

気がついたのは数分後だった。彼女が誰か呼びに行ったらしい。自分の体が担架の上に持ち上げられるような気がする。担架がいやに白く感じた。

病院で目をさますと彼女と父と母が来ていた。母は気がついたと見ると嬉しそうに紙切れを取り出して読み始めた。

「カイシニゴウカク、コクボウショウ・・・・正一！」

そうか合格か、俺が海士に合格かチキショウ嬉しいや、

「母さん俺」

「分かっているわ、さあ眠りなさい、早く治らないとね、ホウタイを巻いた海軍さんなんてみっともないわよ」

「みっともないね」

正一は正直、そう思った。

彼女は毎日見舞いに来てくれる。会社に勤務し夜間大学で勉強してると言った。しかし、彼女の事はどうでもよかった。俺が女にモテる訳ないし、恋愛をするような男でもない。そう思ってみたりしたが結局は海軍の方が比重が重く、彼の頭は海軍の事で一杯なのだった。

2

国防省海軍士官学校は横須賀市の小原台にある。昔は防衛大学校と呼ばれて三軍が共有していたが、自衛隊が省に昇格してからは陸軍と空軍は他の地へ移って行った。その白亜の校舎は小屋の丘にそびえ、その勇姿を波静かな湾内に写している。

正一は飛行機で横浜まで行き、そこから横須賀線で横須賀駅に下り、タクシーで京浜急行の横須賀駅に向かい、浦賀線に乗り換えた。車内を見廻すと仲間らしい者が多数乗っていた。隣に座っている男に、

「あのう、海士ですか」

「そうです。あなたもですね」

いやに落ちついている。高校から来たようには見えない。

「出身校は、どちらですか？」

「私は軍人なんです。江田島にある海軍特別少年学校というのをご存知ですか？」

「ええ知ってます。中学を出て入学しますね。競争率が非常に高く、中学で五番以内にいないと合格出来ないと聞いています。きっと大勢の方が海士に合格したのでしょうね」

「ところが、三年間に一人か二人位しか海士に行かないんです」

「どうして？」

「海士に進学する為の学校じゃないという事もありますが、それ以上に皆んな勉強しないんです。入学した当初は頑張っていますが、二年三年と過ぎてくると、青春をこんな所で過ごしていいのか、時代に遅れやしないか、という気持ちが生じてくると共に悪い意味での軍人精神が知らず知らずの内に身につくんです。上から言われた事以外やらないという事です」

「つまり言われなかったらやらないという事ですね」

「そうです。自分で努力して得る。自分で探求するという精神を忘れてしまうんです。それでいて卒業間近になると勉強しなかった事

に後悔してしまう。その不安を打ち消してしまう為と、今からではもう遅いという気持ちが増々遊びの方へ引張って行く訳です。青春というものはニ十才を過ぎてからなんですよ。今からでも遅くないんです。むしろ早すぎる位ですよ。人生は長い、今から努力する事を忘れてはいけないと思うんですが、やはり欲望には勝てないんですね」

「しかし、惜しいですね、良い才能をしているのに、自分で自分の運命を決めているようなものじゃないですか」

　この男は岡田と名乗った。

・・・・着校してからは厳しい訓練・勉強が始まった。正一は毎日くたくたになってしまう。あれ以来岡田と友になっていたので少年隊の事を聞いてみた。

「少年隊もこんなに厳しいんですか」

「少年隊と同じ様な生活ですよ。唯違う点はここでは、皆んな目的を持っている事だ」

さらりと言ってのけるのだ。

士官学校での生活はまたたく間に過ぎていった。気がついて見るともう三年である。六月の初夏の微風の吹く土手道を日曜日ののん気さで、ブラフらと下宿の方へ歩いていた。

「正一ちゃん！」と呼ぶ女の声がする。まさか俺の夢じゃないだろうと思ったが、次の言葉が気になる。

「今行くわよ！」

今行くったって姿も見えないじゃないか、そう思って周囲を見廻すと、子供が川に落ち込んでいる。それを助けようとしているのだろう、一人の若い女が土手を駆け下りて行く姿が見える。なんだやっぱり俺の事じゃないんだ。彼ものん気である。溺者だと気がついたのはそれから数秒後だった。彼も川淵まで駆け淵に着いたのは女と同時だった。帽子を女の頭に乗せると服を着けたまま川に飛び込み、子供を川岸に助け上げた。呆気にとられている女には目にもくれず、人工呼吸を施し水や食べ物を全部吐かせた。

　子供は気がつくと

「お姉ちゃん」と言う。

「ばかね、こんな所に来ちゃあだめって言ったでしょう」

と言いながら自分のカーデガンを脱ぎ子供の体を拭いている。よほどあわてているのだろう。軍帽はかぶったままである。

「弟から目を離しちゃ駄目じゃないか」

そう言われてやっと正一に気がついたのか

「あっ、どうもありがとうございました」という。

「早く帰って乾いた服を着せないと風邪をひくよ」

「あっ、でもあなたも濡れています。私の家に一緒に来て下さい」

「よけいな心配せんでもいい」

「でも私一人じゃ弟を抱いていけませんし弟も歩く事出来ません」

脅迫である。正一は一緒に歩き出した。実を言うと寒くなりだしたのである。

「似合うぞ」

「えっ、ああ、ごめんなさい」

そう言いながら女は帽子を返す。
「君、さっき飛び込もうとしたけど泳げるのか」
「あっ、そこまで考えなかったわ」
「あわてんぼうだな」
「まあっ」女はふくれた。
さっきからピチャピチャと音がしていた。女は前を向いたまま
「何の音かしら？」と、とぼけた口調で言う。
正一はあたりを見廻したが音源は見つからない。どうも自分の歩調と同じである。あっ、靴をはいたまま飛び込んだな、そう思った時
「同じね」女はそう言った。
二人は大声で笑いながら土手道を歩いて行った。ところが二十分位たってもまだ家に着かない。
「いやに遠いんだな。弁当もってくればよかった」
「ウフッ、まさか・・・・後少しよ」
「ハイハイ、ああ君の名前は？」
「桜井、洋子、あなたは？」
「軍人」
「ずるい、お名前は？」
「新谷正一、二十三才」「いくつ？」
「十九才、もっか花嫁修業中」
「えっ、嫁さんになるの？」
「いつかわね、おんなですもの」
「相手もいないのに花嫁修業？」
「フフッ、家事手伝いよ」
「家族は？」
「祖母と父と弟二人、お母さんこの子を生んで死んでしまったの」
「新谷さん、御家族は？」
「父と妻だけ」
「ええっ、結婚しているの？」
「誰が」
「誰がって、あなたがよ」
「そんなこと言った？」
「あんな事言ってる。だって今」
「父とその妻と言ったんだ、俺のおふくろさ」
「なあんだ・・・・・安心しちゃった」
「えっ」
「いっいえ」
洋子は顔を赤らめて下を向いた。そのまま向き続けている。
「君の事誰か呼んでいるよ」
「あっ、おばあちゃん。あらっ、私、家の前通り過ぎちゃった。」

3

二年前、第二回日米安全保障条約が破棄され、無防備中立論がさかんに横行していた。彼の友人である岡田はそのような世論に憤慨していた。軍備なくしてなんの中立、というのが岡田の持論である。
「平和な時には平和が持続する事が出来ると思い込むんだ。そして戦争の残酷さを嫌う。たしかに殺されるのはいやだろう。片輪にな

るのだっていやだ。それに最近発明された、ＳＣ爆弾を使用すれば生物はおろか、地球まで存在しなくなる。月に避難する。という事も出来るがそれは金持ちか特定のお偉方にしかすぎない。つまり生物が存在しなくなる事を恐れている訳だ。その不安感が戦争反対という事になり、それの手段である軍備の放棄という形で表れる。

そういう事を裏側から考えれば、一発で地球がなくなってしまう、ＳＣ爆弾の使用をするような馬鹿者はいないという事だ。何故ならそれを使用する事によって自分も死んでしまうからだ。ＳＣ戦というだけが戦争ではない。民主国家を成立する為には他国の干渉があってはならないんだ。軍備を、ＳＣ弾を、持ってないという事によって、国連における日本の発言権が減少する事は明らかだ。

現在において自国だけが平和に暮らそうと思ってもだめなんだ。唯、単に世界に平和を呼びかけても無駄だよ。軍備不所持という事により、他国の日本に対する傍聴度というものがなくなる。

つまり、小学生が大学生にむずかしい数学を説明するようなもので、何も知らない者がだまってろ、経験のない者が何を言うかという事になる。強力な軍備を持って発言権を増大させ、本当の平和を説く、いわゆる世界政府を作り、地球を一つにするんだ。又、東南アジアの国々が増々発展してくる。

日本が明治維新からどんどん発達したようにな、何処の国でも同じように、発展初期には必ず帝国主義の形を取る。彼等にしてみれば世界政府、他国の信頼を基にする平和主義、という事にあまり関心がないだろう。

彼等は自国の事で一杯なんだ。他国の事よりも自国を大切にするという事は、他国に対して不安を与える。その他国が日本であり、又、その道を歩いて来た他の国なんだ。その為にも軍備は保持していかなければならない。そう思わないか新谷！」

言われるまでもなく正一はそう思っていた。しかし、そういう彼等の心配をよそに軍隊をなくせという政党が増えた。彼等が最上級生になった春、岡田は新谷を下宿に呼んだ。酒を飲もうというのである。

「オーイ、岡田、来たぞ！」

「早く上がれ」

彼の部屋に入るとすごい御馳走が並べてある。高価なウィスキーもあった。

「貴様、全財産を使いはたしてしまったか」

「ハッハッハ、もう金はいらんよ」

「えっ」

「いや、何でもない、さあ、飲もうぜ」

酔いが回ってくると、岡田はさかんに、このままでは日本はなくなる。一億国民は侮辱を受ける。とつぶやいていた。正一は彼の態度に不信を抱いたが黙っていた。

翌日、新谷は二日酔いで寝ている所を下宿のおばさんに起こされた。

「新谷さん、大変な事です。岡田さんという人が、小山大臣を、小山大臣を殺したそうですよ」

自分の耳が信じられなかったが、昨日の態度をみると、それもうなずけた。
「あの野郎一人でやってしまった。俺には黙っていやがった。あのばかやろう、何故、俺に話さなかったんだ」
岡田は大臣を射殺し、自分も命を断ったそうである。彼の遺書には、自分一人で国政を変えてしまう事は出来ない。が俺はどうしてもやらなければならないと思った。自分の思っていることが正しいかどうかは分からない。それは後世の人が決める事だ。
　日本人はもう一度、国というものを始めから考えなくてはいけないと思う。という意味の事が書いてあった。
・・彼の事件があって軍備保持の運動が急速に強くなってきた。正一は勿論その運動に加わっていた。やがて春が過ぎ夏が巡り、秋になった。
洋子は朝からそわそわしている。今日は新谷が最近流行の立体映画に連れていってくれるのだ。
「洋子、速くしないと、デトイに遅れるよ」
「おばあちゃん、それを言うなら、デ・イ・トよ」
「なんだっていいじゃないか、遅れると新谷さんおこるよ」
「大丈夫よ、新谷さん、そんな人じゃないから。ねェおばあちゃん、この洋服でいいかしら」
「オヤオヤ、洋子、それよりも空色の方がいいんじゃないかい」
「そうかしら」
「そうだよ」
「でも、やっぱりこれを着て行く」
「お姉ちゃん、新谷さんが来たよ」
「えっ、本当」洋子はあわてて玄関に出てみた。
「やあ」
「ちょっと待ってね」
「実は、急に用事が出来ちゃって」
「あらー、楽しみにしていたのに」
「ごめん」
「いやっ、だって今度は、いつ連れていってくれるか分からないんだもん」
「今度連れていく」
「今度っていつ？」
「分からない」
「いやっ」
「・・・・・・・」
「ごめんなさい、洋子の事嫌いになった？」
「いいや、兎に角表に出よう」二人は無言のまま土手道に出た。
「今日の新谷さんおかしいわ」
「何故？」
「だって冗談いわないもの、それに・・・・」「それに・・・・」
「それに？」
「いいの、これ言うと悲しくなっちゃう」
「言ってごらん」

「新谷さんも護憲派？」
「いっ、いや、そんな事はない」
「うそっ」
「……」
「何故、洋子に話してくれないの？」
「女だから」
「女に生まれたくなかった。そうしたら正一さんと」
「洋子さんに会えた事は幸せだった」
「私だって、でも悲しい」
「男にはね、男の仕事というものがある。女にだって女の仕事があるはずだ」
「……」
「俺は俺のしていることが正しいと思っている。我々の力で国を変える事は出来ないかもしれないが、そうかと言って投げやりになりたくない。
今は歴史の最先端にいるが、今という時間はもう過去の時間になる。つまり、もっと大きな目をあけて、未来をみなければならない。今という時間に気を取られ、その風潮に安住していては取り返しがつかなくなってしまうんだ。個人に努力がひつようなように、国も努力しなければね。
生きている私達だけが日本人じゃない。我々の子孫が又、日本人として生活していく。その為にも末永く世界史に日本という存在を忘れさせてはいけない。そして本当の平和を作る為にも世界を一つにする事が大切なんだ。しかし時代の流れには勝てないかもしれない」
「勝てるわ。きっと」
「必死になれば必ず轟沈する事が出来る。だが、あれ程夢に見た士官学校も卒業できなくなる。そして君も得る事は出来なくなる。俺が愛情を感じる物は全て俺より遠ざかるんだ」
「いやっ、私あなたのものよ」
「洋子ちゃん……ありがとう」
「ねっ、お願い、あぶない事やめて」
「洋子ちゃんには悪いけど、俺やっぱり、やめる事は出来ないよ。でもひにくなもんだね。俺が頑張った代償に死を与えてくれるんだ。俺が必死になった為にね」
正一は洋子に岡田が死んだ日に取っておいた桜を与えた。洋子はその桜がいやに白いと思うのだった。
やがて軍備反対派の大臣は彼等に殺され、彼等十一人は自殺したが日本は憲法を改正し、敗戦直後のように戦争放棄、軍備不所持を復活した。その後、日本は、東南アジアの国々がすごい経済発展をみせた為、日本の工業製品は売れなくなった。資源の乏しい国は頭脳だけではどうしようもない。
やがて日本は自国生存の為、農業国と化し、他国の動勢に不安を感じる事となり、世界史上より忘れられていった。

完

うそのうそ

十一期一班　比留間新吉

それは春の、心よい日であった。一念は寺をぬけ出て、城下をはなれ、田畑の見えるところまできた。少年の心は目前に広がっている、解放された風景に誘われていた。のどかである。山がかすんで見えて、彼はその様な自然の状態が好きであった。足がとても軽く、彼はなにもかもが楽しかった。

しばらく畦道を行くと、百姓の子供が数人寄り集まって何かをしているのが見えた。彼は好奇心にかられて近づいていくと、そこには小さな蛇がいて、彼らはそれをつっついたりして、自分らより力のない者をいじめることに満足感をいだいていた。

彼はあのような醜い蛇を好きではなかった。そして、逃げようとしてはその逃げ道を閉ざされ、引き戻されて攻撃されている--その様子をみてむしろ快楽を味わった。

ふと彼の心に浦島太郎のことが思いだされ、彼も仏の道につかえる者としての英雄的行為をしなければと思った。第二の浦島太郎として、彼は年下の子供らに理解できるように蛇のたたりを聞かせ、子供らをその場からおいはらった。

彼はしばらくそこにたたずんで、生命の若い蛇を観察していた。見ているうちにだんだん親しみがわいてきた。彼は自分自身でも変に思ったが、でもそれを否定する事はないと感じ、蛇を大事に手のひらにのせた。そして懐の中へ入れた。少しも君が悪いとは感じなく、むしろ可愛いく思うくらいであった。

一念は武州のある城下で、中枢的存在な寺の坊主の卵であった。この寺は堀がめぐらしてあり、裏の方は以前としてまだ開発されていない。不気味な地帯である。江戸に近い武州といえども今から約三百年前のことである。まだまだ開けていない、明治後期頃まで、城の裏手に狐がでると言われたというから……。

さて彼はその蛇をもちかえった。少年の心に小さな秘密をもっているということから、楽しかった。彼はどのようにしてそれを飼育しようかと迷ったが、裏手の山へひとまず放してやった。それから彼は毎日その蛇に餌を与えて過ごした。蛇の方も一念に対しては敵対心をいだかないようになってきた。森の中に入る者もいないので彼と蛇との関係を見られることはなかった。蛇も少年も成長していった。少年の成長は、限りがあるが、蛇の成長にはかぎりがなかった。日本にもこのような種の蛇がいるかと思うように蛇はでかくなっていった。いくら大きくなっても、彼の蛇に対する愛情は変わらなかった。

月日はたち、一念も今は、高職につくようになった。蛇も数十メートルもある大蛇になりながら、不思議に人に見られずにいた。一念は近頃、変な事件を耳にするようになった。動物が殺されるならまだしも、だんだん人間の方にも伸びてきた。彼はそれが大蛇のしわざだと感じた。事実そうであった。彼は何とかしなければと思ったが、今まで可愛がっていた蛇を殺すのだけは、どうしてもできそうになかった。悩んだすえ、彼は中禅寺の方へ大蛇をとじこめようと思った。その夜、彼は大蛇によく言ってきかせ、中禅寺の方へす

ぐさま追いやった。風が吹き、雷が鳴りだし、雨が強く降りだした中を、大蛇はゆっくりと進んでいった。
一念は大蛇に鈴を鳴らしたら出てくるようにと言った。
だからその寺には鈴は今も用いていない。

放送劇「夜明け」

十期水測　浅井　清志

小鳥の声、時々聞えてくる町の喧な音、静かな下駄の音、（ゆっくりと）子供達のハシャグ声々、
老人
「世の中も平和になったものだ」つぶやく様に
（間）
「ほほう、きれいな夕焼けだ……。どっこいしょっと。朝晩の散歩もめっきりこたえる様になった。」（始めて隣の人間に気づく）
「おやこれは水兵さん、外出ですか、そうですか…ちっと話をしませんか、もしよろしければの事ですが……。ハハハいや実は私にもあなたのような、そう年頃も……あなたおいくつですか、（うなづく様に）十八、それじゃ丁度それぐらいだ。それぐらいの子供がいましたよ。もう二十……六年になりますかな、予科練に行きましてね、航空母艦の戦闘機に乗っていましたが……
死んでしまいました。母親のいない、親一人、子一人だったんですがね。いい子だった、親孝行で……よく手紙をくれました。私は勿論死んでもらいたくはなかったんですが……当時は私もコチコチの日本人でしたから、進んで死に行く様に息子にしむけてしまったのかも知れません。　（間）　正直言って、息子が死んだと聞かされた時には、眼の前が真暗になってしまって・（弱々しく）
ハハッおかしい話ですが、私はその時、息子に負けた、心底負けたと思いました。自分自身が憎たらしくもなりました。それにも増して息子がいとおしくて、かわいそうで……。あなたを見ていると息子もこんなに立派な兵隊であったんだろうと思えて仕方がありません。これは飛んだグチになってしまいました。未だ時間はだいじょうぶですか。
（間）
どうかしましたか。何かこの老人が悪い事でも云ってしまったのかな。ああ旅行カバンを持っていますね。休暇なんですね。汽車の時間でも待っているのでしょう？　（びっくりした様に）
ええー？　帰りたくない？
どこへ？　それでこれからどうするつもりなんです？
（間）
学校が嫌になって家に帰ると云うのですね。」
（間）
町の喧な音大きくなり次第に消える。老人
「汽車は何本も出ています。もう少し話をしましょう。
それで、あなたはうちに帰って何かあてでもあるのですか、ない。ねえあなた、素直にこの老人の云う事をお聞きなさいよ。あなたがこのままうちに帰っても決して、これまでの生活より良いことはない

でしょう。あなたは敗北者になろうとしているのですよ。たとえ御両親が暖かくあなたを迎えてくだすっても、あなたは、これから先ずーっと後悔し続ける事になりはしないでしょうか。聞けばあなたは未だ子供だ。いいや、あなたは大人のつもりでも、やっていること、考えていることまだまだ幼い。そして甘えている。あなたを責めているのじゃない。あなたぐらいの年頃では、それぐらいあってあたり前です。しかしあなたが負けたという事実、これは否定できない。勿論この老人に隊内の苦しい生活が分る筈もありません。だがあなたの同じクラスの人はどうでしょう。皆残って頑張っている。苦しいことは誰も同じです。あなただけが苦しいのじゃない。みんな苦しいのじゃないでしょうか。只あなたと彼らの違う所、それは、もう一度頑張ろうと云う気持ちだけではないでしょうか。

やれやれ、中々分かってもらえそうもない……。

何をこのくそジジィがお前なんかに俺の気持ちが分かってたまるかと思っているのだったら、およしなさい。あなたがそんな考えでいるからこそ、学校を飛び出し、うちへ逃げて帰ろうと、そうまさに逃げて帰ろうとしているのではないでしょうか。そう云う独善的な姿勢では、どんな世界へ行ったって、自分が満足する様なせいかつなど、とうてい期待できないでしょう。よしんば、そう云う自分本位な考え方で、楽しく自分の生活を楽しめる様な人がいたとしても、それは今のままのあなたでは決してありません。なぜなら、あなたは今迄の自分の人生を放り出そうとしているからです。人生は積み重ねではないでしょうか。勿論本道を誤った時、引き返す勇気は必要です。がしかし、あなたは本当に道を誤ったのでしょうか。海の防人として立派に生きるため、あなたは何年か前に勇躍故郷をあとにしたのではなかったのでしょうか。どんな苦労にも耐えようと思って入隊したのではなかったのでしょうか。それとも、隊の生活は予想外の厳しさだったと思っているのですか、それは甘い考えと云う事にはならないでしょうか。

(間)

あなたは今迷っていますね。生きると云う事を簡単に考えてはいけません。と同時に深刻になり過ぎてもいけません。常に卑近な目標を立てて、もう少し、もう一度、頑張ろうとは思いませんか。(他人の花は赤い)と云いますが、そう云う事も十分予想してかかるべきです。人間と云うのは欲が深いものです。それがあるからこそ人類の進歩はあったのですが、あなたはその欲望をすてたらこそ、人が嫌がる自衛隊に進んで志願して、俺はやるんだ、捨て石になるんだと思ったのではなかったのでしょうか。

無駄な努力はするべきではありません。はっきり自分は自衛隊に向いていないと悟ったならば、いつまでもチェーンの外れた自転車をふみ続けるのは、それはあなたにとっても、国にとっても、社会的にも全く無駄と云うものです。

あなたはそこ迄つきつめて考えぬいたのでしょうか。おそらく考えてはいますまい。少しぐらい嫌な事があったから俺は出て行くと云うのは卑怯だとも云えます。そう云う人間はどこへ行ってもすぐにケツを割る。そう考えませんか。

（間）

子供達のさわぐ声、大きく、小さく

あなた、この公園のそう、このベンチでもいい一日でいいからすわってこの公園に来る人々、通る人達を見ていてごらんなさい。実にいろんな人がここに来て、それはさながら一つの劇でも見る様に感じられる筈です。どうでしょう。

朝六時、暗闇の中からガチャガチャと云う音を立てて牛乳配達の少年が、そこかしこの家々に牛乳を配って走る。

朝の早い奥さんやおじいさんと朝の挨拶を交わしながら、ほおを真赤にして、手をその吐く息で暖めながら……そして夜が明ける迄にこの公園をきれいにしようと市の整備課の人が、これも白い息を吐きながらほうきを動かしている。

そして八時、この公園は会社や学校へ行こうとする人々で一杯になる。互いに軽く目礼したり、あるいは肩を叩きあって笑顔を交わす学生やサラリーマン。少し遅れて子供達が手をつなぎ、一列にならんで学校へ急ぐ姿も見られるでしょう。

昼休み。この公園は附近の会社に勤める人達の憩いの場となる。バレーボールに興じる人々、一人静かにベンチや、草むらに座って本を読む人、おう、あの二人は恋人同士でしょうか、肩を組んで何かひそひそ話し合ってる。実に楽しそうではないでしょうか。

昼が過ぎると、子供達が歌を歌いながら帰ってくる。宿題もなにも放っぽり出して、かくれんぼをしたり、ブランコに乗ったり、すべり台の上でキャーキャー騒ぐ。そうしているうちに今度は中学生が帰って来て、野球を始め、高校生たちは試験でもあったのでしょうか、教科書片手に議論をしながら通り過ぎる。そして夕方のラッシュアワー。せかせかと家路に急ぐお父さんやお兄さん。

日が落ちると、この公園もやっと一日が終わったかの様に、ひっそりと休み始める。ほの明るい水銀灯の光がこの公園のあちこちを照らし始め、時々吹いて来る風の以外に音はしなくなる。星がキラキラと輝き、東の空に月が昇るともう完全に夜になってしまう。朝迄、時々通るお巡りさんの姿以外は、この公園を通る人はいない。

（間）

お分かりでしょうか。この小さな公園ですら、いろんな人がいろんな事をー、通り過ぎています。みんなそれぞれに自分の仕事を持ち遊び、憩い、学んでいる。あなた一人が、この世の全てじゃない事はお分かりになったでしょう。皆一生けん命に生きているのですよ。弱音なんか吐く人はいけません。もっと自分自身に厳しくおなりなさい。人に頼っては生きてゆけないんです。と云って悲観させているのじゃないですよ。わたしはあなたにもっともっと強くなって欲しいのです。自分に強くなって、そして幅広い教養を身に付け、これからの人生と云うものを、真剣に考えて見るのはいかがでしょう。真剣に考えて、考えて、考え抜いてゆく事、それが青春と云うものではないだろうか。今の自分に与えられたものに最善を尽くす事、力一杯ぶつかってゆく事、それが青春と云うものではないでしょうか。

ユーモア

清水　利之

ユーモアこそ、われわれ人生には誠に大切で必要なことでは、ないかと思う。

ユーモアを解する人、ユーモアの感覚を持っている人とは、他人が自分をながめているのと同じ目で、自分を眺めることのできる勇気を知恵を持っている人、といわれる。ややもすると、われわれは他人の欠点のみに目をかがやかし、また反面自分に対する言動に、びくびくする等、何か心の狭い、ゆとりのない、人となりがちである。「適切なときに、彼自身について言いたく思っていることを、自分の口から、言うことのできる人は、不意に一座の空気を、より軽く、より呼吸しやすいものとする。彼のまわりの人は、微笑し、上機嫌になる。」といわれ、偉大なユーモアリストは、セルバンテスでも、モリエールでも、フローベルでも、すべて「自分自身を嘲笑したひとであった。」とアンドレ・モロウが書いている。

ユーモアのある人は、謙遜で勇気のある人である。このユーモアこそ、我が身を助け、大きくは、国を救う大きな原動力となった事例は、しばしば、きくところである。ここにイギリスのニ、三例を拾ってみよう。これはチャーチル一人の言行録であるが、それだけでも馬に喰わせる程あると、いわれる。

第2次大戦ぼっ発のとき、敵地から脱出した英大使館員が本国の外務省に打った電報「全員無事引揚げ完了、ただし館員十三、婦女子五、犬二」

日本軍が、シンガポールを攻めたとき、イギリス人の豪語にいわく、「なーに大丈夫さ、イギリス兵一人は、ゆうに日本兵十人に相当する。」ところが、あっけなくシンガポールは落ちた。「残念、日本兵は十一人もやってきた。」

ダンケルクの敗戦で、世界中が、英国の運命は、もはやきまったものと、考えたとき、当のイギリス人だけは、「敵をやっつけるのに遠くまで、出かける必要がなくなったわい。」と笑い合って白い、がけの岸辺を守りぬいた。ダンケルクの危機を救ったのは「ユーモア精神だった。」とイギリス人は誇り高くいう。

イギリス人は戦争中でも決して、ユーモアを失わなかった。といわれ、今なお質量ともに、世界に冠たるものがあると信じている。こうなると、イギリス人にとってのユーモアは、一種のバックボーン(筋金)であり、ピンチ脱出のことらしい。別な言い方をすれば負け惜しみ、やせがまん、の精神でもあろう。

ある人は、次のように説明している。

「イギリス人というのは、不快、困難、絶望的な危機、逆境に、ぶつかると、それを全く別の面から見直す技術を心得ている。その事態についての困った、苦しいという、見方が消えて、おかしさとともに、全く別の新しい考え方が生まれてくる。この価値観の転換、これが英人のユーモアである。」と、このように自部自信をしんらつに、からかい批判できるのは、彼等自身強い自信をもっているからであろう。

笑われの人生は長い。苦しい時、かなしい時、人生が、うとましく

なる時が必ずある。この時こそ、ユーモア精神を忘れず、その時点時点に対処してゆくならば、この苦しい、かなしい事が、返って幸となり、すばらしい、バラ色の人生が開けるものと確信する。

私の提案

一期　宮本　光雄

自啓会で発行する文集もこれで三回目だそうで、これからが大変だと思う。世間に曰く“雑誌三回”である。自分の書いたものが活字になる、それをみる時の気分はなんとも云いようのない、どちらかというとはずかしいそれでいて皆に読んでもらいたいそんなものだ。

編集長の梶原君に以前から投稿するようにとの依頼があり、私自身もなにか機会があったら、一つ二つ意見があるのだが、と前々からそんな折を待っていた。でもいざ書いて下さいとたのまれると、中々文にならない。まったく行きづまりで、ついつい忙しいなどといいわけし、延ばし延ばして、あげくのはてには文集発刊の日取りまで変更してしまったようで、まったく梶原君には申し訳なく思っている。前置きはこれくらいにして私の提案に入る。

『生徒の歌を作ろう』

文集によせる原稿も沢山集まったと聞く。その中には詩あり和歌ありその他の詩もあると思う。どれもこれも自分達の生活の中から、あるいは、自分達の理想からでた詩であると思う。そんな気持ちから生徒の歌を作ってほしい。現在の生徒隊歌は一期の武田氏が作詞したものに、当時の東京音楽隊長高山一佐が作曲してできたものである。この生徒隊歌は普通に云うなら校歌である。校歌は校歌としてその他の歌については、「通信生徒の色男」「生徒の数え歌」などがあった。私はこれに類する様な歌を作ってほしいのだ。「通信生徒の色男」は私が一年生の時に海軍小唄「可愛スーチャン」の曲をもらって、自分達の生活詩を歌った。余談ではあるが、それができて二、三年後に「ネリカンブルース」が発売になり（これはすぐに発売禁止になった）その曲が「可愛スーチャン」によく似ていたので「通信生徒の色男」がいつのまにか「ネリカンブルース」調になってしまった。水測は作った歌がなかったので、いつも「轟沈」を歌ってこれを水測の歌としていた。「通信生徒の色男」はだいぶ歌われてきたが七期八期を最後に知らない人がいるようになり、現在ではＯＢの歌になっている。「数え歌」の方は五期がだいぶ詩を変えて、当世風に歌っていたがこれも九期ぐらいですたれてしまった。時々の盛衰は当然ではあるが、最近ではそれに変わる歌が「アニタ」であり「ブールーシャトウ」であるような気がしてさびしい、そこで年に一回位は歌になる詩を皆んなで作り、音楽家に作曲してもらうか、又は自分達で作曲してもいいから（それでできた「アニタ」であれば結構）作ってはどうか、十一期の歌、十二期の歌、十三期の歌なんていうのもいいし、ラグビー部の歌、空手部の歌……部の歌などが出来るのは考えただけでも楽しいものである。そして将来は古い軍歌に変わって、我々の作った歌で「生徒歌集」でも作りたいものだ。

私の提案に一人でも多くの賛同を得たい。

腐臭弁護論

風徒頌月　（武蔵教官）

ものが腐ると臭気を発するということ、このことは誰もが知っている経験的事実でありましょう。まあ私なんぞ生物学的、生科学的なことにはとんとうといものですから、腐敗菌の作用とその産物である腐臭物質とに関する奥深い知識はなんらもちあわせていませんが、幸いなことに嗅覚細胞そのものはどうやら人並みのようですから、この経験的事実に関して、「おお、私もそれを経験した！」と証言することができます。

しかしながら、次に、「人は誰でも腐臭を嫌う」という一見これまた経験的・普遍的に聞こえる言明に対しては私はいささか疑問を抱かざるをえません。というのも、現に正常な嗅覚を保有し、したがって腐臭なるものが如何なるものかについて明断な認識をもち、それゆえ腐臭をめぐる問題に一応の発言権を所有しているはずのこの私は、日頃腐臭に対してさほど偏見をもちあわせていないからなのです。いや、もっと正確に述べましょう。日頃、腐臭に対して偏見をもつことは様々な意味で批判されてしかるべきではないかと考えているからなのです。

では何故腐臭への偏見は批判されねばならないと言うのでしょうか。それは、まず第一に、もし腐臭への偏見をとりさり、腐臭に対し中立的な、さらに進んでは好意的な態度をとることが出来たならば、我々個々の内面の選考リスト中の「嫌悪の部」に属する要素を多少なりとも減らすことが出来るからで、そのことはとりもなおさず、我々の人生の充実を意味するはずです。だって、嫌いなものが少しでも減少し、好きなものが増加すりゃあ、この世は楽しいにきまっているじゃないですか。

次に、第二の根拠として、美的理由があげられます。およそ「美」とは何か。簡単に言えば「美」とは、何か対象があって、その対象のひきおこす印象が、「生」そのものの本質的志向方向と合致するとき経験される感情のことでしょう。例えば海の彼方に太陽が沈まんとして壮大な夕焼けを呈している時、我々はわきあがるような美感を経験するでしょう。それは我々には皆、かって自分がその中にいた母親の胎内をなつかしむ傾向＝胎児コンプレックスがあるからで、まさに沈まんとする太陽＝母胎に復帰せんとする自分、赤い夕焼け＝一面の血の色、すなわち胎内そのもの、という類比を無意識のうちに行っているからなのです。あるいは、よく肉親が死んだりして非常に悲しく、かつあまりに悲しくありすぎたため半ば虚脱状態にあるようなとき、かえって何かにつけて美を鋭く感ずるといいますが、これも過度の悲嘆によって心の中の爽雑物・日常的で陳腐な物の見方や感じ方等が一掃されて、「生」の本来の傾性があらわになり、「美」を受けいれやすくなったためと解釈するのが当然でしょう。

さて、では「生」にとってもっとも本質的な志向方向はなにか。言うまでもなく、それは「死」です。あらゆる「生」は「死」をめざしつつ、「死」によって自己を完結せんとしつつ、営まれているのです。フロイトが人間の根本欲求に死への本能をおいたのも、むべなるかなと言うべきでしょう。そしてさらに、「死」をもっともよく象徴す

るものはなにか。これまた言うまでもなく、「腐臭」です。冷ややかにアルカイックな微笑をうかべ、隠微な腐臭をただよわせていることが、いかにも「死」らしい死であるための必要かつ十分な条件ではないでしょうか。およそ腐臭がなければ「死」などなんら美的意味がないにちがいありません。近年アメリカでは死体の防腐処置が進み、死後何十年も元の姿で棺のなかにいることが可能で、肉親・縁者の便となっているとか聞きましたが、およそこれほど「死」を冒涜するものはないでしょう。「死」への礼儀、思いやりを失するというべきです。

以上のことから腐臭が、まさに腐臭こそが美学の第一の対象であることが明らかにされました。そうです。我々はすべからく腐臭の偏見を捨てさって、積極的に愛好しなければならないのです。腐臭に親しく接近しなければならないのです。そりゃあ確かに臭いものは臭い、そして臭いものはいやだ、というのが日常の判断です。それは認めます。私にしても同様です。しかしこの判断はあまりに単純すぎるのではないでしょうか。なんら思想らしいひらめきがうかがえないではありませんか。いや、これはつまらぬ心配という言うべきですね。なぜならおのれをふりかえってみればすぐに分かることですが、我々は誰でも臭いものに対する好奇心をもっているのです。例えば独身の男性に対して、はきふるした自分の靴下にそっと鼻を近づけてみたいという誘惑にかられたことのないものは存在しないでしょうし、また、びんの底に残ったまま腐って黄色く変色した牛乳の臭気が室内に漂っていることに反挑を感じながらも心のどこか片すみでまんざらでもない気分を抱く人もいることでしょう。さらには少々下品な話ですが、放屁後、予期したほどの臭気を得られず失望した経験のもちぬしは決して少なくないと思われます。

我々には腐臭に対して愛情を抱きうる素質があるのです。この素質を無理に抑圧してさも俺は苦労しか受けつけぬ、とうそぶくのは一種の偽善でなくてなんでしょうか。我々は断固、腐臭への偏見をとりさるべく自己批判しなければなりません。自己の素質を大切に育てることが急務です。いったい腐臭とは無数の腐敗菌が営々と努力した結果の産物であって、注意深く嗅いでみるならば、数しれぬかれらの歯ぎしりに接する思いがすることでしょう。単なる無機的な臭気とは異なり、我々同様「生」を所有するものに共通のあの名伏しがたいせつなさ、けなげさ、いじらしさが感じとられるはずです。「死」に寄生することによって「生」を得んとするかれら小さきものの、ひたむきな営みは我々をして恍惚とさせるものをもっています。腐敗物質から虹のように発散される臭気、鼻を近づけるにつれ、あたかも透明でしかも内実した小さな宮殿を構成しているかのように感じられる臭覚空間、その宮殿内の広間の一つ一つの扉を開けるごとに次々と展開される腐臭の乱舞、その緊密さ、様々の度合いの臭気の印象が同時に存在することから生ずる優美なハーモニー、鼻腔から咽頭部を通りぬけ舌の表面をさっとすべっていく悪臭群。これらの諸快楽を無視してよいものでしょうか。無視どころか蛇蝎のごとくいみきらっているのが我々の現状です。正直の話、この私だって今のところ腐臭への十分な愛情を獲得しているどころではあ

りません。臭いものは臭いし、臭ければ好きになれないという無反省で子供っぽい状態に滞まっているありさまです。しかしこの広い世の中のこと、きっとどこかには私のように理屈をこねたりせず、黙々と腐臭の美学を追及している「先覚者」がいるはずです。なにせ感覚の世界は本来理屈ぬきに楽しむべきものでしょうから、そういう人こそ美のエリートと言ってさしつかえないでしょう。我々は日夜腐臭やその他諸々の異臭と親しみ、自己の内部に確固とした審美的秩序を形成せんと努力している人々に対し、万雷の拍手を送ろうではありませんか。

探検記と学生時代

太田　弘毅

私は学生時代に、探検などというものにあこがれた。東京という機械文明の騒々しさの中に生きている事に対する嫌悪感と「探検」という語のもつ未開的な語感に酔ったのかもしれない。「探検」というものに、ロマンティズムを覚えたものであり、妙にひかれたものであった。

ロマンティズムの次にくるのは、学生の通性として「学問的」に位置づけたくなってくる。「探検とは何か」などと、まじめに考えたものである。明治四十年代に出た『探検と地理学』、『海陸発見史』等の大著を古本屋から探してきて、探検「哲学」や探検「史学」を、会得したような気分になったものである。この両書は、日本の海外発展期という時流にのって出されたのであろうが、今なお名著の価値を失わないと思っている。

また、偉大な探検家の探検記や旅行記を集め、読んだものである。特にアジア関係のものを好んだが、中でも西城地方（東西トルキスタン地方、現在の中国領トルキスタンとロシア領トルキスタン）に興味をもった。

私が東洋史学専修という範疇に入っていたからでもあるが、アジアに面白味を感じた。西城地方に関心を持った原因は大学入学早々読んだ『漢北と南海』という歴史地理の本や、大学の講義の西城文化史論や『漢書』・『後漢書』の西城伝の読解なども興味をそそる一因となっているようである。

『漢書』・『後漢書』の西城伝や、マルコポーロの旅行記等の古典的なものを手始めに、スウェーデンの地理学者で探検家で、「中央アジアは我が永遠の恋人」とまで言って、生涯独身を通したスゥェン＝ヘディンの『中央アジア探検記』や『探検家としての余の生涯』や『さまよえる湖』を、感激をもって読んだ。

イギリスの探検家で、井上靖氏の小説『敦煌』のモデルであり、敦煌の石洞無慮数千巻の各種史料を牛車につんで、大英博物館に持出したサーオーレル＝スタインの著作も読んだ。『中央アジアの古跡』がそれである。

また、ロシアの軍人で、スウェン＝ヘディンと「さまよえる湖」ロブノール論争をしたブルジェパリスキーの『蒙古と青海』なども、日本の日野強少佐の『伊犁紀行』も、本願寺の橘瑞超探検隊の『中央亜細亜探検』等も名著だと思った。

旅行記に出てくる葱嶺(東西トルキスタンの境目をなす高原、パミール高原)とか、蒲海(「さまよえる湖」として、ディンとブルジェパリスキーとの論争で有名な湖)あるいは干（コータン、玉の産地）などの地名が思い出される。

遊牧民の生活、オアシス民の生活、遺跡荒しの話（乾燥地帯のため、遺跡がそのまま保有され、宝物としての遺品が出るがそれを盗む人)、ラクダの鈴の音、騒々しい商人の声が満ちているバザール・・・・書物の行間から、中央アジアの雑多な生々とした音が湧きでてくるようである。

天山山脈と崑崙山脈にはさまれたタクラマカン砂漠、両山脈の麓に湧くオアシス。そのオアシスをつないで首飾りのように結ばれた所業路（ドイツの探検家で『志那』の著者リヒトホーヘンは「ザィデン＝シュトラッセ」「絹の道」と称した）を、数千年の時間の中で遊牧民、オアシス民、またトルコ人、漢人、蒙古人等が動き回ったわけで、歴史的にも重要な所である。

乾燥地帯であるため、遺跡の保存状態もよく、「漢の時代に書かれた木簡があたかも昨日書かれたような墨色をしているようである」とさえ言われる所である。西城は、私にとって、「恋人」までにはいかないが、「あこがれの人」であった。

インド航路の発見まで、亜欧連絡の主要街道であった西城地方。そして、今、中共の水爆実験場といわれる西城。中ソの緊張が伝えられる中央アジア。私にとっては、学生時代の夢と興味は今になっても、尽きない。

「山登り」

十二期一班　後藤　隆行

私は、休暇中故郷の山に登った。その山は近くでは一番高く、そして庶民的なのである。また、なぜ登ったのか、それは好きだからといえばそれまでだが、家にいた頃、朝に夕に見慣れた愛着のある山だからこそ登りたくなったのであろう。

年末のせわしさを忘れ、一人静かに木の葉にうもれた山道を歩いた。所々雪のある所あり、雪解けで道のゆるい所もあった。そんな道を一歩一歩頂上を目ざして私は、歩いた。

その山は頂上の百五十米程下から傾斜が急になり、本当に山らしくなるのだが、その手前にもう一つ小さな山があった。その山はいかにも登りやすく、また実際登ってみると見晴らしもよいし、ここでいいじゃないかとさえ思えた。しかし、そこで後方を降り返って見ると、更に一段と高い頂上が控えていた。だが、そこはいかにも厳しそうであったのである。こちらの女性的なのとは対称的に。

しかし、折角来たのだからと思い、疲労を忘れて頂上を目ざした。それは前のように楽なものではなかった。しかし、頂上に着いた時私を待っていたものは何であろう。単に景色の美しさのみであっただろうか。いやそうではなかった。それは大切な人生観を教えてくれたのだ。

私は、思わずここまで来てよかったとつぶやいた。それは、もしあの時あそこで満足していたなら、こんなことは知らなかったろうから。

それは何も山登りでなくとも、何か求めれば更にその上が、その先があるということではないだろうか。また何かの事をした時、より努力すればそれだけの報いがある。そして上にたつ、よりよい所に行こうとするには、それだけの努力がなければいけないということを思い起こさせてくれると思う。

故郷を一望に眺め想いの尽きない一時だったが、夕やみも追って来たのでなごり惜しく山を降りた。

旅　路

十二期一班　松田　真治

俺は家を出た。旅行するためである。夜明け前のせいか、まだあたりはひっそりとして暗く、そしてうす寒かった。昭和四十年の夏の日のことである。

俺（水野譲18才京都祇園で生まれ育った）は純粋の京ッ子だ。父親は俺が三つの時、当時幼かった俺と母さんを残して、でていったきり……。なんでも今は東京のなんとか組の組長だということを風の便りにしている。どうせ三つの時から母さんの細腕一本で大きくなった俺だ。今さら「わしがお前の父さんだよ。あの時のことは仕方がないことだ。許してくれ。」っていってきたって俺の知ったことじゃねえ。俺はいつも母さんから「父さんはお前が三つの時に肺をわずらって亡くなったのだよ。そりゃお前、立派な父さんだったんだよ。」と聞かされているんだ。俺の親父はやくざなんかじゃないんだ。俺の親父は……俺が三つの時に……死んだんだ。今は母さんと二人の幸福な生活が続いているんだ。それを……それを乱されてたまるもんか。

それはそうと話をもとにもどそう。

京都の駅から天王寺に向かって快速電車に乗った。『行き先？』その日その日の風まかせだ。家を出る時も母さんに「十日程旅行する」と言っただけだった。

電車の横にはサンスター、明治チョコレートらの工場の大きな看板が目に写る。もうここは茨木あたりだろうか。じっと目をつむると、やせ細った母さんの顔が浮かんでくる。苦労の多い母さんだけに、高校を出たら働いて早く母さんを楽にしてやろうといつも思ってるんだが……。

何分ぐらいたったろうか。目を開くともう電車は天王寺駅にすべり込んでいた。俺はあわてて涙のたまった目をこすりながら阪和線のホームへと急いだ。途中売店でパンと牛乳と週刊誌を買って和歌山方面行の電車に乗り込んだ。

それから一時間程たったろうか。目をさますと時計は七時ニ十分をさしていた。太陽はすっかり空に昇り、青い海がキラキラと光り、向こうには淡路島がうっすらと見える。夏だなァと感じた。さてもう岸和田あたりか。俺の前には四十過ぎの男とその娘らしい（年は十六、七に見えた）のがいて、俺のすぐとなりには男の妻らしき女が座っていた。この親子三人の会話から、彼らは彦根の人で和歌山の親元へ行く途中らしい。この家族の楽しい雰囲気とかわって、いつも見栄ばかり張っている俺にはたまらなかった。何か楽しい気分に

したたりそうなのに俺にはどうしようもなかった。俺には幸せそうに見えた。自分にもはっきり彼らを妬んでいるのを感じた。俺はたまらなくなって海を見つめた。
しばらくすると男の方から
「あなたはひとりで和歌山の方へ？」
と気軽に声をかけてきた。俺は別だんどこへ行くあてもなかったけれど（なおさら、和歌山へ行く気もなかった）突然だったので、とまどったように
「ええ」
と答えてしまった。するとすかさず「和歌山はいい町ですよ」と言って、城がどうの和歌浦の景色がこうのと話しかけてきた。
俺は男の話をよそにじっと娘の顔をみつめていた。娘に興味もないことはなかったが、それよりも両親のいる娘がなんと幸せなんだろうと思った。やがて娘も俺が見つめているのを感じたのか、あわてて下を向いた。その薄赤くなった顔がいじらしかった。この上、みつめるのも失礼だと思って、もとの窓に目をやった。
しばらくして和歌山に着いた。電車はその親子を残して和歌山を去った。それから・・・・・御坊で降りた時はかれこれ十時半だった。
『どうして降りたのかって？』
それは電車もそろそろ嫌になったし、それにここから日ノ岬が近いとも聞くからだ。その方向に向かってほこりの多い舗装のされていない道を歩いていくうち、前方で小型トラックが止まっているのに気がついた。どうやらパンクをしてタイヤを取り換えているのであろう。側まで行くと
「おうい！すまんけんど、そこんとこにあるタイヤを取って下さらんか」
と、ぶっきらぼうにたのまれた。五十四、五の頭のはげ上がった男である。荷台からして市場へ魚を持っていった帰りであろう。俺もなんなくバックをその場に置いてそのタイヤを男のところまで持って行ってやった。ようやく俺という人間の存在を認めてくれたのか
「お客さん、あんたここらの方じゃなさそうじゃなァ、どこまで行きなさる？」
「ああ、日ノ岬へ行こうと思ってるんですが」
「そんなら、儂ンとこと同じ方向じゃ、いま帰るとこだが、この車に乗っていかんかのォ」
「ええ、お願いします。こいつは助かったなあ、やっぱりいいことはしておくものだなあ。」
「それじゃ早いとこ乗ンなさい。」
やがてタイヤを取り換えた車は日ノ岬の方向へと急いだ。
「あんた、どこから来なすったね」
「俺、京都から来たんです」
「ふうん、京都からひとりで？」
「・・・・・・・・。」
「うちのせがれも京都の大学へ行っとるんだがのう、どうしても漁師になるのが嫌じゃちゅうて家を飛び出しよった。もう二年も前になるかのう。もその時はひどう怒って『漁師のせがれが漁師にもな

らんで勉強なんぞしおってなんになる。この親不孝もんめが』て怒鳴ってやったらその時せがれはこの上何も言わんかったがニ、三日したら一通の書き置きを残して家を出て行きよったわい。その時はさすがのこの儂も力も気も抜けて、二、三日は仕事が手につかなんだわい。」

「……。」

「それでもあの書き置きを何度も読み返しているうちに、も自分が間違っていることに気がついたんじゃ。これからの世の中はやっぱり頭が必要じゃわい。何も漁師が悪いっていってはいないけんどのう。：それから一ヶ月程たって、儂に手紙をよこしよってのう？」

「……。」

「それによると『度重なる親不孝をお許しください。父ちゃんひとり残すのはどうかと思いましたが、親の恩も忘れて家を飛び出しました。ところが京都という都会はそんなにあまい所では在りません…』と書いてあったんじゃ。初めは儂も『それ見ろ。言わんこっちゃない。この罰当たりめが』と思ってましたがのう。やはりせがれも苦労したんじゃろう。先ず食い物にありつく為に染物屋に勤めたそうじゃ。そうしてそこで大学に行く為に夜勉強しとったんじゃのう。去年、夜間の大学に受かったちゅうて手紙よこしよった。働きながら勉強続けるつもりじゃろうのう。」

「……。」

「それにはこの儂もほとほと感心した。いつも『今の若いもんは……』と言って、じゃが、もうこれからの若いもんは漁師だけではいかん。手綱なぞもう時代遅れでのう。おお、あれが日ノ岬じゃ。」

そう言ってこの男は車を止め、

「日ノ岬はここを真直ぐじゃ、二分とかからんじゃろう。やァこっちへ行くからのう。そんじゃお前さん気をつけてのう。」

「どうもありがとうございました。おじさんこそ体に気をつけて下さい。それから息子さんとお幸せに。どうも……さようなら。」

車は自分のいる所から右に曲がって、そして……だんだん小さくなっていった。

「さ よ う な ら！！」

俺はいつまでも手を振っていた。そしてその小さくなっていく車をボンヤリ眺めていた。俺は八ツと我にかえって日ノ岬の方へ歩いて行った。

「これが日ノ岬か！」

と思わず俺はつぶやいた。しばらくたつと向こうから灯台守と言うべきか灯台長ともいうべき人がやってきた。簡単な挨拶を交わした後、その方（中野京介と名乗った）の案内によって灯台の中を見て回った。灯台の上からの眺めは実に素晴らしかった。広大な海と空。寄せくる波。白い怒涛が岩を噛む。果てしない地平線。太陽がギラギラまぶしい。俺は独りそんな事を感じながら、力一杯背伸びをした。すると背後で急に、

「どうです水野君、時間も時間ですし、御迷惑でなかったら昼食を共にしませんか？食事と言っても何もございませんが……

お食事まだなんでしょう。」
「えっ‼ええ。」
俺は少なからず驚いた。自然に耽っている所へ急にそんなことを言われたのと、見ず知らずの方から食事を勧められたのとで、どう答えてよいかわからずあいまいな返事をした。
こんな訳でここの家族と共に昼食をいただいた。家族と言っても親ひとり子ひとりの暮しである。茶の間とも言うべき所へ案内された俺は固くなって娘の隣の席に腰掛けた。古い館物で広くはないが小じんまりとした室内である。
「お父さん。今日はハンバーグにサラダよ。」
「そいつは御馳走だなあ。おおそうだ。水野君紹介しよう娘の千景だ。」
「千景です。」
（中野千景‥‥美しいお嬢さんだ。微笑んだ口もとにできる片笑窪が実にかわいい‥‥‥。）とは言ったものの俺はコチコチだった。そのコチコチの俺を次第に和らげてくれたのは中野さんの家庭の話だった。
「この子は本当にかわいそうな子でしてね。」
「お父さん！」
「母親はこの子が生まれてすぐ亡くなってね。分娩の疲労が大きかったのでしょうね。結局この子を抱かずじまいで死んでいったのですよ。あの頃は酷かった‥‥。実際何もかもがヤミでししたね。‥‥‥‥そうだ帰ったら、あなたのお母さんにでも聞いてごらんなさい。お母さんの苦労がわかりますよ。」
「お父さん‼お父さんたらごらんなさい。水野さん御迷惑そうよこんな話。ねえ、水野さん」
「いいえ！いいんですよ。ボクもそういう境遇なんですよ。」
「そうか‥ふうん君も片親か。で、お父さん？おかあさんかい？」
「ボクの父さんは三つの時に母さんとボクを残して出て行ったんです。母さんは昔祇園の小菊と言われた芸子でした。そして当時祇園を縄張りとしていた松岡組の組員である親父、水野と知り合い、お互いに好きになっていったのです。しかし親父は親分の娘と生く末一緒になる筈で母とは許されぬ恋仲でした。親父はどちらを選ぶか非常に悩んだそうです。そのあげく親分の許可なく母と式をあげたが、親分としては、そのまま二人を見逃す訳にはいきません。娘を慰み物にしたとでも思ったのでしょう。親父のもとへ刺客を向けたそうです。祇園が危険と感じた親父は祇園を捨て母を残して独り東京へ行ってしまったのです。」
「ムム‥‥‥‥。」
「その時、すでに母はボクを身籠っていました。‥‥‥‥その後親父は『きっと迎えに来る』とか『組の資金』だと言って手紙で金を請求してきたのです。母はそんな男に未練があるのか無理をしてまでも金を作って親父に送っていたそうです。しかもそれは一度や二度ぐらいではなく金額にして何十何百万ものかねでした。‥‥金の請求が途絶えたと思ったら親父は東京で女をつくってなんとか組の組長としてのさばっていたのです。母を馬鹿な女だと思われるでしょ

うが、親父に一途の愛を捧げてきた母には親父を忘れ切れなかったのです。そんな優しい母を騙して金を取り上げ、あげくの果ては母を捨てて他の女と一緒になった親父を恨みました。……稚きながらも東京に行って殺してやろうと考えたことも幾度かありました。今もその気持ちは……変わりありません。……東京に行って親父を……親父を殺すんだ。母さんを騙した憎い親父を。」

「ムム……。」

次号につづく

雪

十二期一班　竹山　認

賢一の父は貿易会社の社長だった。時たま古くさい事を言う以外は、皆に誇れる父親だった。父は大学卒、母も短大卒だったのに、賢一はそれほど、とび抜けて頭はよくはなかった。上の兄二人は、大学に行っていた。勉強はあまり好きでなかったし、何か技術を身につけたかった為、工業高校に入った。もちろん両親は反対したが、賢一の意志が強かった為、父親が許したのだった。

美男子という顔立ちじゃなくて何か、きりりとした男らしさを臭わせていた。その為ガールフレンドは割に多かったが、男ばかりの高校に入った為女子との間は、遠ざかっていた。しかし同級で女子高に行っている優子とは小学校以来のつきあいでつきあっていた。

ある暖かい春を思わせるような三月の土曜日、学校も終わり皆嬉しそうに友達と話をしながら家に向っていた。しかし人間こう暖かいと何かボーッとするものがある。それに土曜日とかさなったりすると、なおさらである。範子は友達と、まわりをかまわず、はしゃぎながら横断歩道にさしかかろうとしていた。それに今日父親がヨーロッパから仕事を終えて帰ってくるからだった。姉は大学で家にいなかった。それで父にいつも甘えていた。

賢一は友達と二人で自転車を押して、さっきから三人をながめていた。特に範子と同じ女子高であったかもしれない。

「あいつら、よく喋るなあ。」

二人で話していた時に、範子は急に横断歩道に飛び出した。友達をからかって逃げるところだろう。

「フフフ……ハハハ……。」

とよく笑うものだ。その笑い声が急にやんだ。

「危ない。」

「キャーッ」

という声に賢一は範子達の方を見た。横断歩道の前方に範子が死んだようにうつぶせになっていた。その前にダンプが止まっていて、その窓から青ざめた顔をしたまだ十七～八才であろう少年が顔を出していた。がすぐに首を引っこめた。と同時に車が動きだした。ものすごいスピードで逃げて行った。恐ろしくなったのだろう。その後まわりに人々がやじ馬のように集まった。

「一一〇番だ。」

「救急車を呼べ。」

とただ後ろの方で言うだけだった。誰一人としてそれをする者が

いなかった。賢一は見ていて腹立たしくなった。そして前に出て友達に頼み女の友達を一緒に車に乗せて近くの病院に運んだ。自分でもテキパキとした態度にびっくりした。
病院には、賢一と範子の友達と母親が来ていた。友達が知らせたのだろう。医師が出て来た。
「右足骨折です。」
賢一は安心した。のもつかの間
「直ってもびっこを引きますね。」
という言葉に母親は泣きくずれた。賢一は何と言ってよいやら困った。病室で範子は、目をさましていた。まだ恐怖からさめぬ顔をしていたが、母親の顔を見たら、それも直っていった。
「おばさん。この人が範ちゃんを病院につれてきて下さったの。」
「どうもありがとうございました。お名前は？」
と優しい顔で微笑するように聞いた。美しいと思ったが、
「岩瀬健一です。」
と言ったとたん、母親の顔が一瞬青ざめたのには賢一は気づかなかった。
一ヶ月ぐらいで松葉ヅエで歩けるようになった。しかし、一生松葉ヅエを使わねばならないと知った時、ショックで範子は、何度も死のうとした。しかし、賢一の優しい態度にだんだん気をひかれるようになった。しかし、範子の両親は、賢一が範子と親しくなるにつれ二人の仲をさこうとした。賢一にはわからなかった。何かあと味の悪い感じだったが、賢一から見舞いに行くのをやめたそのため範子が退院する一ヶ月は何の行き来はなかった。彼女は何をしているのだろうと思っていた日に範子から手紙が来た。今週の土曜日裏山の池の所で会いたいと言う内容だった。賢一は友達の誘いも全部断って、(もちろん優子の誘いも断った。)学校が終わるとすぐに、裏山に行った。範子はまだ来ていなかった。野原に足を投げ出して草をむしりながら
「話って何だろう。」
と思いながら空を見上げた。何か曇っていて、いやな感じだった。
範子が三十分ぐらいして現れた。その顔は、空の色の関係か黒く沈んで見えた。
「呼び出してごめんなさい。」
と笑って言ったが、何か黒い影あるような笑いだった。賢一はとっさに二人のことだなあと直感した。
「二人の間のことだろう。回りがどんなに言おうと僕は君が好きさ。まわりがどんなであろうと・・・・・。」
そこまで言った時、何故か涙が出てきた。その途端範子は賢一に飛びついて泣き出した。賢一はどうするすべもなくそのままにしていた。
「泣くのは、およしよ。」
と優しく肩をおこしてやると、また一層泣き出した。何かあったのだろうなあと思いながらそのまましていると涙がかれたのか、話を始めた。
賢一の父親の父親つまり祖父の時、範子の祖父の会社を乗っ取っ

たらしい。それを又範子の父親が今のようになるまで建て直したらしかった。二つの会社は競争心以外にそんな事情がからまりあってにらみあっていたらしかった。それが範子と賢一の間にもふりかかってきたのだった。

道理で「岩瀬賢一です。」と言った時「お父さんは岩瀬産業の社長さんでは」と聞き「そうです」と答えてからは今までの態度と変わったように思えたのだった。

「しかし、両方の親のことで僕達のことを何故反対しなければ、ならないんだ。」

を怒りに燃えて言った。純粋な二人の気持ちを大人が、割りこんでさくことはないだろうに・・・・・。

この気持ちを父に話したところ、又古くさい感情が、はみ出て、

「なに！佐藤商事！そこの娘と、おちぶれた所の奴なんか、つきあうな！」

カッときたが、黙って父親の部屋を出た。両方の親から反対されていたが、二人は隠れてつき合った。それも長くは続かなかった。範子が、姉のいる大阪の方の学校に転校させられることを聞いたのは秋のそよ風が、吹き始めた九月だった。もちろん二人の事のために範子をひき離すためだろう。二人をひき離そうとする程に二人は親密になっていったのだが、転校にはどうするすべもなかった。　範子は十二月までには転校させられるらしかった。

二人にとって十一月までの三ヶ月が駆け足のようにすぎ去った。今年は冬の訪れが早かった。十二月に入ると東北地方にはもう初雪が降ったことが新聞に載っていた。

範子が転校する一週間前、又二人は裏山の池のところで会った。二人は黙って枯れた落ち葉の上に座った。池を見ていた賢一は、ただ一言いった。

「二人だけの世界へ行こう。」

範子には、賢一の覚悟が手に取るようにわかったのでただうなずいた。

次の日の昼、二人を乗せた汽車は、初雪の野や山をひた走っていた。範子が雪のある所で死にたいと言ったからだった。白馬駅の一つ前で降りたのは、この世の想い出に二人だけで、残りの命を一歩一歩、ふみしめて行きたかったから・・・・・。」

二人はどこまでも歩いて行った。暮色が二人をつつむころ、白い小さい野良犬と行きあった。範子はそっとだきあげそしてまた歩く。雪がちらつき始めた。白馬への登り口まできたとき範子は子犬を放してやった。走りさる子犬をふたりは、いつまでも見送った。

死が静かにふたりを待っている。心は軽かった。

「君を愛して・・・・・ほんとうによかった・・・・・」

しっかりとふたりは抱きあった。

すこし風が出てきた。

翌朝、白馬の中腹の雪の中で、満足そうなふたりの死顔が、まぶしく輝きはじめた朝の光をあびていた。

美しく、きよらかな顔であった。

未来に思う

十二期一班　永野　善弘

山あり、河あり、丘あり、海あり、その上で小さな生きものが蠢いている。何をしているかと顕微鏡で覗いてみると、或るものはマラソンをしていた。或るものは読書をしていた。或るものは上を見上げていた。おそらく空の美しい無限の世界を見ているのであろう。或るものはダンスをしていた。或るものは泳いでいた。或るものは恋を語っていた。

これが人間という生き物であるらしい。他の調べ方で詳しく調べてみよう。

まずは透視法で・・・・。ふむ、たいしたものだ。数ミクロンではあるが地下にちょっとした住居があるではないか。学校があり、研究所があり、地下のすぐ下には各所にスクリーンがある。また繊維のような交通網。世界連邦議事堂前のコントロールタワー。これより世界に対して、朝、昼、夜各酸十分間（ここではミニ秒である。）のニュースをスクリーンに展開させる。その他の時間は各私社による文明の展示である。

それではこの人間の生活を一秒間覗いてみよう。朝、地球時間で六時に一般の人は起床する。七時に人工食糧である食事をする。八時よりニ十才以上の者は自由時間、未満の者は十時まで家庭において勉強、その後は各国に行き遊びながらの勉強である。夜は十二時に眠りに着く。衣服、住居、食糧等すべての機械で生産している。

自由時間といっても遊んでいるわけではなさそうで、或る者は地表に出て、自然の中で文明とかけはなれた所で一日を過ごしている者もいる。馬鹿な生き物にしてはできすぎている。おもしろい。心の中を覗いてやろう。なになに、ふむ。

「人間はよりよく生きるのにはどうしたらよいか。」だと。ふむ。

「なぜ生きてるのか。」だと。

「恋をして楽しみでいっぱいだ。」なるほど。

「愛しちゃったのよ。」ふむ、おもしろい。

「おもしろくない。地球を爆破してやろうか。」馬鹿も多いね。

ここらへんでやめておいて、以上のことをもとにして、地球の必要性を判決してみよう。

地球の人間という生き物は大部分の者が生きたいと願っているらしい。しかし生き方がそれぞれ異なり争いが絶えない。だがちょっとした文明を持っている。悪いやつもいるし、良いやつもいる。小さな生き物ながら、これだけ大きな行動範囲を持っている。これ以上範囲を広げられれば宇宙の平和が守られないとも限らない。良いやつだけであれば必要であるが・・・・・。どうしたものか・・・・・。

恋をしているものがいた。ふむ、美しさを味わえる。無限の考えを持っているものだということがわかるではないか。悪いやつもいるがこれらの者も、いつかは生きてる喜びを味わえるであろう。この美しい小さな生き物のために、少し宇宙のひずみができてもよいだろう。

さて、結論として残した方が良いということになった。これを宇宙連邦に知らせよう。何も知らぬで、過さぬよう願いたいものだ。

人類最後の発明

十三期三班　松本　行正

「皆さん、今ここに二十二世紀最大の、いや、全人類始まっていらいの、又全人類最後の発明が行われようとしています。」

アナウンサーはその興奮をかくしきれない若干、熱をおびた声でいった。

その発明というのは、頭脳である。電子頭脳。

二十二世紀、それは人類最高の年であった。海底には大規模ノア牧場を形成し、鯨を初め、ありとあらゆる海産物を飼育している。海上には、人工の作業島をうかべ、加工し本国に送る。南極には、赤道海流を導き、海水の温度を上げ、それに、太陽と地球のある地点に巨大な反射鏡を設置し、極地方にも、太陽光線を送った。それによって、広大な土地、海を開いた。とくに南極地方は世界最大の食倉地帯である。深海、海上の作業は、太平洋にイカダ形式の太陽電池をうかべそれによって無限のエネルギーの供給を受けている。地上においては、高層建築がならびハイウェーがビルの目をぬって立体的に交さしている。もう、こうなると、地上より地底の方が安心である。太陽エネルギーのもとに、計画された、都市群、それに匹敵する緑地帯が、地上以上の生活環境をほこっていた。道路に接続された、道路の一部である。

電気カー、あるく舗道、モノレール、地球一周弾丸列車、惑星間亜光子ロケット、この世界において一番重要なもの、それは、電子頭脳である。ありとあらゆる機械を統制し、かつ修理、考案、創造していく人類最後の発明、考える頭脳、これを長年作ろうとしてきたのである。（人類の争い、生活、未来のすべてのことをかけて）

アナウンサーの声が流れる。

「成功です。後二十四時間すると、この電子頭脳は活動します。人類が何万年と築いて来た、文明を二十四時間で整理し、行動するとは、何とすぐれた頭脳でしょう。」

一時間と一分後、全人類は滅亡した。

頭脳いわく、この文明に対して、一番危険なもの、それは人間だ。

みなさん手紙を書きましょう

十二期一班　重松　均

みなさんの中で多くの人は、文通をやっているでしょう。毎日くる手紙の量を見れば、一目瞭然、すぐわかります。両親からの手紙兄弟からの手紙、友人からの手紙、そして彼女からと、種々様々ですね。私が思うには、手紙を書くことは、非常にいいことだと思います。特に女の子なんかに書くときなどには心をこめて、いっしょうけんめいに書くので字もうまくなるだろうし、また文章をつくるのもうまくなる。漢字も覚える。など現在の勉強に役に立つだろうと思います。

いろいろ来る手紙の中で一番楽しいのは、なんといっても、女の子から来た手紙じゃないでしょうか。手紙の来た日はなにか一日中うきうきしますね。何回も何回も読みかえしたり、してますね。自分

のことを一番心配してくれているのは、両親ですね。だから両親への手紙は、なるべく多く出して、安心させることです。遠くはなれているから、せめて手紙でくらい親孝行してください。手紙を書く事に夢中になって勉強がおろそかになるような、文通はよくない。むしろやめたほうがいいですね。

最後に、みなさん、どんどん手紙を書きましょう。

「一眼回顧」

十二期一班　岡村　良三

初めて水兵さんにお目にかかったのは、中学二年の時だった。旅行の途中、とある駅でスイスイと歩いていく隊員さんー真夏で略衣を着ていた。

「アレー半袖、こりゃ話が違う。あの“カッコイイ”セーラー服はどうなったの。」

当時、勿論隊員の服装等は知る由もなかった。セーラー服にあこがれ、入隊の意志も固まりかけていた頃だけにショックであった。後になりセーラー服の隊員を見た時は“ホッ”としたものである。

入隊の合格通知がきた当時、毎日、自分のセーラー服姿を想像して、早く着てみたいと“わくわく”していた。

無事着隊し翌日であったか、号数を合わせる為にセーラー服を着た時、要するに生まれて初めてセーラー服を着た時、さすがに嬉しかった。念願かなって制服に身を包んだ時の感触――忘れることはできない。その頃は制服を着るたびに鏡に向かったものであった。

最初の休暇の時、速く故郷の者に“見せたい、見てもらいたい”という気持ちで一杯であった。やがて大阪に着き駅を歩きだした時、人々の異様な“まなざし”に気がついた。初めての体験であっただけに恥ずかしいような気持になり歩くのも速くなりがちであった。

坊主頭に別れをつげて、髪を伸ばし初めた頃、外出中は坊主頭が恥かしく、なかなか帽子をとらなかった。が、長髪となるとゆうゆうと帽子をとるようになったものである。

帽子の話についでにもう一つ。官品の帽子に“あき”がきて、先輩のかぶっている“カッコイイ”私帽にあこがれた頃があった。ようやく許可が下りて、思い思いに変形してかぶり、さっそうと歩いたものであった。変形しすぎて注意を受けることもたびたびあった。

夏休暇の折、母校を訪ねたことがあった。猛暑の日ではあったが正服を着て行った。或る後輩が

「カッコイイナ、僕も自衛隊に入ろうかな」

と嬉しいことを言ってくれた。次の一言

「けど、夏なのにそんな長袖着て暑苦しそうだね。やめたーっと」

夏正服がつくづくうらめしく思えた。

何時の休暇だったか地連を訪ねることにした。正服を着て大阪駅まできた。タクシーに乗ろうとしたところが、乗り場が大変こんでいる。少し離れた所で車を止めたところが、大型のデラックスな外車。「まァいいや」と思って乗ろうとしたところ、近くにいた人が何か軽蔑したような、不服そうな顔でジロジロ見つめている。

「この野郎、自衛官のくせにぜいたくしやがって。」

とでも思っていたのであろう。逆にジロッと見返してやって車に乗った。

ある上陸日、一日を終えて校門の前まできたところ、正服のチャックがこわれているのに気がついた。チャックは左側についていて、警衛も左側にいるから当然白いシャツがのぞき出て見つかる。どうしようかと迷ったが、左腕を体側にピシャリとあて、そのまま入って行った。冷や汗をかきながら、ようやく警衛の前を通り過ぎたときはホッとする思いであった。

ある休暇の終わりの日、とうとう学校へ帰らねばならない。正服を着、家を離れる。例のごとく、ジロジロ見られる。いい加減慣れっこになってはいてもいい感じはしない。ところが呉に着き、江田島に着き、歩いていて“はた”ときがついた。誰も自分に注目する者はいない。

「何と江田島はいい所よ。」と思ったことであった。

終

私達が初めて正服を着てからもう二年になる。その間、正服に関する思い出とか出来事とか多くのことがあった。今では正服を着ていても、さほど感じることは少なく、入隊当初のひきしまった気持ちが薄らいでいるようだ。このひきしまった気持ちは大切なものでいつまでも持っていなければならないものであると思う。

我々はこの正服を着ている意味を考え、そしてこの正服に誇りを持ち、この正服に対する認識を深めていくことを怠ってはならないはずだ。

兄

十二期一班　村中　良

私には兄が三人いる。うちすでに二人が、りっぱな（りっぱかどうか知らないが）社会人であり、もう一人は学生である。

遠く離れてしまった今考えて見ると、三人共非常に良き兄貴である。しかし二年前まではこうではなかった。特に私が小学校に行っている時ほどいじめられ虐待されたことはない。三人共だいたい三ッ四ッに開きがある。

先ず着る物であるが、長男から次男に回る。三男は兄弟の中でも飛びぬけて大きいので、三男はぬけて四男の私に回ってくる。どうにか現形がある程度。次に買い物などの用事であるが、最初は上の方から頼まれる。これも弟に弟にと回ってくる。やはり最後にくるのは私であるが、下にいないので行かなければしかたがない。

得をしたのはケンカの時ぐらいである。いくら私の方が悪くても、叱られるのは大概兄貴の方である。父や母の叱る理由は三ッも四ッも年下の者とケンカなどするなと言うのである。

私には弟がいないので、どういう気持ちで兄貴が怒っているのかわからない。だからいつも父や母が兄貴を叱るのを聞いて自分の方が正しかったんだなあと思ってしまう。

現在の兄貴達を紹介しよう。長男は三人の中で一番品行方正でおとなしい。なんでも屋だがすぐ飽きるたちらしい。写真機械を買い込んで写真現像を自分でやると言っていたがまだ使ったことがない。その他数えたらきりがないほどである。

しかし熱中した物もある。一つはスキーで、毎年正月に家にいない。近頃はもう年だといって行かなくなったが、かわりに尺八を習い始めた。もう初でん（初段と同じ）を取って今中でんを狙っている。日曜日になると朝っぱらからピイピイやるのでうるさくてしかたがない。最近はよく聞けるようになったが。

次に二番目の兄貴であるが、これがまた悪い。今は会社でおとなしくしているが、学生時代は勉強をせずに遊びと名がつくものはすべてやっている。マージャン、パチンコ、ゴルフ、ボーリング、なんでも人並み以上で、いつも長男に教えていた。アルバイトも種類を書くと何枚あってもたらないくらいである。

少し書くと、土方、デパートの売場、テレビ映画など上から下まで全部やってきた。何しろおもしろい兄貴で、私と一番気が合うしまたよくケンカもする。

三番目はわりとおとなしく真面目ではあるが、私と年が三ッしか違わないので、小さい時はよくなかされまたケンカした。

しかし私が江田島に来て一年経ってこの兄貴も下関の大学に入った。そこは私とほとんど同じような生活なので、よく話も合うようになりしみじみいい兄貴だと思うようになった。

このように今思い出しながら考えて見れば、みんなほんとうにいい兄貴ばかりである。あと二・三人ほしいような気がする。

すばらしき体験飛行

十二期一班　中條　慶晴

私は、自衛隊に入る前、夏季航空教室に参加した。航空教室というのは、航空自衛隊が主催する高校、大学生を対象とする行事である。この行事は基地生活を体験してもらうために行われるもので三泊四日間の期間の最後日には体験飛行がある。私の参加した理由はむろん体験飛行である。さすが三日目の夜は、なかなか眠られなかったことを記憶している。

明けて四日目私たちのために美保の輸送航空団からC―46輸送機が到着した。双発で胴体の太い、いかにも輸送機らしい感じだ。三つのグループに分れ、私は三回目に飛行することになった。一回、二回と飛び立ってゆく約四十分後二回目が帰って来た。次はいよいよ私の番である。胸をわくわくさせながら後部の扉から機内に乗り込んだ。乗ってみると輸送機だから座席などついていないだろうと思っていたのに二人がけのりっぱな座席がついていたのには驚いた。後で聞いてみると、この機は特別なのだということだった。

全員乗ったのち乗員が扉をしめ私たちに安全ベルトをしめるように指示し、しめたのを確認すると機長に「準備よーし」と報告した。機長はコントロールタワーに連絡し離陸許可を受けるとやがて私たちの乗った飛行機は誘導路から滑走路へと向かった。

滑走路に着くと機長はエンジンをふかす、機体はすごい爆音を立てて走り出した。もちろん防音装置など、装備されている訳がないので人と話すことができないくらいだ。ぐんぐんスピードが増す。

すべてのものが後ろへすっ飛んでゆく。とても愉快だ。
やがてフワリとした。浮いたなと感じたと同時に機首を上げてどんどん上昇していった。窓の外を見るとだんだん小さくなってゆく。しばらくたつと今までの上昇をやめて水平飛行に移った。
乗員が、
「現在、高度百五十米です。ベルトをはずしてゆっくり下界の景色をごらんなさい。」
　といわれたので、いわれるままにベルトをはずし、外の景色をながめて。いやーすばらしい！青い海、白い波、マッチ箱のような家、アリのような人、私は、無意識のうちにカメラのシャッターを何度も切った。
　これは空を飛ばないとわからない美しさである。チラッと翼のエンジンを見ると力強く回転して私にあいかわらずこころよい振動をあたえてくれる。
「操縦席を見たい方どうぞ。」という声で行こうとすると、
「ああ、待って下さい。全部一度に来ないで下さい。バランスがくずれますから、二、三人ずつどうぞ。」といわれた。
　それを聞いて飛行機って不安定な乗り物だなあと思った。順番を待って操縦席をみた。計器、レバーハンドルなどが天井、前面、側面と所狭しと並んでいて、二人の操縦士が真剣な顔つきてハンドルを握っていた。
　離陸してから約二十分後、機体は大きく左に傾き旋回し帰途についた。気流が悪いのかやけに上下するので数名酔って気分悪そうな顔をしているが私はそうでもなかった。やがて着陸体制に入った。まるでエレベーターに乗っているように錯覚しスーとする。大地がぐんぐんせまってきた。キュキュと車輪のこする音がして完全に着陸し、誘導路からもとの場所までもどって来た。扉が開かれ飛行機を降りた。
　たった四十分という短い時間であったけれども貴重な体験をした満足感で私の胸はときめいていた。

まことに遺憾に存じます

十二期一班　小島　春雄

　諸君はこの世の中をどう思うか。このせちがらい世間を。狭い島国に一億の国民がひしめいている日本。政治の腐敗、物価の暴騰、住宅難、学生の奔放。人間は騙し合い、憎み合い、殺し合う。後進国では人口の急増と食糧問題で悩み苦しみ、同民族でありながら二つに分かれて争っている国が数ヶ国とある。交通事故、強盗殺人、天災地変、そんなものがいつ自分にふりかかってくるかわかりゃしない。故郷を遠く離れた十八、九の餓鬼がいかに社会の中では小さく無力な存在であるか身にしみてわかった。社会は俺が思うほどには甘くなかった。この現実にきびしい世の中でおもしろ楽しくやっていくにはどうしたらいいだろう。ささやかな光はないだろうか。
　俺は宝くじを毎月買っている。だが大金が当たったことは今のところない。残念だ。西日本では一等四百万円、総額九百万円だ。一等の確率は三十二万分の一、当る望みは殆どない。自衛隊員がみな買

っても当たらないかも知れない。だが一枚でも買っておかなければ絶対に当たりっこないんだ。だから俺は買い続けている。買うと百円の損、買わないと四百万円の損とは誇張すぎるだろうが。発売は中国、四国、九州の十七県で三十二万枚売り出される。一枚百円だから三千二百万円の収入で当せん金と人件費を引いても二千万円以上の利益となる。それが公共事業につかわれるのであるから、一口百円の寄付と考えれば一種の慈善であり、社会奉仕であろう。

百円でみられる四百万円の夢としてもいいだろう。世界旅行や独立起業設立、家つきカーつきババ抜きの生活、千人斬りｅｔｃ。人間として当然であるけれど、この世の中では美しい夢ではないか。一円玉十三個集めてパン一個買ってショボショボ食うのはよせ。下宿で十五円のラーメンを食ってゴロ寝するのもヤメロ。我々は前途洋々たる若者ではないか。宝くじが一枚の紙くずで終わるか、数百万円の有価証券となるかは、それは誰にもわからない。他のギャンブルの競輪、競馬、競艇、花札、トランプ、ルーレット、スロット、麻雀、パチンコなどと比べるとずっとまともなギャンブラーではないか。宝くじを当るのに、貧富、老若、学歴などはすべて無関係である。全発売枚数買いしめなければ一等が当たるとは言えない。三十一万九千九百九十九枚買った残りの一枚が当るかも知れないのだ。そして、その一枚が紙くずとなって燃やされてしまうかも知れないのだ。運命は人生に対してしばしば冷酷であるように。

諸君は外出してよもや交通事故に会おうとは思うまい。自分だけは大丈夫だという意識が人間誰しもあるのだろう。それならば、万が一、一枚でも買ったとき自分に当たるかもしれないと思わないだろうか。唯我独尊的な思想を持っていないだろうか。人間の殆どが個人主義なるがゆえに。人間は人生航路を着実に一漕一漕南の楽園へ向かって大洋に漕ぎ出すのもよいだろう。だが一方、ケーブルに飛び乗って山頂へ登るのもよいと思う。偶然と可能性を信じて。

先日俺は友人と広島へ行った。その広島市路上の出来事である。相棒の某二士が金に困ってつぶやいた一言

「サイフでも落ちていないかな！」

と、その瞬間、俺たち二人の四つのマナコは路上バス停の傍の一点に集中したのだ。女物のサイフが落ちていたのだから。これは嘘ではない。実話である。

いくら入っていたか。交番に届けたか。それは刑法三十八章二百五十四条遺失物等横領に触れ、懲役又は罰金、科料に処せられるので言わないでおこう。又、つまらない話だが寝室掃除の俺が毎日三円ぐらい拾うのを誰が知っていようか。微々たるものだが。

世の中には十五枚買った宝くじのうち十枚近くが一等七百万円を初めとして、ガバッと当り、総額一千数百万円がドサッと転がり込んだ人が三ヶ月ほど以前にいたそうだ。運のよい人だ。五十枚買って三百円しか取れなかった奴が生徒にいたそうだ。馬鹿げた話ではないか。

ところで人間は現状にある程度満足しなければならないが、全々不満を持たないのでは進歩がない。向上心を持つべきだ。貧乏人は金持ちになるためにいろいろな方法を考えるだろう。金持ちはより

以上の金持ちをめざし、人間の欲望には限りがない。金、この世は万事金次第だろうか。地獄の沙汰も金次第と言う言葉もあるようだけれども。金はないよりあった方がいいには決まっている。だがそれはすべての物事に対しても言えるので、意味がない。金持ちがはたして幸福だろうか。人間の大切なことは心であって金ではない。しかし、その日の飯にも事欠く人間が豊かな心を保ち得るだろうか。義理や人情は金じゃ買えないが肉体は売り物にされている現実はどうだろう。好きでやってるのじゃないかもしれないが、売春婦の心は清純であろうか。精神的に処女だと言えるだろうか。人間の肉体と精神は明らかに別なものだが、唇を許さないということは残された最後の抵抗であって、精神の純潔を物語るものではないと思う。

金は人を変える。自分を、家族を、友人を。金によっても不動の友情を保ち得る仲こそ、真の親友であろう。人間は困窮するととかく他人の物が欲しくなり、泥棒ひいては殺人まで犯すではないか。遺産が残れば親子兄弟でもうばい合う。

「泣く泣くに良い方を取る形見分け」とは実にうまい。

人間は欲求が満たされることで幸福を感じると思う。では金で欲求が満たされるならば幸福が買えるではないか。生理的な睡眠や休息や飲食やセックスや肉体的苦痛を避けることなどの欲求は金があれば自由になる。社会的な優越や独立や所属や愛情などの欲求でさえも金が物を言う時代である。すると結論として、この世、特に資本主義社会においては、“万事金次第”と言えよう。だが金がないと不幸だというわけではない。金がなくたって、他人に迷惑をかけないで、民主主義の法律の許す範囲内で大代言、楽しく愉快に暴れ遊ぶのが俺の持論なんだから。だけど、俺は素朴で純情だったこの俺を個人主義的なこんな考えにしたこのせちがらい世の中を憎む。人間は自然を改造しようとする。自然は人間に対して気まぐれに猛威をふるう。川の水は汚れ、大気は煤煙でくもっている。会社は倒産し、物価は高騰する。学生はペンを捨てて角材を持ち、役人は汚職横領で私腹を肥やす。漁船は網を破られる。人はだまし合い、にくみ合い、殺し合う。こんな世の中になぜなった。こんな俺に誰がした。人間の愚劣さが見え、歴史の虚しさ、個人の限界が判ったとき、俺は悲しい。

だけど、だけど、これだけはいえる。

世の中に自分でためしてみないで判ることなんかない。

人生は失敗の連続なんだから。

＜GO・FOR・BROKE！＞

「浦島太郎」

十二期二班　梅澤　徹

昔話に、「浦島太郎」という話がある。

若い太郎が、ある日、カメの子を助けたことから、その親ガメに連れられて龍宮城へ行き、ケメ子姫と楽しく生活するが、ふと家のことが思い出され、龍宮城をあとにして帰って来た。しかし、もとあった家もなく、周囲の人々も知らない者ばかりである。さびしくなった太郎は、おみやげにもらった「玉手箱」を開けてみると、中から白

い煙と共にサイケデリックサウンドが聞こえ、太郎は「アッ」というまに、おじいさんになっていたという話である。

小さいころは、「おもしろい話だなー」なんて思ったけど、現在考えて見ると「あほらしい」という考え方が強い。それじゃあ作者がかわいそうなので、つぎのようなこじつけをしてみた。

まず、この話を考えた人は、アインシュタインなんかよりも、もっと頭のよい人で、ひょっとしたら、何千年も昔に地球にやって来た宇宙人かもしれないし、ムウー大陸や後ランチス大陸が実在して、その国の科学者なんかが作った話かもしれない。

アインシュタインの相対性原理とかいうものの考え方だと

「光子ロケットで宇宙を旅行すると、そのロケットの中では時間の進み方が遅れるから、年をとらない。」

なんていうふうになるのだそうだが、ぼくには全然わからない。

「ああ、マンガでよくやるやつだな。」

と思うのが、せいいっぱいである。一八八一年、マイケル＝モーレーという人が発見した

「運動する物体は、運動速度に応じてその長さがちぢんでゆく。」

という考え方があり、次の式で表される。

$$\frac{l^1}{l} = \sqrt{1 - \frac{v^2}{C^2}}$$

l:物体の長さ　v:その物体の運動速度
l^1:その物体が動いたために変化した長さ　c:光速

この式をもとにして、相対性原理とかいうやつを考えると

$$\sqrt{1 - \frac{v^2}{C^2}}$$

より、VがCに近づくほどこの式は0に近づき、V＝0になったとき、ロケット上の時間の進み方は0となる。つまりロケット上では時間が進まないということになる。

なんか、わかったようなわからない話であるが、ようするに太郎は、光子ロケットのようなものにのって、宇宙旅行をしていたのではないかと思う。

また、外国映画で「猿の惑星」という映画があるが、この映画である宇宙パイロットが光子ロケットに乗り込んだ際、年をとらない薬を飲まなかったため、一瞬にしてミイラになってしまうという場面があった。これを、玉手箱の件にこじつけると、今まで薬を飲んでいたため年をとらなかった太郎が、白い煙をあびたために、その薬の効き目を失い、一瞬にして老人になってしまうのである。

こういったこじつけも、なかなかおもしろいものであるが、書いている本人がなにがなんだかわからないのであるから、読み手はもっとわからないのではないかと心配している。

平和主義

十二期二班　福本　耕作

暴力を否定する平和の理想は、インド独立運動の指導者であったガンジーによって政治のうちに具現された。

かれはイギリス帝国主義の奴隷的境遇にあるインド人を人類愛の

立場から救おうとしたのである。かれのとなえた運動は『心理の把持』と呼ばれるものであるが、暴力を否定し、不傷害の理想を掲げている。かれはインド独立のために外国人に害を加えることを好まなかった。暴力をどこまでも否定して抵抗することは、消極的な態度ではなく、また、暴力によって相手に打撃を与えないという無力感から出たものでもない。かれの暴力否定は生きとし生けるものを害しない。いっさいの人間を傷つけないという『不傷害』の思想からきている。それは、あらゆる生命あらゆるものに対する愛情であるとともに、愛情をそそぎつづけてもなお救いえない悪人はないという人間への深い信頼からきている。

ガンジーのこのような思想は、インドの宗教における伝統的な慈悲の思想によるところが大きい。かれは平和的な手段を用いながらイギリスの支配をくつがえそうとして、イギリス製品の不買を実行し、民族資本の蓄積によりインドの近代化をめざした。

かれは宗教を尊重した。力のないものでも多くの人々がかたく団結するならば暴力に対抗しうるという思想は、ガンジーなき今日、なお、大国の武力による暴圧に悩む世界諸国民に希望と示唆を与えている。

原子爆弾をはじめとする核兵器の出現によって、人類が破滅の危機に直面している今日では、戦争は絶対ひきおこしてはならない。戦争に反対し暴力をこばむという平和主義の思想と行動は、いまやすべての人々の切実な願望である。

駒ヶ岳を通る時

十二期三班　今村　孔久

休暇、青函連絡船を降りると、雪が舞っていた。寒い雪がふきこんでくるホームで接続の汽車を待った。いいかげん体中がひえると「ムーッ」とする人ゴミの待合室へ「いやだな」と思いながらも「暖かいだろう」とそれを期待して歩きだした。

階段までくると、ディーゼルが雪煙をたてながら、あわてて入ってきた。連絡船の中で、八枚しか残っていないという座席指定券を争って買ったのだが、結局、ところどころの空席はもちろん、私の前にも誰も座らなかった。臨時列車だったせいかもしれない。

汽車が走り出す寸前、息を切らして学生が二人、あわてて入ってきた。向こうまで行って、またもどって来ると「あった、あった」と言って、私の隣の窓側にならんですわった。汽車が走りだすと、やがて、二人はやけにすいている車内に気がついたのだろう。函館本線は赤字路線だの、ないだのと議論を始めた。よほど退屈なのだろうと私は思った。

三十分位したろう。いつか雪はやんで雲間にいくつか青空が見え太陽様が赤い頬だけをのぞかしたり隠したりしている。そのうち一面の真白い世界が、チカチカと輝き始めた。

駒ヶ岳は大沼をすぎる頃全身をあらわにする。肌は柔かく、真白で一つの黒点たりともなく、汚れたものをよせつけぬ純潔さをもっている。山全体がすべて雪から成り立っているように感じられる。尾根は汽車の走る方向へゆるやかに流れ、いつか大地と結びついて

いる。

冬の駒ヶ岳は、風景として山の美しさもあろうが、私には美に伴ったそれ以上のものを感じさせる。それは「ふるさとへ帰って来た」という喜びであり、そのすべては、ふるさとへの愛の心であり、あまえる心なのであろう。

今は、まぶしいほどに輝く銀世界に、駒ヶ岳が去ろうとしている。乗客は、もったいないといった顔つきでゆっくりと走る山をみつめる。その顔々には、生き生きとした生への感動がみなぎっている。学生達の話もいつの間にか駒ヶ岳に転じ、ここでやっと意見の一致をみたらしく互いにうなずき合っている。そして私には、無数の雪の結晶が現世界となって輝くようにこらからめぐり合うだろう素晴らしい出来事が脳裏にグルグルと、うず巻き始めたのである。

「朝」

十二期三班　今村　孔久

太陽が山を登りはじめると、自然のすべての万物が呼吸をはじめる。そして太陽が空を登りはじめるころ、万物は氷の表面が少しずつ溶けて流れるようにじっくりと活動をはじめる。

朝

東の空が白みやがて赤く染まる。そして、一日中で一番厳粛な瞬間がやってくる。

「海」おだやかな海、幾億もの宝石がチカチカと笑っている。小舟が宝石をたがやして一直線に走る。ひっくり返された宝石達は、一本の真珠の首かざりを作りまた笑う。宝石が飛ぶ。一つ二つ、真白いつばさを持った宝石が飛ぶ。そしてまた宝石達の中に帰っていった。

彼等は幸福なのであろう。

「空」太陽の白い残骸がある。しかし彼は泣かない。東に太陽が誕生したから。

空に太陽が顔を出すと彼は、頬を赤らめて喜んだ。

彼もやはり幸福なのであろう。

「大地」朝太陽は海にも空にもあたえた力を大地にもあたえた。彼は魔法の弓をもって、幾すじもの矢をはなった。弓は大地に存在するすべてをつらぬき、長い長い黒い血を流さした。その後すぐ、私も含む全世界の万物は、真赤な血潮のゴーゴーと流れ入る音を聞いたのだ。

私は見た。海と空と大地を、そして太陽を。それらはすべて幸福に満ちていた。

今日も、私は、生きているのだ。

この世は金

十二期三班　樋口　満生

「この世は金」、よく耳にする言葉である。

現代の社会において、金で買えない物は殆どないといっていいくらい価値のあるものだ。時には人間の心まで奪ってしまうことがある。「金に目がくらんで……」というのはたいていその実例である。目の前に何億という札束をならべられたら目の色を変えないものは

皆無に等しかろう。このくらい人間生活と金とは深い関係をもっている。お金をたくさんもっていればじょうせずして名誉ある地位に就くことも可能である。たとえその才能はなくとも。

私の母がよく言っていた。「この世は何といっても金」と。これに対し私は「いや、人の心だ」と反発する。が、結局「おまえが人生を知らんからそんなことが言える」と決めつけられてしまう。私自身としても何も金が無価値だとか金の必要性はなしだとは断じて思っていない。ただ「金さえあれば……」というような、何でも金中心的な排他的な考えを否定したのだ。即ち金というものは、人間が使うものであって、人間がつかわれるものであってはならないと思う。

この世には、ある政治家が国あるいは地方公共団体に、多額の金を寄付したというニュースを耳にする。まことに立派な行為だ。

しかし、私はこれらの人達を尊敬しない。なぜならそれらの人々は、その寄付した金を失っても決して生活が崩れるわけでもなし、これらが逆に政治目的にでも使われたら全く「損得なし」いやそれ以上になるかもしれない。私はこのようなことは信じたくないが、すぐ頭に浮かんでしかたがない。それよりも私の心を強く引くのは、毎月毎月自分の給料から若干の金ではあるけれど、自分の母校に送ったり、小さな子供が自分の貯金を全部、公共物を作るのに寄付したりするのに、何か胸が熱くなってくるようなことである。私は後者の方が前者に対して、金額は何万分の一かもしれないがその価値は決して劣るものではないと思う。

そしてこのような考えが、金よりも人間を重視する私にさせるのだろう。この世には、まだ金で買えないものがいくらでもある。絶対にあると私は信じたい。そして金に使われる人間でなく、金を有効に使う人間が私の理想の人間である。

精鋭なる自衛隊へ

十三期一班　長倉　俊一

明治百年に至った現在、世界はあらゆる面において大きく発展している。中でも特に著しい軍事面、また日本においては、国土防衛と平和運動である。

国土防衛については、三次防等で、しだいに強化されつつある。それに伴い平和主義運動も高まっている。一九七〇年、世界の歴史に残るかも知れぬ年も刻々と近づいています。

その前ぶれというべき、羽田空港事件、佐世保の空母寄港反対等の乱闘事件が各地でおこっている。仮にも平和主義を唱えている者が、そのような国の秩序を乱すようなことを、平気でやっているのは、最もにくむべき国賊に等しい。これを家庭にたとえると、自分の親兄弟が、暴漢におそわれているとする。その時は、自分の力では、どうにもならなくても、必死で守ろうとして立ち向かうではないか。そのようなことがあっても、平然と知らぬふりをしておれる人がいようか。それは、絶対にあり得ないことです。

先日、ある所で開いた、とりとめのない話

「市民の皆さん、自衛隊を廃止しましょう。そしてそれに要する予算を世の中のために使いましょう。」と。

さもあたりまえのように呼びかけていた。言いかえれば、家の戸やカギを付けずに

「そんな金があったら家具品を買え、そして戸は開けっぱなしにしておけ。」と、言わんばかりである。

いくら中を良くしても、大切な物を中に入れて、カギもかけずにおけば、それこそ危険なことはない。

旧日本軍では、物を取るものも悪いが、取られる者は、なお悪いと聞いた事がある。

親兄弟の住むこの日本の国土を、美しき山河を、荒らされて平気な者は、いないだろう。ほこり高き、大和民族の住むこの日本国を守る自衛隊、何はさておきまず国を防衛することに目を向けるべきではなかろうか。国防とは、すなわち読んで字のごとし、攻めるのではなく、国を防衛することである。

だから前にも述べたとおり、いま熱にうかされて暴れ回っているものこそ、日本にとって、不要な付属品にすぎない。国土防衛のためなら、あの危険な核兵器を持ち日本は絶対に侵すことのできない強国であるということを示すべきである。

又、今後の日本を担う現在の若者の一部のゴーゴー族とか、フーテン族等に、どれだけの信頼が持てるのだろうか。将来の日本のために、ある期間の強制徴兵制度を設けて、徹底的に鍛え直すべきだと思います。

そして精鋭なる自衛隊をもつ平和な、日本になるよう努めたいものです。

青春をどう生きるか

十三期二班　平山　哲哉

人生が海であるならば、青春はそこに生まれる貝のようなものだ。さまざまな形をもちながらそれは何と愛らしく清く、もろそうに見えてそれぞれに生命の輝きと重みを秘めていることであろう。

青春とは、人生のある個所にはめこまれたバラ色の時期で決してない。青春は若者の心の中にはめこまれているはずなのである。美しい青春と言うものは、若者の心が最も美しく輝く、その光をさしていう言葉ではないかと私は思っている。美しい海には美しい貝が生まれるように、美しい人生を望む若者の心には必ず美しい青春があるはずなのだ。

しかし、美しい青春という言葉はあたらないかもしれない。青春に美しいものと美しくないものがあるだろうか。青春を灰色だの、バラ色だのということができるだろうか。私達は、青春のまがいものに酔いしれてはならない。若いという意識、エネルギーの発散による自由奔放な快感、それらは青春の片りんであってもすべてではない。本物の青春はどんな形であろうと美しいはずである。美しくなければ青春とはいえない。

なぜならばそれは、真剣な若い心にしか育ちはしないからだ。

人間は、青春の時期にこそ最も高く上る力を持っていると私は考える。その力を成すものは若さであり、若さを成すものはあこがれである。極端にいえば、青春の時代に人間は一個の人格を形成する要素をすべて得てしまうのではないかと思われる。青春の時期の真

剣な苦悩や思索や行動が、その後の年月によって重味を増し、深いあらゆる考えや苦悩やあこがれや欲望といったものを、いたずらにおさえたり、みすごしてしまってはならないはずだ。

だが、その前に、これができるならどんなにか私達は、この世のまばゆさにまどわされずに住むであろう。世界で一つの、二度と存在しない自分、永遠に完成されないが、限りない美しさとみにくさとを秘めている自分、それを知り尽くすことは不可能にちかい。

しかし、私達は行なうべきである。深い洞察と強い意志力が、それを助けてくれる。そして、その力は真剣な心から生ずる。若者は自分を知るために、あらゆる方法をとる。スポーツ、旅行、研究、音楽、文学・・・。それらは時に、不完全なものであっても、その底に真剣な姿勢がうかがわれるならば、決して非難されるものではないと思う。

自分を知ることにより、私達は自分の内部にわきおこる欲望や思想や苦悩のどれが本当の輝きをもち、どれが泡のように消えて行くものかを知る。

自分という土地は、もっと大きく広く深いはずだ。だれもそれを耕してはくれない。耕す努力をしなければ、いつかむなしく荒れ果ててしまうだろう。クワを持つ力のあるうちに、土がやわらかく生気をおびている今こそ、私達は耕したい。嵐にうたれることをどうして恐れる必要があろう。また耕し直す力が私達にはあるのだから。不毛に近い土であっても、それを不毛でなくすることもできるはずだ。若さというものは、そのためにあるのではないだろうか。

ところで、青春について考えるとき、若さというものを忘れてはならない。青春から若さをぬいたら、人々はこれほどに青春にひきつけられはしないだろう。若い力や情熱や感覚は生命のきらめきにあふれている。が、同時に若いということは未完成であることも意味する。

しかし、未完成であることは青春の欠点であろうか。いや、刻まれつつある石をみよう。それは未知への希望と純真な出発の決意に満ちている。青春もまた同じに違いない。青春が完全であったなら、なんと退屈なものになるだろう。だが未完成であることの危険性も忘れてはならない。それは若者の焦燥と苦悩をかきたて挫折へ、死へと走らせる。彼らもまた、真剣であることにかわりはないが、余りにも急ぎすぎるのではないだろうか。一方ではそれはまた完成へのあこがれと希望と闘志を若者の心にかきたて、前進する力を与えるのではないか。

私達が自分を正しく知るならば、またそうしようと思うならば、力にまかせて自分を耕し尽くそうとするような、無茶はしないだろう。たとえば隣のゆきわり草が一月に咲いてもひまわりは八月まで待たなくてはならない。もしも、ひまわりが一月に無理に咲いたらどういう結果になるだろう。

だが、自分を知ることは苦しいことだ。むつかしいことだ。それでも私達は、あえてしなくてはならない。それだけの力を私達は秘めているはずなのだ。

こうして私達は、一個の人格を形成していくのであろうと私は思う。しかし、まだ私達は青春の入り口に立っているにすぎない。人々

が残した多くの青春の記録や芸術にふれても、自分の足を一歩ふみださなくては何にもならない。

まず、歩きだすべきである。そして、自分の全身で青春にふれてみるべきである。

私の青春は私だけしか持つことができないのであるから。

休暇の休暇　(2)

十三期通信　上野　繁寿

バスの中はなつかしかった。今にも、顔見知りの人が話しかけて来そうな気がする。人々がこちらを見ているのがはっきりわかる。が一点を見つめたまま知らないふりをしておく。目が痛い。まばたきもしない。目から涙が出てくる。休暇も楽じゃない。

三十分ばかり行くと、いよいよ台地に入った。緑川、御船川とも別れ山の中に入る。曲がりが激しくなった。直線で行けば二百メートル位なのに路上では五百メートルも六百メートルもかかる。

耳をかたむける。ずっとずっと下で川の水の音がする。ドドーッ。ずっとずっと下から聞こえてくる。バスの窓から見おろすと、窓の下のガラスは、谷間の水色とひっついている。—まっ白い。本当にまっ白い。純白こういう言葉はこれから作られたような気がする。そのかすかな水の音と、岩の後ろにある、あの純白さ。全く美しい。やっぱり山だ。おれの住んでいた所だ。秋になれば、この道と谷間までの急な険しい坂に紅葉が出てくる。真紅。バスの左手は全部緑色。

—そら、急ながけ。空から見れば我々の赤い乗合自動車は右手に谷を見て、左手には車輪のゴムタイヤの左端まで迫った山が来、そこの間をごにょごにょ、くにゃりくにゃり走っているわけである。

そしてずっと向こうには九州山脈が見えている。そう、ここが我々の郷土、熊本県内、矢部茶としいたけと赤牛（べべんこ）で有名な浜町である。バスの中は面白かった。

「なんてな。もう雪が降っとっとかな。そら、いかんばい。寒かろたい。おどんたちゃ、いつでん、こたつにきゃあ入っとるばな。そぎゃん、はりきらんちゃ、よかたい。もうすぐ正月でがな。そぎゃん、ひっとつけみにゃーこつぁいわんで、はよバスかるおりんなはる。」

「ああ、そぎゃ、そぎゃ、あんたがいつまでん、きゃあしゃべるけんたい。おごんがきゃあおりる停留所は、きゃあすぎたばな。」

「運転手さーん。ちょっと止めちくだはる。」

キ・キキキキーッ。バスは止まった。おおきなふろしきをかついだ五十過ぎのおじさんは、バスからゆっくりと降りた。腰にぶら下がった汚れた手拭いと薄汚れた地下たびが目に映った。やがてまた、バスは動いた。

「宮本くーん。ご免下さい。文昭くーん。」

彼の家の戸を叩いた。

「あ、上野さんたい。文昭、上野さんの来とらすよー。」

中がドタドタしてきた。ガチャガチャガチャ。とがあいた。顔が見えた。—そう、顔の広い、ちょっと目の細い、ほお骨の出た。でもちょっと変わっていた。中学時代は短髪であったが、今の彼は油がついて波がある。

「オース！……ま、上れよ。ほ、ほ。」
「うん、すまんね。そんなら上がるけんね。失礼します。」
忙しそうに座ぶとんと応接台を持って来た。そしてすぐお菓子が出た。
「いつ来たっつや。ほー。むしゃんええね。じゅんが言わんもんだけん、言えば迎えぐらい来ってから。で、いつまじおっと。」
「うん、えーとね、五日。来年のいつかまじ。」
「なーんや、夏とは又違うじゃにゃあーや。今度の制服は黒たい。よかねー。」
「なーん。そぎゃん言うなよ。慣るっとそぎゃんにゃーて。じゅんが、いっぺん着っとわかっとばってんね。」と答えた。
「そるばってん、あんたえらーい。よか男になったな。男らしかばい。よか、よか。」
「そぎゃん、言うなよ。おら、恥ずかしかたい。」
時間がたった。もう夕方の五時半頃であった。
「んんなら、もう帰るけん。……今から二週間おっとだけん、いつでんええけん、遊びにけよ。じゅんも、どうせ二週間ぐらいしか、こっちにはおらんとだろ。市内の商大付属はいつかるはじまっとや。」
「来年の十日までだ。」
「だろ、だけん遊びにけよ。」
「うん。」
「んなら。」
夕日だった。かきねをまわって道へ出た。かきねは丁度、自分の背たけほどだった。彼の方から見れば、白い制帽カバーが出たり、ひっこんだりして見えたことだろう。
休暇の際はなした言葉だけ考えてみても、全く面白い。
楽しい休暇だったと思っている。

初　恋

十三期三班　吉田　哲夫

「　初　恋

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花のある君と思ひけり
やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたえしは
薄紅の秋の実に
人こひ初めしはじめなり

以下　略　」

私はこの詩が大変好きである。初恋という神聖な行いは人間なら、いや動物なら一度は経験していると思う。私も例外ではない。
私は気が多いせいか、おもいおこしてみると、小学校以前からあるようだ。しかし私が本当に女性のことで悩みだしたのは中学一年の時であった。私はクラブ活動で陸上部に入部した。同じクラスの女子が一人陸上部の中にいた。少し色が黒いがとてもかわいらしく

見え、笑顔がまた非常によかった。同じクラブなので学校の帰りがよく一緒になる。都合よく帰る方向が二人一緒であった。そのうちにクラブが終わると、どちらともなく教室に待つようになり、ほとんど毎日一緒に帰りだした。この頃からクラブに出るのが楽しくなり、タイムも伸びて来だした。大会の時も彼女の声一つで私の順位が変わってくる。

ある日、同じクラスの女の子が、私と仲の良い男友達を四名Xmasパーティに招待した。もちろん私は行った。と見ると彼女もなんと来ていた。後で聞いてみると女子四人じゃ楽しくないので、適当に合う男子を選んで招待したとのことで、私は又希望に胸ふくらんだ。二年・三年と相変わらずであった。

高校に入ると学校が変わったので、中学の時ほど話さなくなったが、電車の駅で彼女に会うとその日一日が楽しくなった。

そして私はこの生徒隊に来た。生徒隊に行くことは彼女にだけは言わずにたった。ニ～三週間して彼女から手紙が来た。私は有頂天になってさっそく返事を出したが、二度と再び手紙はこなかった。休暇に帰っても陸上の合宿やキャンプでいつもいない。何かの本で「初恋は片思いが一番よい。初恋は清く、はかない過去の想い出である。」とあった。私も片思いだったので、これが初恋だと判った。

しかし、あまりにもはかなすぎる感じもする。しかし、これは初恋、第一回目の恋である。まだまだ未来に二度目、三度目と情熱的恋が私の前に泳いでいると思うので、希望を捨てず、ファイトで前進すれば、そのうちきっと何とかなるだろう。

黒い虫

十三期ニ班　福留　和久

―そして今、この虫は触角をこきざみにふるわせているだけだった。黒い虫の体からぶきみな光が規則正しく光っている。体を百二十度にそらし、何かを訴えているようだった。時々体全体がクッ、クッと波うつ。後部のうすいセロファン状の羽根が、この虫の運命を暗示している。

ごめんよ・・・・・きみをたたく気はなかったんだ。また上半身がのめった。腹部がうなっている。きゅうに半回転したかと思うと、ハタととまり、ますます体をそらせる。

ごめんよ、ごめんよ。

虫はとうとうあおむけになってしまった。苦しそうなかっこうで体をよじっている。触角はもうたれてしまった。足が思い出したように動く。

ごめんよ、許してくれ。虫はさらにうろたえている。動き続ける。触角は、たれているが、足の動きは以前より活発だ。からだじゅうでいたみをたえている。片一方の触角は半分に折れ、もう一つは、だらしなくわん曲し、紙にへばりついている。

動きがにぶくなってきた。

動け！動け！

やがて虫は動かなくなってしまった。

乳白色の帳面の上にあざやかな黒と少数の光の点を残して・・・・・死んだのだ。

無　題

十三期三班　穐廉　龍夫

ある雑誌にある漫画家の書いた提言を読みました。その中に、

『なせばなる。なさねばならぬなにごとも。
　　ならぬは人のなさぬなりけり』

の和歌を思い出しながら、彼女は、人生の困難を乗り越えてきた。というふうな意味の文を読んだ時、私は、何事においても、信念を持ってぶちあたれば、困難という壁に向かって正々堂々と進んで行くことが出来るのではないかということを考えました。私たちがこれから歩もうとしている人生のどこかでどんな困難が待ち受けているかもしれない。生徒期間中に、卒業してから、いつ、どんな場面にあたるかもしれない。その時は、自分の信念によって、打ち砕き、そこに、満足感と幸福感、勇気又はそれらのどれにもあてはまらない何かを感じ、そしてまた一段一歩と前進するのではないかと思う。

私は「こういう場面があってこそ、人間生きる楽しみが生まれてくるのではないだろうか。」と思うのである。

伊勢志摩国立公園

十三期三班　別所　和夫

名古屋から、近畿日本鉄道ビスターカーで一時間半又名古屋から水中翼船で約五十分、大阪からはビスターカーで約二時間。鉄道は宇治山田が終着である。　しかしその手前の伊勢で降り、伊勢神宮へと進もう。

ここは外宮、内宮と別れており、建物もすこぶるりっぱである。江戸時代から参拝客が絶えなかったそうである。名物は赤福もちである。

次は伊勢志摩ドライブウェイを通って鳥羽へと進む。途中ドライブウェイから見る海は特別に美しい。江田内の海とは月とすっぽんである。鳥羽はリアス式海岸で有名なところ。又真珠のメッカでもある。かの有名な三木本氏の言葉

「世界中の女の首をしめてやる。」

そのことばも、ほぼ達せられたと思う。

鳥羽港から船で、真珠島、イルカ島等島めぐりもできる。松島のように小島の多いところである。鳥羽の水族館には、日本でも珍しい「魚の病院」がある。魚も人間並みになってきたようだ。

帰りは、鳥羽駅から国鉄線で帰ろう。まだスチームの機関車が走っている。（呉線と同じ）途中二見でおり、海岸沿いに歩くと二つの島が見える。「夫婦島」である。二つの島はしめなわで固く結ばれている。いつまでも、いつまでもはなれることはないだろう。

元旦には、この二つの島の間から太陽が登る。なんともいえないいい気持だ。

以上が、国立公園の概略である。

少しでも興味のわいたかたは、一度でもいいですから遊びに来て下さい。

海と島の美しいところです。

小笠原バンザイ

十三期三班　山田　純一

二十三年間の故郷を離れた生活は、長く苦しい年月だった。そして今、やっと帰れる日が来た。その間、かって額に汗して開墾した田畑はジャングルと化した。しかし彼らは嬉々として帰っていく。

佐藤総理の訪米によって十一月十六日、小笠原施政権の返還確定。このニュースを聞いた小笠原島民はもちろん、本土の人々の喜びは想像もできないほどだった。

土地所有権、借地権、帰島者に対する援護措置の問題等、いろいろ諸問題はあろうが、いずれにせよ、小笠原の返還は、日本民族の喜びであり、その感激は表明のしようがないのである。

昭和十九年、全島民が強制疎開令を受けて着のみ着のまま本土に疎開したのであるが、その翌年終戦となり、翌二十一年には占領軍総司令部の覚え書きによって小笠原諸島は行政分離の措置を受け、欧米原住民百三十五人のほかはいっさい帰島を認められなかった。

こうして小笠原は完全に米国の施政下におかれた。小笠原は、昭和二十八年に復帰した奄美群島や、沖縄とは異なり、本土に疎開した住民は、その意志により、すべて帰還ということが認められず、特殊の取り扱いを受けなければならなかった。もちろん島民は、これに、全島民一丸となって小笠原島帰郷促進連盟を組織し、占領軍総司令部をはじめ米政府、日本政府、国会等に対し帰島要請の運動を行い、百数十回にもわたり陳情をくり返した。しかし島民は、現地民にまで帰島反対の運動を起こされるという、まったく不利な立場だった。

それでも小笠原引揚げ島民は、このようなことにも決して希望を失うことなく、相手は人道と自由を尊重するアメリカである。必ず近い将来、島は我々の手に帰ってくることを信じて毎日貧困と戦ってきた。だが、島民の生活は困窮の一途をたどるばかりとなった。

昭和二十八年、東京都総務局地方課との小笠原帰郷促進連盟による調査によると、引き揚げ前にはふつうの生活のできるていどのものが九十三％であったが、引き揚げ後の昭和二十八年には十五％に激減しており、引き揚げ当時の島民の総数七千七百十一人のうち総和二十八年五月までに三百級十九人が死亡した。その四割にちかい百四十七人が生活苦のための異常死亡者であると結果が出ている。この数字を見ても、いかに小笠原島民が、引き揚げ後苦難の道を歩んできたかがわかる。それでは、どうして小笠原島民は、このような困窮に追いこまれたのであろうか。

一つに「帰島実現の夢」である。島民は、近い将来必ず帰島は実現されると深く信じていた。したがって本土においての生活の基盤を作ろうとするものがほとんどいなかったのである。では、小笠原島民が、こんなに帰島したがっている宝の島「小笠原」とはどんな島なのだろうか。

一口にいって、本土と比べものにならないほど住みよいところであるらしい。気候風土に恵まれ、物資は豊かであり、生活に苦労のない島である。常夏の小笠原は、バナナ、パパイヤ、パイナップル、ブンタン等の熱帯果実が年中実り、数々の野菜とともに本土六大都市

に移出していた。いわば東京の天然の温室ともいうべきところである。また島の周辺は、魚族の宝庫であり、マグロ、カツオ、サワラ、カジキ、ムロカジなど大量の漁獲があり、二千トンの定期船がこれを積んで本土に送っていた。そのほか、緑亀の味は格別で大きなものは四・五十貫もあり、四・五月頃になるとこの亀を数頭とらえて海岸で亀料理をするものである。小笠原の島民はこうした往時の思い出話に帰郷の夢を語り合いながら、引き揚げの後の苦しい生活に堪えてきたのであった。

小笠原島民引き揚げから二十三年。今、その島へ再び帰島しようとしている島民。島民は今何を考え何を感じとっているのだろう。

ジャングルと化した小笠原を、再び宝の島と化すには、多くの問題がおきてくるだろう。しかしこれも国の力によって充分解決できるだろう。今はただ、長い間の苦難に耐えしのんできた島民に、心から「オメデトウ」と言いたいだけである。

感　想

十三期三班　中島　正行

日曜日に二十六年前の戦争映画を見た。

「ニイタカヤマノボレ」、これは日本が敗戦国となり、軍の幹部とか、時の内閣の各大臣、そういったいわゆる戦争犯罪者といわれる人が、勝戦国から集まった代表により裁判を受けるところを、戦争の過程をもり込みながら描いたものである。

この映画を見ていると、戦いに勝ったところのアメリカ等にも犯罪者に値する人間がいるはずなのに、負けた方ばかりを責めて、しかも身分たちの罪を、他人を強く罰することによってのがれようとしているように思えた。

戦争をやろうとするなら絶対負けてはいけない。負けた方は勝った方のいいなりになり、それがいいことならばよいが、逆だった場合はみじめな思いをするだけである。この映画が犯罪者に同情的であったからこう思ったのだろうか？

主観的、客観的の存在についての考え

十三期二班　堤　香志郎

主観的、客観的とは、何を意味するのだろうか。辞書で解すれば主観的とは、自分だけの見方にかたよる様子。客観的とは、外から自分をみつめる様子。と書かれている。

では、この二つの存在はどうだろう。前者と後者は互いに平行線をたどって争っているものだろうか。そのように考えてそれを追求していけば、主観的考えで自分に自信をつけ、客観的考えでその自信の走り過ぎを抑制し調整していっているのだというところで、考えを拒まれた。

しかし、平行線をたどらないとすれば、主観的考えの一歩成長したものが客観的な考え方に移ると、なんだか自信をなくして自分の短所だけが見出られるからである。

たとえば、主観的な考えで思想などをする時、最初は自分を中心として考えているため、自分の考えはぜったいだと自信をもてる。

もし他の人に、それについて少しでも批判されればその人と不愉快な関係に陥りやすくもなる。

ところがちょっとの間でも、外から自分の立場を自分自身でみつめてみれば、ずいぶんむちゃな、また狭い考えをしている事に気がつき、心がぐらつきはじめ、ついには自信をなくしてしまうような傾向が多い。これは自分の意志が弱いといえばそれまでだが、ただ意志が弱いばかりではないともいえる。

それはあるものを完全にマスターした要領を思い出してやればたちまちなおることもできるし、そこで一段と考えを深めることできるからだ。

このように考えると、主観的な見方や考え方から客観的な考え方に移る場合、主観的な考えで、あるものを完全になしとげ、それから客観的な考えで、それの余分なものをけずり落としていく、そこに私達の成長の一つでも見い出されるのではないだろうか。

私たちが社会のつながり、団体的生活を営むうえにおいて、客観的な考え方は特に重要だといわれているが、まさにそのとおりだといえよう。

夜空で一人考えたこと

十三期通信　大丸　和英

ただ一人星空に向って大きく深呼吸してみた。ああなんともいえない、いい気持だ。今何個かの星が同時にまたたいた。青い光を放つ星、赤い光を放つ星、これらの星の光を今私はながめている。

しかし、今私の目に映っている星はごく限られた一部のものにすぎない。まだ現代の人類の科学で発見されていない星もいくらでもあろうだろう。

果てしなく広がった宇宙のすみっこに存在する地球、この地球上に住む人類の科学がいかに進歩しようと宇宙の構造を知り尽くし、それを征服することは不可能であろう。いやそれは決して不可能でないかもしれない。なぜなら昔の人にとって空を飛ぶということはとてつもない夢であったように、宇宙を征服するなどということは、なるほどとてつもない夢だ。夢であるからそれが実現できないと誰が断言できようか。

二十一世紀の時代が裸で獣を追いかけていた原始社会をみるように、いつしか二十一世紀が原始時代と同じように思える時代がくるころに、もしかすると実現しているかも知れない。ああ、一個の星が流れて消えた。地球もあのようなはかない姿になるのではないだろうか。とにかくこの宇宙は不思議なことばかりだ。

あっ、もう巡検五分前だ。明日も掃除が終わったらまた屋上へ来て、星を見よう。

親子関係

三曹　　西山　建生

親と子の関係は、いつの世代でも大変デリケートであり、形では表面に出せないものである。これを三つに分類して、第一には保護過剰、第二は男性の女性化。第三は世代間の対立、ギャップの増

大という三点である。

第一の保護過剰とは、かまいすぎということでしょう。

現代の若い主婦は昔のように一ダースも二ダースも子供を生みません。せいぜい一人か二人というのが常識となってきました。少人数になれば手がゆき届くわけである。一人っ子の場合はかまいすぎということになって親が「ああしなさい、こうしなさい」とかゆいところへ手が届くように保護過剰になっていかざるを得ない。それが一つの問題点だと思います。従っていつまでも社会的離乳が出来ない子が多いのではないだろうか。

第二は男児の女性化である。

現在の父親の不在によって家庭内の一切のリーダーシップは必然的母親がとるということになりましょう。今日の言葉でカカア天下である。子供の教育は一切母親の仕事であり、責任であるという実際上になっています。女の子の場合それでよいとして、男の子の場合だとどうしても現在の家庭では父親の影響力がうすくなってまいり、男の子の弱さというものが目立ってきている。

現在の家庭では男子固有のたのもしさが十分に養育できてないのではないだろうかと思う。つまり家庭生活において子供への感化力をあまり持たなくなっているのではないだろうか!!女の子の教育も母親オンリーということになり、男の子は犠牲になる。結局は女性化するという傾向になるといわれます。その点生徒達はこの江田島にきて男性固有のたのもしさを身につけることが出来、幸せだと思う。又国民から大いに期待される自衛官になるでしょう。

第三には世代間の対立、ギャップの増大ということです。

現代の社会が激動していることによって親子間にも考え方、意見のズレというものが増大してとくに子供の恋愛問題、就職の問題などで爆発すると思います。そこでせっかくよい家庭、親子関係も一気に気まずいものになってしまう悲劇の公算も大きい。知らず知らずのうちに親子間にできてしまうギャップをどうして縮小していくかという平生の努力と話合いが必要と思います。

生徒生活においても同じことがいえると思う。

最後に申しのべたいことは、分隊長、分隊士、班長は保護者の立場として、常日頃君達のために昼夜努力されていることを忘れてはならないと思う。

編集後記

皆さんの絶大なる御協力でこんなに立派な文集を発刊することができました。何をやるにも協力というものは、不可欠なものです。これをいい教訓としてこれからもどしどし投稿してください。期待しています。

一海士　丸尾　秀喜

今回の作品は意欲的なものが多く、又作品も数多く集まり前三号の文集に比べ、質量ともに充実したものになったと思う。

一海士　藤原　陽

初めて「編集」という仕事に手をつけた為か、何かにつけとまどい不具合な点が多かったことと思います。こんな悪条件の中で、文集第四号が発行されたのですが、編集委員をはじめ、みなさんの多大なる御協力にりょい、素晴らしく内容の充実したこの文集を発行することができ、嬉しく思っています。

編集部長　梶原　英樹

毎度のことながら高学年になるにつれて作品が少なかったことは、何か物足らない感じがする。それと残念なことにもう一つ、一般に原稿が読みづらかったということです。これは、編集に余分な時間を費し、文集作成発行上、遅れる原因ともなりかねません。もう少し、生徒総員が文集に対して意欲を燃やしてほしかったように思います。内容は前回までと比して格段と充実し、素晴らしいものであると信じています。

編集部一同

編集部長
海士長　十一期一班　梶原英樹

各班編集委員
十一期一班　比留間新吉
二班　宇野省二
三班　佐々木憲四郎
十二期一班　伊藤修
二班　平野清文
三班　太田逸男
十三期一班　吉田修
二班　阪口正次
三班　山田純一